

# 弁ヶ谷遺跡 (No. 249)

材木座六丁目 640 番 2・3 地点

## 例 言

1. 本報告は「弁ヶ谷遺跡」内、材木座六丁目 640 番 2・3 における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
  2. 調査期間 2009 年 6 月 15 日～同年 8 月 28 日  
調査面積 49.5㎡
  3. 本調査地点の略称は調査時は BZ6640 とし、整理作業時に ZM0905 とした。
  4. 担 当 者 馬淵和雄  
調 査 員 本城裕 椎木達哉 高橋亮 根本志保  
作 業 員 沼上三代治 倉澤六郎 小口輝男 片山直文 渡辺保夫
  5. 本報告作業分担  
遺構図整理 根本志保  
遺物実測 森谷十美 岩崎卓治 小野夏奈 根本志保  
同墨入れ 森谷十美 岩崎卓治 根本志保  
同観察表 森谷十美  
同写真撮影 須佐仁和 根本志保  
写真図版 遺構 根本志保  
遺物 森谷十美  
原稿執筆 根本志保  
編 集 根本志保
  6. 出土遺物、図面、写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管する。
  7. 本報の凡例は以下の通りである。
- 挿図 縮尺：全側図：1/60 遺構図：1/60・1/40 遺構図：1/1・1/3・1/6  
数 値：文章中の（ ）数値は復元径を示す。  
遺 構 図：遺構の標高は海拔高の数値を示している。  
遺 物 図：黒塗りは土器に付着した油煙煤を表現している。  
編 年：常滑 中野晴久 2012『愛知県史』による。  
：瀬戸 藤沢良祐 2008『愛知県史』による。  
：貿易陶磁 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 15』による。

# 目 次

## 本 文 目 次

第一章	調査地点の概観	121
	1. 位置と立地	
	2. 歴史的環境	
第二章	調査の概要	128
	1. 調査の経過	
	2. 測量軸の設定	
	3. 堆積土層	
第三章	検出された遺構と出土遺物	133
	1. 第Ⅰ面の遺構と出土遺物	
	2. 第Ⅰb面の遺構と出土遺物	
	3. 第Ⅱ面の遺構と出土遺物	
	4. 第Ⅲ面の遺構と出土遺物	
	5. 第Ⅲb面の遺構と出土遺物	
	6. 第Ⅳ面の遺構と出土遺物	
	7. 表採遺物	
第四章	まとめと考察	179
	1. 遺構の変遷	
	2. 出土遺物と計量比について	

## 挿 図 目 次

図1 周辺の遺跡	122	図22 第Ⅱ面 落ち込み2	153
図2 中世鎌倉地形図	124	図23 第Ⅲ面全体図	154
図3 明治15年頃の調査地点周辺	125	図24 第Ⅲ面 建物4	155
図4 調査区設定図	129	図25 第Ⅲ面 建物4の柱と礎板	156
図5 堆積土層図	131	図26 第Ⅲ面 柱穴列	157
図6 第Ⅰ面 全体図	132	図27 第Ⅲ面 木樋出土状況	158
図7 第Ⅰ面 常滑据甕	134	図28 第Ⅲ面 落ち込み3	159
図8 第Ⅰ面 建物概念図	135	図29 第Ⅲ面 柱穴	160
図9 第Ⅰ面 建物1	136	図30 第Ⅲ面 直上出土遺物	160
図10 第Ⅰ面 建物2	138	図31 第Ⅲ面 出土遺物	161
図11 第Ⅰ面 礎石列	139	図32 第Ⅲb面 全体図	162
図12 第Ⅰ面 落ち込み1	140	図33 第Ⅲb面 井戸1	163
図13 第Ⅰ面 土坑・柱穴	142	図34 第Ⅳ面 全体図	166
図14 第Ⅰ面 直上遺物	144	図35 第Ⅳ面 池1(1)	167
図15 第Ⅰ面 出土遺物	144	図36 第Ⅳ面 池1(2)	168
図16 第Ⅰb面 全体図	147	図37 第Ⅳ面 暗渠・落ち込み4	169
図17 第Ⅰb面 土坑	148	図38 第Ⅳ面 暗渠	170
図18 第Ⅰb面 出土遺物	150	図39 第Ⅳ面 溝1	171
図19 炭化層出土遺物	150	図40 第Ⅳ面 出土遺物	171
図20 第Ⅱ面 全体図	151	図41 表採遺物	172
図21 第Ⅱ面 建物3	152	図42 遺構変遷図	180

## 表 目 次

表1 周辺の遺跡	123	表7 遺物観察表(3)	175
表2 第Ⅰ面遺構観察表	145	表8 遺物観察表(4)	176
表3 第Ⅰb面遺構観察表	149	表9 遺物観察表(5)	177
表4 第Ⅲ面遺構観察表	164	表10 遺物観察表(6)	178
表5 遺物観察表(1)	173	表11 出土遺物計量表(1)	181
表6 遺物観察表(2)	174	表12 出土遺物計量表(2)	182

## 図 版 目 次

<p>図版 1 ..... 184 海を望む（弁ヶ谷の北の山上から） 和賀江島を望む（弁ヶ谷の北の山上から）</p> <p>図版 2 ..... 185 新善光寺の谷戸を望む（南から） 近景（南から）</p> <p>図版 3 ..... 186 第1面全景（北西から） 常滑据甕（北から）</p> <p>図版 4 ..... 187 常滑据甕 上層（南西から） 常滑据甕 下層（北東から） 常滑据甕 掘り方（北東から）</p> <p>図版 5 ..... 188 第 I 面建物 1（北西から） 第 I 面土坑 1（南西から） 第 I 面土坑 11（北西から） 第 I 面土坑 4（北から） 第 I 面土坑 5（東から）</p> <p>図版 6 ..... 189 第 I 面土坑 5 土層堆積状況（南西から） 第 I 面土坑 4 土層堆積状況（南から） 第 I 面土坑 2（南東から） 第 I 面土坑 7（東から） 第 I 面柱穴 24（南から） 第 I 面落ち込み 1（東から）</p> <p>図版 7 ..... 190 第 I b 面全景（北東から） 第 I b 面部分（北から） 第 I b 面方形土坑（南東から）</p> <p>図版 8 ..... 191 第 II 面全景（根太木痕・南から） 第 II 面全景（南から）</p> <p>図版 9 ..... 192 第 II 面全景（南東から） 遺物出土状況 作業風景 第 II 面礎石列（南から）</p> <p>図版 10 ..... 193 第 III 面全景（南から） 第 III 面落ち込み 3（東から） 第 III 面落ち込み 3（南西から）</p> <p>図版 11 ..... 194 第 II 面の礎石建物と第 III 面の掘立柱建物が 踏襲されている様子（P 137・南東から） 第 III 面柱穴 140（南から） 第 III 面柱穴 150（北西から） 第 III 面柱穴 146（南西から） 第 III 面柱穴 241（南から）</p> <p>図版 12 ..... 195 第 III 面柱穴 152（南西から） 第 III 面柱穴 160（南西から） 第 III 面柱穴 137（南から） 第 III 面木樋（南から） 第 III 面木樋（北から） 第 III b 面井戸 1（南西から）</p>	<p>図版 13 ..... 196 第 IV 面全景（南西から） 第 IV 面全景（北西から）</p> <p>図版 14 ..... 197 暗渠周辺（池・暗渠・溝・川・南から） 第 IV 面溝 1（北から） 第 IV 面池 1 土層堆積状況（南から）</p> <p>図版 15 ..... 198 第 IV 面池 1 遺物出土状況・櫛（南から） 第 IV 面池 1 遺物出土状況・羽子板（南から） 第 IV 面暗渠（南から） 第 IV 面池 1 遺物出土状況・縄 作業風景</p> <p>図版 16 ..... 199 第 IV 面暗渠（南西から） 第 IV 面暗渠（蓋を取った状況・南西から） 調査区北壁堆積土層（西半部・南西から） 調査区北壁堆積土層（東半部・南西から） 調査区南壁堆積土層（東半部・北東から） 調査区南壁堆積土層（西半部・北東から）</p> <p>図版 17 ..... 200 図 7 第 I 面据甕</p> <p>図版 18 ..... 201 図 9 第 I 面建物 1 図 10 第 I 面建物 2 図 12 第 I 面落ち込み 1 図 13 第 I 面土坑・柱穴</p> <p>図版 19 ..... 202 図 14 第 I 面直上 図 15 第 I 面出土遺物 図 17 第 I 面出土遺物 図 18 第 I b 面出土遺物</p> <p>図版 20 ..... 203 図 19 炭化層出土遺物 図 20 第 II 面出土遺物 図 21 第 II 面礎石 図 22 第 II 面落ち込み 図 24 第 III 面建物 4</p> <p>図版 21 ..... 204 図 25 建物 4 柱・礎板</p> <p>図版 22 ..... 205 図 28 第 II 面落ち込み 図 29 第 III 面柱穴 図 30 第 III 面上出土遺物</p> <p>図版 23 ..... 206 図 31 第 III 面出土遺物 図 33 第 III b 面井戸 1 出土遺物 図 35 第 IV 面池 1 出土遺物</p> <p>図版 24 ..... 207 図 35 第 IV 面池 1 出土遺物 図 36 第 IV 面池 1（2）出土遺物 図 39 第 IV 面溝 1 出土遺物 図 40 第 IV 面出土遺物</p> <p>図版 25 ..... 208 図 41 表採遺物</p>
--	---

# 第一章 調査地点の概観

## 1. 位置と立地

調査地点は「弁ヶ谷遺跡 (NO.249)」の範囲内、鎌倉市材木座六丁目 640 番 2・3 に所在する。材木座海岸に程近い浄土宗光明寺の北側、東側は逗子市小坪との境の山裾に開析された谷戸「弁ヶ谷」の開口部の中央付近に位置する。上本進二の「鎌倉・逗子地形発達史」によると鎌倉時代この辺りは谷底平野・山麓平野にあたる (上本 2000)。現在は住宅により視野が遮られているが海岸は 200～250 m 程の近くにある。かつては浜地の縁辺とされていた位置ではなかっただろうか。

「材木座」は市街地東南部に位置し、北辺は JR 横須賀線を境に大町と、西辺は滑川を隔てて由比ガ浜と、東辺は名越山塊を挟んで逗子市と、南は材木座海岸と接する。

近世以前の材木座地域西側は海岸の砂堆を除いて滑川河口に近くに形成された沼沢地もしくは低湿地であった。明治時代に名越隧道掘削に伴う土砂で埋め立てられ、現在のような居住可能な環境となった。

## 2. 歴史的環境

### 鎌倉時代以前の鎌倉東南部一帯

今回の調査では縄文時代土器 1 片、古墳時代後期の土器片、奈良・平安時代の土器片が多数出土している。周辺の遺跡からは縄文時代土器は地点 18 から出土している。他に地点 39 からは縄文時代後期の土器の出土がある。地点 43 からは弥生時代後期から古墳前期、奈良・平安時代の土器の出土がある。古代の遺物は地点 2・3・5・17・19・23・33・44 からの出土があり、このうち地点 17 では古代の大型掘立柱建物の検出がある。報告者から水陸両方の交通・運送に関わる機関とそれに付随する建物 (居館等) と指摘されている。この遺跡の東隣には康平六年 (1063) に源頼義により京都の石清水八幡宮を勧請した八幡宮若宮 (元八幡) がある。

宝亀二年 (771) に改編されるまで東海道は鎌倉を通過していた。ルートは諸説あり、鎌倉に入るまでには二説ある。まず相模湾の海岸べりを東進し、稲村ガ崎を通過するルート (野口 1993・馬淵 1994)。と、藤沢市北部から南下し大仏坂付近から入ってくるルート (木下 1997)。鎌倉に入ってから、下馬四ツ角で若宮大路を横断し現県道鎌倉・葉山線を進むとする説 (高柳 1959)。とその一本南の断続的に残る東西道を指摘するルートがあり、その先は大町四ツ角から東に直進して名越山塊に至る道、大町四ツ角から南に折れて小坪に向かう道などの説がある。後者だとすれば、調査地点にもほど近い弁ヶ谷の谷開口部を通過することになり興味深い。また、鎌倉に入ってからルートでいえば、地点 17 や、元八幡の存在などからこれらの前面を通る道は鎌倉幕府の都市整備以前から存在する主要な道路と考えられ、東海道の一部と踏んでもよからう。

### 鎌倉時代以降の様相

弁ヶ谷はかつての名越の領域に含まれる。「名越」は貞享二年 (1685 年) 刊の『新編鎌倉志』に「大町の四辻より、山随て南の材木座に至るまでの東方を、皆名越という」とあり「名越」は市街地の西側一帯を指す「甘縄」に対するように東側一帯を含む広い範囲を指している。後述するが弁ヶ谷には「新善光寺」という寺院があった。この寺院に関連して、『吾妻鏡』正嘉二年 (1258) 五月五日条に、尾張前司 (名越時章) の「名越山庄」が「新善光寺辺」にある、と割注があり、また延慶三年 (1310) には金沢実時の「名越新善光寺下毘沙門堂入地」が確認されている (『東寺百合文書』リ)。このことからみても、弁ヶ谷が名越に属していたことは確実である。



図1 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

## 弁ヶ谷遺跡 (NO. 249)

地点	地番	報告書 / 他
1	材木座六丁目 640-2	調査地点
2	材木座四丁目 336-7	宮田真・諸星真澄 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
3	材木座六丁目 643-4・5	馬淵和雄 2009『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会
4	材木座四丁目 594	田代郁夫・原廣志 1991『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩落対策事業に伴う発掘調査報告書』弁ヶ谷遺跡内やぐら群発掘調査団
5	材木座四丁目 332-1	宮田真・森孝子 2007『弁ヶ谷遺跡発掘調査報告書』(株)博通
6	材木座六丁目 643-3	齋木秀雄 2009『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 鎌倉市教育委員会

## 弁ヶ谷やぐら群 (NO. 085)

7	材木座四丁目 542	鈴木庸一郎 2000『かながわ考古学財団調査報告 94 弁ヶ谷東やぐら群』(財)かながわ考古学財団
8	材木座四丁目 10-14	依田亮一・他 2000『かながわ考古学財団調査報告書 98 弁ヶ谷やぐら群』(財)かながわ考古学財団
9	材木座四丁目 594-14	滝沢亮 1986『相武古代研究Ⅱ』相武考古学研究所

## 材木座町屋遺跡 (NO. 261)

10	材木座六丁目 647-8 他	齋木秀雄 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
11	材木座四丁目 260-1	松尾宣方・田代郁夫 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6 鎌倉市教育委員会
12	材木座一丁目 890-7	汐見一夫 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
13	材木座六丁目 760-1	大河内勉・伊丹まどか 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17 鎌倉市教育委員会
14	材木座二丁目 217-6	瀬田哲夫 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』11 鎌倉市教育委員会
15	材木座四丁目 256-1	野本賢二・汐見一夫 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18 鎌倉市教育委員会
16	材木座一丁目 144-3	木村美代治 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7 鎌倉市教育委員会
17	材木座一丁目 910	森孝子 2001『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』材木座町屋遺跡発掘調査団
18	材木座三丁目 364-1	馬淵和雄 1997『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会
19	材木座一丁目 921-5	齋木秀雄・根本睦子 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
20	材木座三丁目 62-19	齋木秀雄・瀬田哲夫 2008『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会
21	材木座一丁目 889-4・5	齋木秀雄 2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24 鎌倉市教育委員会
22	材木座三丁目 164	齋木秀雄・熊谷満 2011『材木座町屋遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会
23	材木座五丁目 462-2	宮田真・滝沢晶子 2012『材木座町屋遺跡 (NO. 261) 発掘調査報告書』(株)博通

## 新善光寺跡 (NO.279)

24	材木座四丁目 573-1	福田誠 2004『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20 鎌倉市教育委員会
25	材木座四丁目 579-8	原廣志・山口正紀 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』29 鎌倉市教育委員会
26	材木座四丁目 579-4	山口正紀 2014『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』30 鎌倉市教育委員会

## 長勝寺遺跡 (NO. 313)

27	材木座二丁目 2162-2	大三輪龍彦 1978『長勝寺遺跡』(株)かまくら春秋社
28	材木座二丁目 2168-3	田代郁夫・土屋浩美 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15 鎌倉市教育委員会

## 能蔵寺 (NO.314)

29	材木座二丁目 303	大三輪龍彦 1993『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』2 鎌倉市教育委員会
30	材木座二丁目 287-1	大河内勉・伊丹まどか 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19 鎌倉市教育委員会
31	材木座二丁目 274-4	馬淵和雄 1995『能蔵寺跡』鎌倉市教育委員会
32	材木座二丁目 294-3	原廣志・福田誠 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会
33	材木座二丁目 293-2	齋木秀雄 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』23 鎌倉市教育委員会

## 光明寺旧境内遺跡 (NO.316)

34	材木座六丁目 854	齋木秀雄 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』I 鎌倉市教育委員会
35	材木座六丁目 846-1	齋木秀雄 1980『光明寺裏遺跡』東京都北区教育委員会
36	材木座六丁目 846-1	齋木秀雄 1986『浄土宗大本山天照山蓮華院光明寺』大本山光明寺
37	材木座六丁目 855-21	福田誠 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会

## 新善光寺跡内やぐら (NO.335)

38	材木座四丁目 542-16	田代郁夫・原廣志・福田誠 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書 —中世墓の発掘調査—』新善光寺跡内やぐら発掘調査団
----	---------------	--

## 名越方谷遺跡 (NO. 231)

39	大町四丁目 1901-16	宮田真 2003『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・(有) 博通
40	大町四丁目 1888	原廣志・山口正紀 2012『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 鎌倉市教育委員会
41	大町四丁目 2395-2	宮田真・滝沢晶子 2006『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』22 鎌倉市教育委員会

## 米町遺跡 (NO. 245)

42	大町二丁目 2404	福田誠 2000『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16 鎌倉市教育委員会
43	大町二丁目 2235-3	馬淵和雄 2008『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』24 鎌倉市教育委員会

## 感応寺跡 (NO. 225)

44	材木座四丁目 594	汐見一夫 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』21 鎌倉市教育委員会
----	------------	---------------------------------------



図2 中世鎌倉地形図（上本 2000 図7に加除筆）

「材木座」の地名は中世に材木を販売した座に由来するとみていい。ただし、「座」自体が何時一帯の地名になったかは不明であるが、鎌倉末期と思われる史料で金沢貞顕の被官と推定される宗清なる人物の、前浜における資材調達を語るもので年不詳二月一日の極楽寺に宛てた書状の中に「一日さいもくさに五六候ハ候しあいた」とある。貞治六年（1367）九月五日と十日の足利義詮御教科書案では「鎌倉材木座」が佐々木高氏（道誉）に返付されている。南北朝の動乱を経てこの頃には佐々木氏の所有するところになっていたらしい。17世紀半ばの「正保国絵図」には「材木座村」の記述があり、その頃には確立していたようである。

また材木座海岸の一帯（滑川河口東側）は吾妻鏡等によると「飯島」「西浜」「和賀江」と呼ばれていたことが窺える。その内の「飯島」「和賀江」の地名は現存する。『吾妻鏡』による「飯島」の初見は寿永元年（1182）十一月十日条に見られる。「西浜」「和賀江」は承元三年（1209）五月二十八日条に見られる。「和賀江」はこの頃まだ築島されていないが、「江」が付くことからそれ以前から港湾として機能していた様相を示す（伊藤 1994）。和賀江周辺、いわゆる鎌倉海岸の東側をなぜ「西浜」と呼んでいたかについては「和賀江」を起点とした「西」の意味があるとの指摘がある（馬淵 2009）。貞応二年（1223）九月五日条の「和賀江辺有火」の記事では鎌倉中期に和賀江付近には火事が起きるほどの家が立ち並んでいたととれ、そこが「飯島」であったろう。貞永元年（1232）七月十二日の往阿弥陀仏による築島進言時に「和賀江島」は初見する。以来「島」「津」が付くようになる。和賀江島の築島は先の貞永元年七月から工事が開始され、26日後の八月九日には完成している。弁ヶ谷からは豆腐川という名の独立





図3 明治15年頃の調査地点周辺 (『迅速測図』加除筆)

河川が海に流れ込む。「東風川」の転訛ともいわれるこの川はかつて幅が三間 (5.4m) 以上あり、飯島から船が入ってきたと伝えられている。豆腐川に橋を架けるためボーリング調査をした際には五間(9m)も下へ入っても底にあたらなかったとも言う。またこの川に沿って小道が海岸通りから通じており、これを「高御倉小路」と呼んだ可能性がある。

「高御倉」、あるいはそれに相当するとみられる名称はしばしば史料に現れる。「御」がつくので幕府もしくは將軍家に関わる高床式の倉庫に由来する可能性がある。『吾妻鏡』では建長五年 (1253) 十二月二十二日条に「浜高御倉」が見られ、寛元三年 (1245) 五月二十二日条には「浜御倉」が見られる。いずれも場所の確定は難しいが「浜」であること、どうやら名越の内であることが窺える史料である。承久元年 (1219) 九月二十二日条では、「上は永福寺惣門に延び、下は浜庫倉の前に至り、東は名越山の際に及び、西は若宮大路を限る。鎌倉中焼亡す。」との記事がある。北限の永福寺に対する南限の表示は浜であり、弁ヶ谷至近を充ててもいいのではないか。この「浜御倉」は13世紀中葉から顕著に浜に現れる竪穴建物とは時代が合わない。よって、「高御倉」に相当すると考えるべきだろう。また、過去の調査事例から弁ヶ谷以南から竪穴建物の検出がないのも特徴的である。周辺は地点6、44を省き柱穴、土坑、掘立柱建物の検出事例ばかりである。時代は下るが史料の紹介に戻ると、明德四年 (1393)

十二月六日の最宝寺文書、京極高詮安堵状では「鎌倉最宝寺高御蔵前敷地内太子堂立事」とみられ、享徳元年（1452）十一月九日の最宝寺文書、京極持清書下では「鎌倉辨谷高御蔵最宝寺寺領事」が見られる。「最宝寺」は弁ヶ谷の入り口近くの東側にあったとされる寺である。「浜庫倉」「浜御倉」「浜高御倉」「高御蔵」は同一のもので、また同一の地点を示している可能性が高い。すなわち浜の一角の弁ヶ谷の入り口に幕府の管理する高床式倉庫の建ち並ぶ場所があった。そこは最宝寺に極めて近い場所である。

弁ヶ谷の山裾にはやぐらが多い。これは今や全て廃寺となったり、移転したりして現存しないが、この谷戸に寺院が多く存在し独自の宗教空間が形成されていたことを物語る。このことは鎌倉時代の宗教・政治動静のなかで、水上交通の拠点としての弁ヶ谷が果たした役割の大きさを示している。それについては高橋慎一郎が詳細に論じている（高橋 1995）。また、古代の水上交通の拠点と指摘される地点 17 の掘立柱建物群との関係は注視すべきである。

以下弁ヶ谷あったとされる寺院について若干触れたい。新善光寺は『鎌倉廃寺辞典』では弁ヶ谷の谷奥北側の枝谷にあるとされているが、正確な場所は不明である。現在葉山町山口にある不捨山撰取院新善光寺は、この新善光寺が移ったとされる。

弁ヶ谷は法然の弟子証空を派祖とする浄土宗西山派の関東における拠点であった。法然滅後教団は四分五裂し、その多くが度重なる弾圧によって潰滅的状态となる。その中で唯一西山派は六波羅を介し北条氏と結び、関東に進んで、弁ヶ谷に新善光寺を開いたと高橋は指摘する（高橋 1995）。『鎌倉年代記裏書』仁治三年（1242）六月十五日条の記事で、鎌倉に於ける西山派の確たる地位を示す史料がある。北条泰時の死去の際に新善光寺の智導という僧が念仏を勧めている。鎌倉の寺院の中でも新善光寺は相当高位を占めていたことが分かる。智導は、西山派の分流である東山派の派祖証入の弟子で、証空の孫弟子にあたる。寺の開創時期は明確ではないが念仏と対立していた日蓮の「名越の一門の善覚（光）寺、長楽寺、大仏殿立させ給いてその一門のならせ給事をみよ」（「兵衛志殿御返事」『昭和定本日蓮上人遺文』）に見られるように名越北条氏の力によるところが大きく、また、六波羅以来の北条氏との関係が背後にあったとの見方もあり、北条一門により建立したと考えられる。『吾妻鏡』には頼朝以来北条氏が度々信濃善光寺に参詣した記事が載る。一門あげての善光寺信仰、すなわち阿弥陀信仰を行い、この熱心な信仰は大仏建立という形でも現れている。幕府及び北条氏と浄土宗西山派（特に東山流）は京都六波羅という空間での交流を基とし、共に持つ善光寺信仰を媒介として鎌倉の新善光寺という寺院で合流したといえると高橋は指摘している（高橋 1996）。新善光寺は鎌倉時代後期以降大いに盛んになる。鎌倉時代最末期の史料として元徳元年（1329）に比定される年末詳十二月三日付嵩頭（金沢貞頭）書状に、翌春に発遣される関東大仏造営料船の大勸進を新善光寺長老が努めたことが見られる。新善光寺の鎌倉の政治社会における地位の高さを示す史料であろう。

地点 38 の新善光寺やぐらでは火葬骨の入った白磁四耳壺を中央に埋めた長方形区画が発見されている（原・田代 1988）。この区画は天井部を失ったやぐらであろう。やぐらとしては最も大きい部類に入る。区画の左右には小規模なやぐらを伴う。田代郁夫はやぐらの配置が祖師とその弟子・寺の世代という僧侶の位置関係を現すという（田代 1999）。であれば、この区画に葬られた人物こそこの地に存在したと想定される寺院の長老級であり相当重要な地位にあった人物であろう。遺構の年代は 14 世紀前半頃があてられる。

最宝寺は先の史料で触れたように弁ヶ谷の東側の枝谷にあったとされる。現在は横須賀市野比に所在する。不明な点は多い。『新編鎌倉志』に「五明山高御蔵と号す、浄土真宗、京西六条本願寺末」とある。同書は寺伝を引いて、「源頼朝始め鎌倉扇ヶ谷に創建し、僧明光を延いて開山とす、建久六年弁ヶ谷

鎌倉材木座村属に寺を移し、薬師を本尊となす、此頃は天台宗なり」という。『大谷遺跡録』<sup>ゆいせき</sup>によって、明光は正和五年（1316）31歳であり、また真宗の僧であるから寺伝とは大いに異なれり、とする。建久六年は1195年。明光（了円）は親鸞の弟子光信（源海）の法流に属する僧で、鎌倉時代末期に鎌倉の甘縄道場で指導者として活動していたというから、寺伝とは確かに合わない。しかし鎌倉時代末期に弁ヶ谷に親鸞流の念仏系寺院として最宝寺が存在したことは間違いない。

弁ヶ谷から横須賀市野比に移転した時期は明確ではない。先に触れた享徳元年（1393）十一月九日付京極持清書下から、この頃までは弁ヶ谷に最宝寺があったことは確かである。『鎌倉廃寺辞典』によれば、寺伝にその前正慶二年（1333）の兵火で扇ヶ谷にも最宝寺が移ったとある。大永元年（1521）、扇ヶ谷の最宝寺は焼亡したという。『廃寺辞典』は大永元年兵火にかかり、時の住僧九世明心が野比に遁れ来た。という。

崇寿寺は山号金剛（『新編相模国風土記稿』所引の梵鐘銘）、元享元年（1321）北条高時開創、開山は南山土雲。寺の名は崇鑑北条高時に因んだものだろう。寺格の高さがうかがえる。『廃寺辞典』によると、その位置は谷奥近くの東側、最宝寺跡比定地の北側の谷になっているが根拠はない。『風土記稿』所引の鐘銘によると、鐘は嘉暦二年（1327）高時（崇鑑）寄進、鑄工は物部道光（大工沙弥道光）とある。物部姓鑄物師は、鎌倉大仏造立のため鎌倉時代中期に畿内河内から関東に招請され、大仏完成後は主に幕府系の臨濟宗寺院に梵鐘を寄せた（馬淵1998）。道光は鎌倉時代末期に鎌倉近辺でいくつかの作品を残している。元享三年（1323）の北条貞時十三年忌供養の際、崇寿寺の僧衆13人が参加していると『鎌倉市史』にある。その頃かなりの寺勢であったことがわかる。『鎌倉廃寺辞典』によれば応永三十一年（1424）までは存在していたようである。

この谷のやぐらもすでに7基が調査されている。最大のもので幅6.6mの規模の大型やぐらもあり、また、14世紀前半の常滑の甕に人骨が改葬されていた。

最後に北条時政の名越亭、別名「浜の御所」について触れる。『吾妻鏡』建久三年（1192）七月十八日の記事に「名越御所」には「浜の御所と号す」と割注が付き、また正嘉二年（1258）五月五日条の「尾張前司名越山荘」には「新善光寺辺」の割注が付く。「尾張前司」とは時政の曾孫名越時章である。現在名越亭跡とされている釈迦堂隧道東側山中の平場（名越大谷戸最奥部山腹に位置する）に根拠はないこと、また浜地より直線距離で1km以上あること、から考えて史料に見える「名越御所」「名越山荘」は考えにくい。さらに言うならば、名越山中に名越亭があったとして、北条得宗家と対立関係にあった時章が時政邸を受け継ぐとは考えにくく、名越亭とは別のものであった可能性は高い。とすれば名越の内の浜と呼ばれる範囲内のしかも新善光寺付近に北条時章の「名越御所」「名越山荘」と呼ばれる屋敷があったと考えられる。

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

調査地点は鎌倉市の南東部に位置し、東側は逗子市小坪との境の山裾に開析された谷戸、「弁ヶ谷」の開口部中央付近に位置する。鎌倉市材木座6丁目640番2・3である。今回の発掘調査は個人専用住宅建設計画があったため、工事の実施により掘削深度が260cmであり埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのあることが予想された。このため鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地地表下30cmで表土が終わり、遺物包含層となった。それ以下は南北朝時代から鎌倉時代の3面以上の遺構面とそれに伴う遺物が出土し、具体的に埋蔵文化財が存在することが判明した。これにより、当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業主と協議を行ったところ当初の計画に基づき建築工事を行いたいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成21年6月15日から約2か月の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は6月15日に重機により試掘データに基づき遺構面まで表土掘削を行い、翌16日に機材搬入後、遺構の確認・検出を行った。

調査面積は49.5㎡である。調査の結果、建物址、井戸、池、常滑の据甕、土坑、柱穴などにより構成された遺構群が検出された。出土遺物はかわらけを始め、国産陶器、貿易陶磁器、石製品、銭、木製品など12世紀から14世紀後半の所産である。

調査は平成21年8月28日までの間に必要な記録作業を行い、同時に機材を撤去して現地調査を終了した。調査の経過については以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

#### 日誌抄

- 6月15日(月) 調査区を設定して現地地表下30cmまで重機により表土掘削を実施。
- 6月16日(火) 機材の搬入。環境整備。
- 6月17日(水) 第Ⅰ面の遺構確認作業を開始。遺構掘削と共に遺構図面作成開始。
- 6月18日(木) 測量用の海拔高を鎌倉市三級基準点から敷地内に移動。
- 7月14日(火) 第Ⅰ面全景写真撮影。
- 7月16日(木) 第Ⅰb面まで掘り下げ。
- 7月22日(水) 常滑据甕写真撮影。遺構確認作業及び掘削、常滑据甕、第Ⅰb面図面作成開始。
- 7月31日(金) 第Ⅰb面全景写真撮影。
- 8月3日(月) 第Ⅱ面検出。
- 8月4日(火) 第Ⅱ面全景写真撮影。図面作成。
- 8月5日(水) 第Ⅲ面まで掘り下げ。
- 8月6日(木) 第Ⅲ面検出作業
- 8月7日(金) 第Ⅲ面遺構掘削及び図面作成。
- 8月14日(金) 第Ⅲ面全景写真撮影。第Ⅲb面まで掘削。
- 8月17日(月) 第Ⅲb面遺構掘削、写真撮影、図面作成。
- 8月18日(火) 第Ⅳ面まで掘り下げ、遺構検出及び掘削。
- 8月26日(水) 第Ⅳ面全景写真、図面作成。

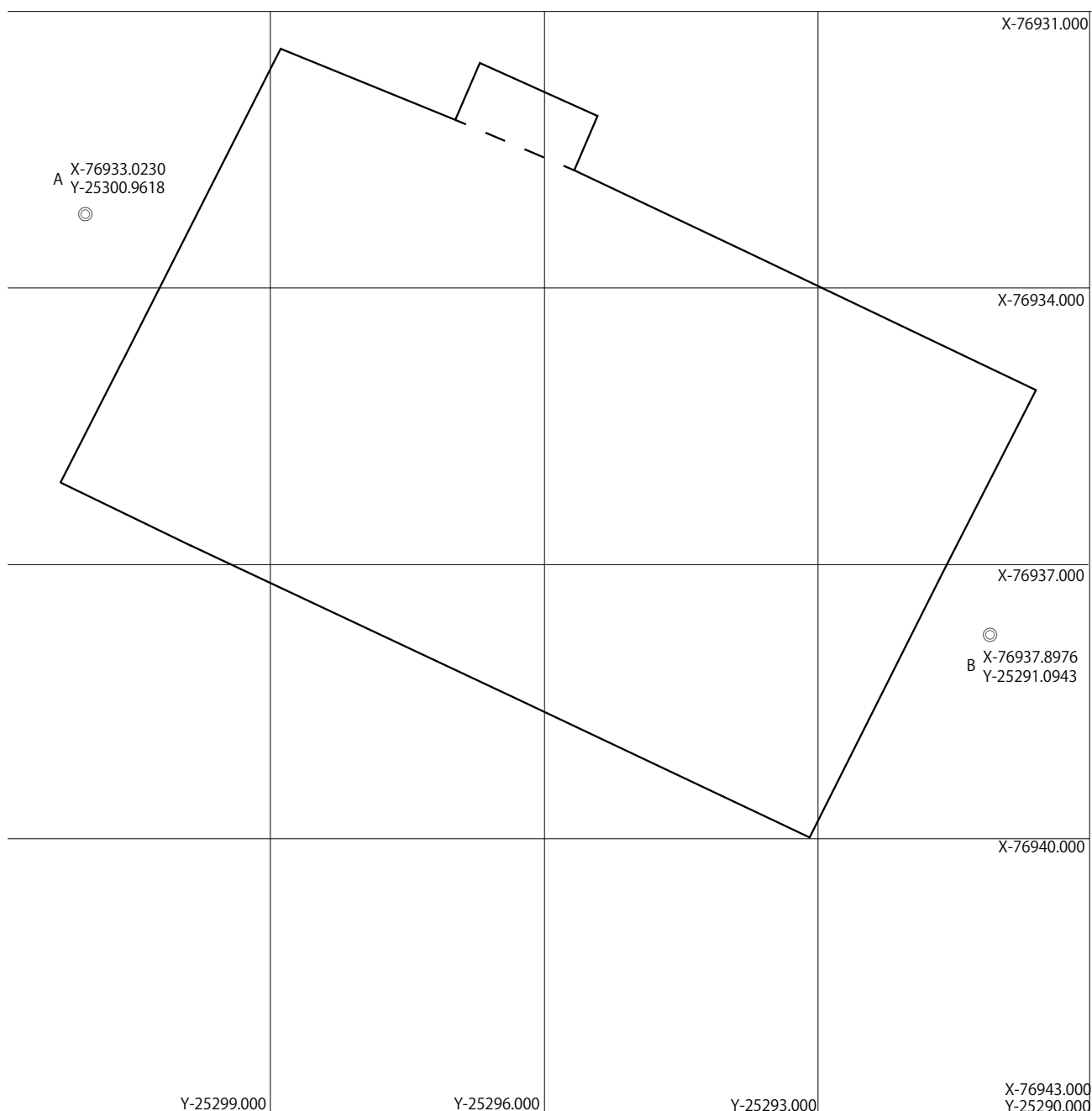


図4 調査区設定図

8月27日（木）北・南壁土層堆積状況写真撮影、図面作成。

8月28日（金）機材の撤収。鎌倉市4級基準点を基に座標移動。

## 2. 測量軸の設定

調査時における測量は調査区に沿った任意の4m方眼軸を設けたため国土座標上の方眼軸とは不一致である。測量開始に先行して調査区の東西にそれぞれA杭・B杭を調査測量基準点として設定した（図4）。鎌倉市4級基準点C111・C112を用いて、調査測量基準点に国土座標上の数値を移動した。

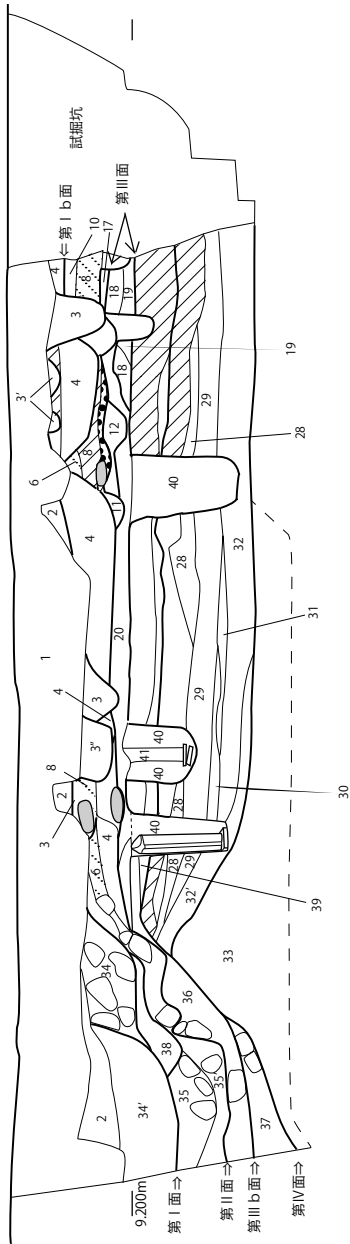
国土座標数値は、現地座標数値において日本測地系（座標系AREA9）を用いて測量を行った。整理

作業段階において世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図4に示した。標高値は、調査地点より北へ100mほどの位置に設置してある鎌倉市3級基準点C-003=標高11.652mを基に移設した。

### 3. 堆積土層

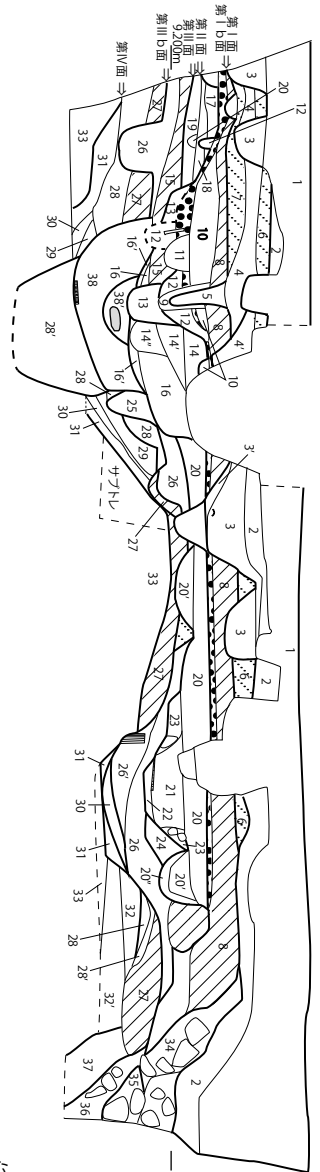
調査区の南壁・北壁の土層観察を行い、図5に示した。調査区は現地表面の高さは10.300mを測る。概ね平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査を基に、現地表下30cmまで堆積していた近現代の客土を重機により掘削し、その後人力により遺構検出面まで掘り下げ遺構の確認を実施した。土層堆積は表土以下の第6層の粗い泥岩層で構成される第I面から現地表下200cmの間に7枚の生活面を確認した。

表土の堆積土を除去すると粗い泥岩により版築された第6層が検出されこれを第I面とした。海拔は概ね9.700mを測る。遺構は建物2軒と常滑の据甕、東側落ち込みの護岸、土坑、柱穴等である。第1面を構成する地形層は10～20cmの厚みを持ち、これを掘り下げると緻密に泥岩を版築した地形層、第8層が検出されこれを第I b面とした。海拔は9.500mである。第I b面は調査区東端で1面と共通する。また全体に炭化層、焼土の広がりも見せ、その様子は調査区西方で顕著である。長方形土坑、土坑、柱穴が検出された。第I b面の炭化層、焼土を取り除き、それを第II面とし、海拔9.400mで礎石建物を検出した。第II面から細かい泥岩を多量に含む暗褐色粘質土を10～20cm掘り下げると海拔9.300mで泥岩による暗黄褐色粘質土の地形層が検出され、これを第III面とした。第III面では第II面の礎石建物の礎石の下から柱を持つ柱穴が検出され、その並びから掘立柱建物となった。第III面から第IV面まで掘り下げる間に脆弱な面があり、これを第III b面とした。海拔は9.25mを測り、部分的に泥岩による粗い地形がなされていたようである。井戸の検出がある。第IV面は暗褐色粘質土による中世基盤層であり、海拔は9.200mを測る。池と溝が検出され、その間を地中に埋設された木組の暗渠によりつなぐ。暗渠近くの池の縁で羽子板、縄などが出土した。また、第I面から第IV面までの間に調査区の東では落ち込みが認められ、護岸や修復の痕跡が土層堆積から見られる。豆腐川の西壁ではないかと思われる。






調査区南壁土層図

1. 表土
2. 灰褐色砂質土 耕土
3. 暗灰褐色粘質土 半拳大の泥岩を含む
- 3' 暗灰褐色粘質土 3に比べ泥岩が少ない。
- 3'' 暗茶褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土 泥岩が細かい。
- 4' 暗灰褐色粘質土 やや暗い。
- 5 黄褐色粘質土 拳大の泥岩を含む。(柱根部)
6. 暗黄褐色粘質土 拳大の泥岩の粗い地形層
7. 暗黄褐色粘質土 拳大の泥岩の粗い地形層
8. 明黄褐色粘質土 泥岩を版築した地形層
9. 暗青黒色粘質土 柱穴の掘り方
10. 暗褐色粘質土 数センチ大の泥岩、炭化物、遺物片を含む
11. 暗黄褐色粘質土
12. 暗黒褐色弱粘質土 数センチ大の泥岩を含む
13. 暗青灰色粘質土 炭化物と数センチ大の泥岩含む
14. 暗褐色弱粘質土 貝殻を含む。
- 14' 暗褐色弱粘質土 14とほぼ同土だが粘性が弱い
- 14'' 暗褐色弱粘質土 砂質、締り弱い
15. 明黄褐色泥岩層
16. 暗褐色砂質土 炭化物を含む
- 16' 暗褐色砂質土 粘質土塊を含む
17. 黄褐色強粘質土
18. 黒褐色強粘質土
19. 暗黄褐色強粘質土
20. 暗褐色粘質土 細かい泥岩粒子を多量に含む
- 20' 暗褐色粘質土 細かい泥岩粒子を20より多量に含む
- 20'' 暗褐色粘質土
21. 黄褐色粘質土 溝覆土
22. 暗黄褐色弱粘質土 溝掘り方
23. 暗黄褐色弱粘質土 拳大の泥岩含む 溝枳裏込め
24. 黄灰褐色強粘質土 溝覆土
25. 暗黒褐色土 かわらけ片含む
26. 暗黄褐色粘質土
- 26' 暗灰褐色粘質土 拳大の泥岩と木製品含む
27. 明黄褐色泥岩版築層
28. 黄褐色泥岩版築層
- 28' 黄褐色泥岩版築層 やや泥岩が少ない
29. 黒褐色粘質土
30. 黒褐色粘質土 細かい泥岩粒子含む
31. 黒褐色粘質土 木製品含む
32. 黒褐色粘質土
- 32' 暗灰黒色粘質土 やわらかい粘土含む
33. 黒褐色粘質土 数センチ大の泥岩を含む 中世期基盤層
34. 暗灰色粘質土 人頭大の泥岩を含む
35. 灰色粘質土 人頭大の泥岩を含む
- 35' 灰色粘質土 粘性が非常に強い
36. 灰黒色粘質土 半人頭大の泥岩含む
37. 暗灰黒色粘質土 数センチ大の泥岩を多量に含む
38. 暗褐色砂質土 貝殻、炭化物、遺物片、木製品を多量に含む
- 38' 暗黒褐色砂質土 多量の炭化物を含む 礎石をもった柱穴
39. 黒色粘質土 半拳大の泥岩を含む
40. 暗褐色粘質土 柱穴の裏込め
41. 暗黒褐色粘質土 柱穴 柱根部



調査区北壁土層図

-  : 粗い泥岩層
-  : 緻密な泥岩版築層
-  : 炭化層

0 2m

図5 堆積土層図

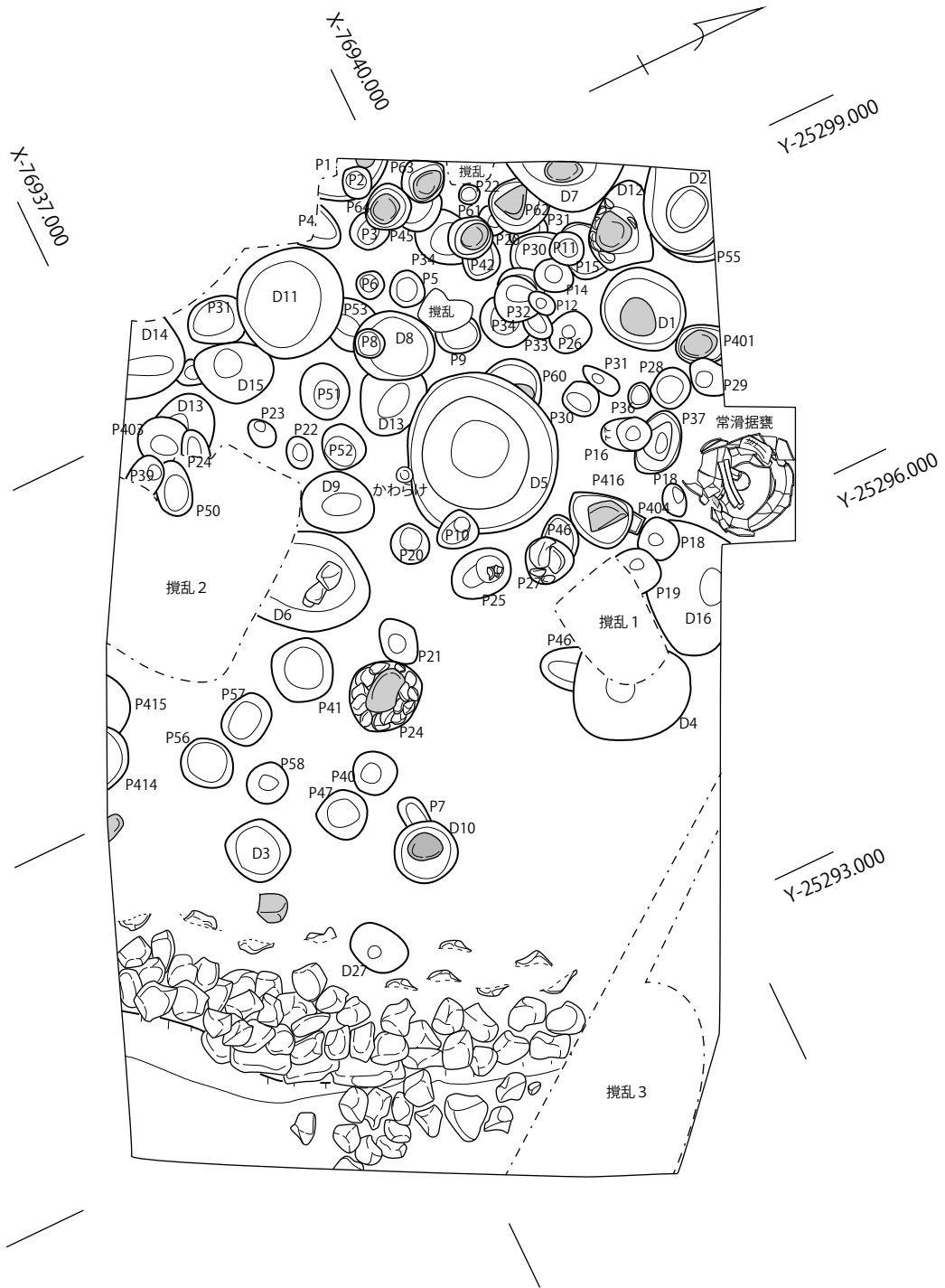


図6 I面全体図



## 第三章 検出された遺構と出土遺物

### 1. 第 I 面の遺構と出土遺物

第 I 面は粗い泥岩による地形をなされた層で海拔は概ね 9.7m を測る。検出された遺構は建物 2 軒、常滑の据甕 1 基、礎石列 1 列、落ち込み 1 箇所、土坑 16 基、柱穴 67 個である。出土した遺物は須恵器、土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、白かわらけ、東海系かわらけ、火鉢、瓦器質の燭台、瓦器、土器質の蒸籠、土錘、常滑産の甕と鉢、瀬戸産の深皿、小皿、碗、壺、渥美産の甕、青磁碗、白磁皿、褐釉壺、銭、釘等がある。

#### 常滑据甕（図 7）

調査区の北壁にかかり検出したため一部調査区を拡張し調査をした。第 I 面の遺構検出時に調査区北壁にかかる状況で幅 40cm 程の泥岩塊が 2 個出土した。それを取り除くと常滑の大甕の一部が出土し、据甕の可能性が考えられ、これにより調査区北側を幅 1m20cm、奥行き 70cm 程拡張し掘り下げると、やはり一個体の甕が検出された。甕は 50cm 位の泥岩塊 3 個により肩部辺りから潰されていた。甕が用途を失い廃棄される際に 5 つの大型泥岩塊により潰されたとみられる。甕は幅 80cm の円形の掘り方に据えられたようであるが、掘り方南壁に石の突起があり、これにより甕は割られている。この石は甕を据えた後に地殻変動等で突起したのであろうか。当初には障害ではなかったのだろうか。

甕の底部の径は 21.4cm と小さく高さ 65cm のところで肩は張りその径は 90cm 程に及ぶ。2cm 程の傾きがあるが高さは 92cm を測り、口径は 51.4cm である。また縁帯幅は 4.5cm であり、体部と肩部には格子目の押印が一周する。内面、輪積み成形の跡が顕著であり指頭痕はそれに沿って残る。外面底部はヘラ状工具によるナデ上げ、口縁から肩部にかけて茶褐色の自然降灰がかかる。器表は褐色である。甕の内面には付着物は見られない。生産地編年の第 2 段階 7 型式にあたる。

#### 建物 1（図 9）

調査区西半分で検出されている。比較的しっかりした土坑から構成される建物で、中央に大きな土坑を持ち四方に土坑・柱穴が配置される。この構造は他の建築例からみて小規模な「塔」の基礎との見方も出来る。土坑はいずれも根固めの泥岩が密に入る様相を示した。土坑 5 を中心に土坑 1 と土坑 11 は芯々距離で 2m の距離をもち、土坑と柱穴 41 は 2.5m の距離を持つ。建物の主軸方位は N - 20° - E である。

土坑 1 は北西に位置し、平面形は円形を呈する。規模は 86cm × 71cm で断面は箱型を呈し埋土は建築用材の栗石と中央に凝灰質砂岩の礎石を持つ。遺構の底面標高は 9.600m である。

土坑 4 は北東に位置し、西半部を攪乱に切られる。平面形は不整円形で、規模は 100.4cm × (50) cm で断面は U 字型を呈し、埋土は底部に栗石による根固め土が堆積する。底面標高は 9.330m である。出土遺物の 1 は小型のロクロ成形かわらけで底部には板状圧痕があり、内底面にナデが入る。体部は緩やかに内湾する。胎土は泥岩粒を含むやや粗土である。2 も小型のロクロ成形かわらけで口径、底径比があまりない。底部に板状圧痕があり、内底面には弱いナデが入る。胎土は砂を多く含み泥岩粒も見られるやや粗土である。3 は砥石の中砥である。伊予産で砥面は 2 面ある。4 は南宋銭の「紹熙元寶」である。初鑄年は 1190 年、真書。裏面の文字は腐食していて判読できない。「元」もしくは「五」か。

柱穴 41 は南西に位置する。平面形はほぼ円形で規模は 58cm × 58cm である。断面形は箱型で底面標

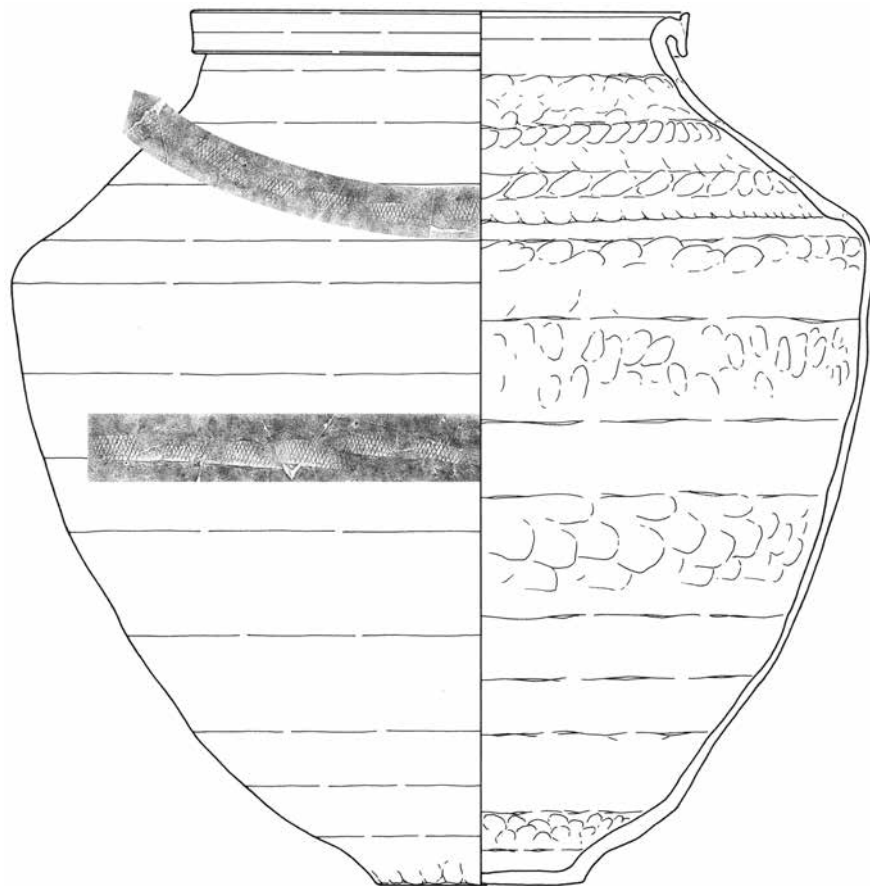
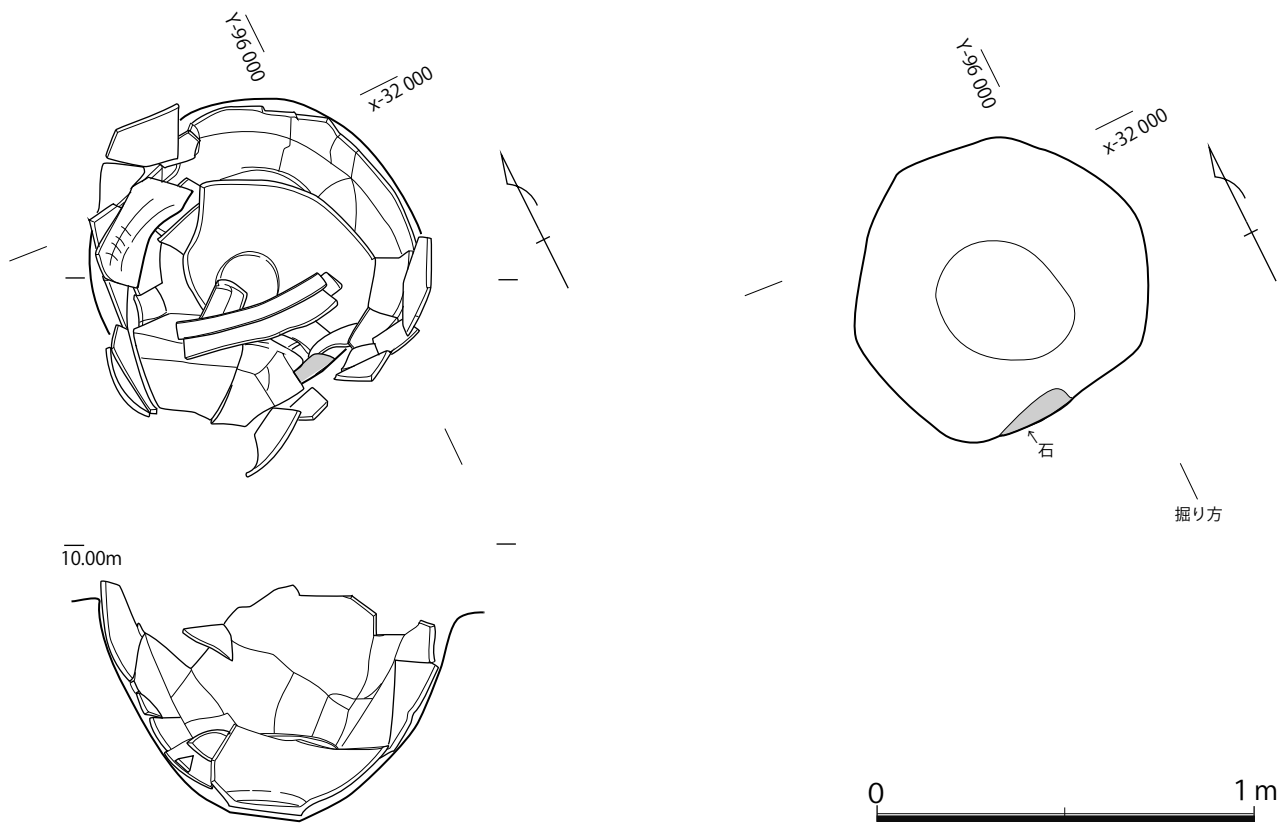


図7 第I面常滑据甕

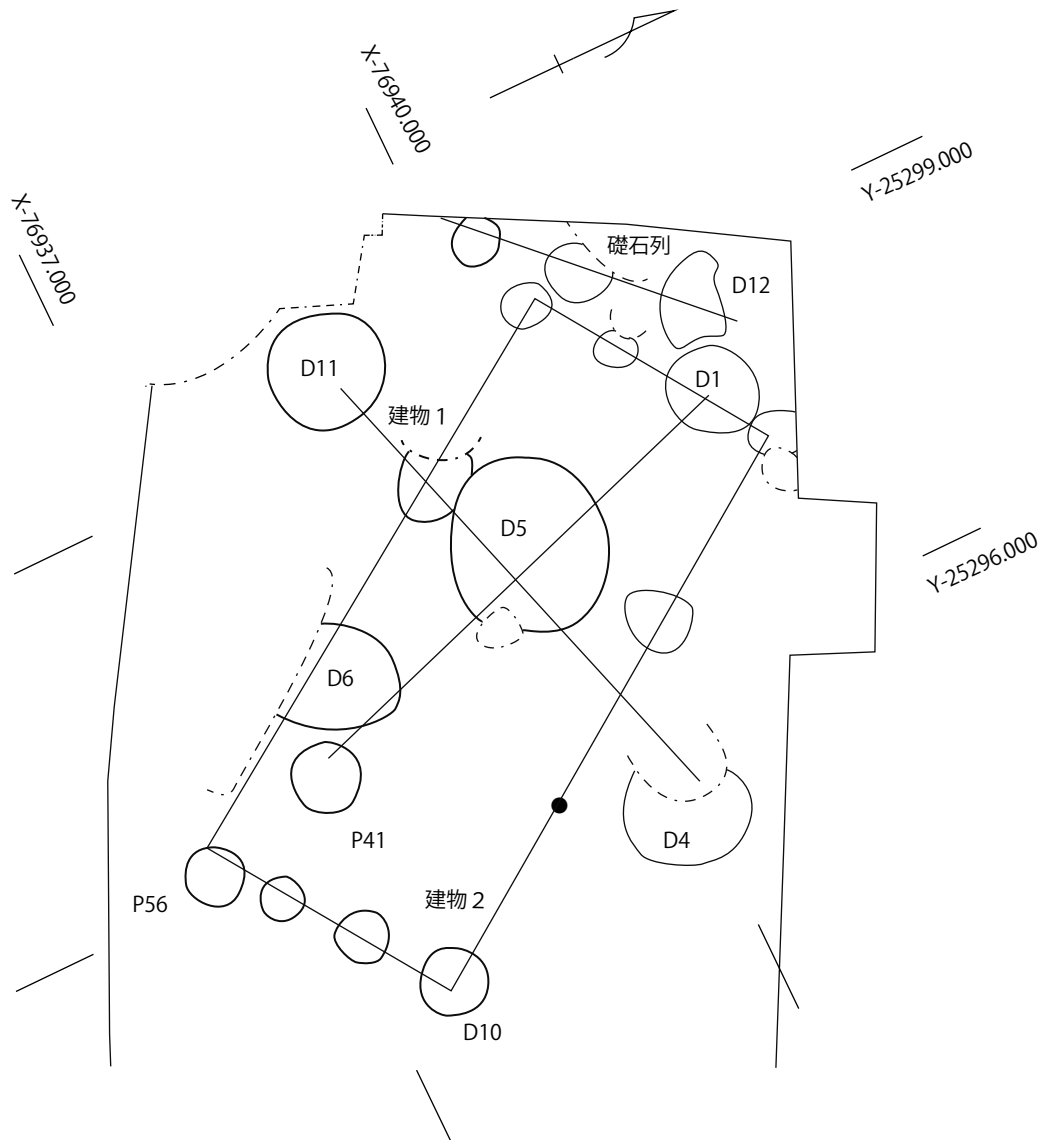


図8 第1面建物概念図

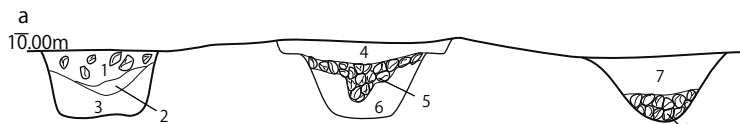
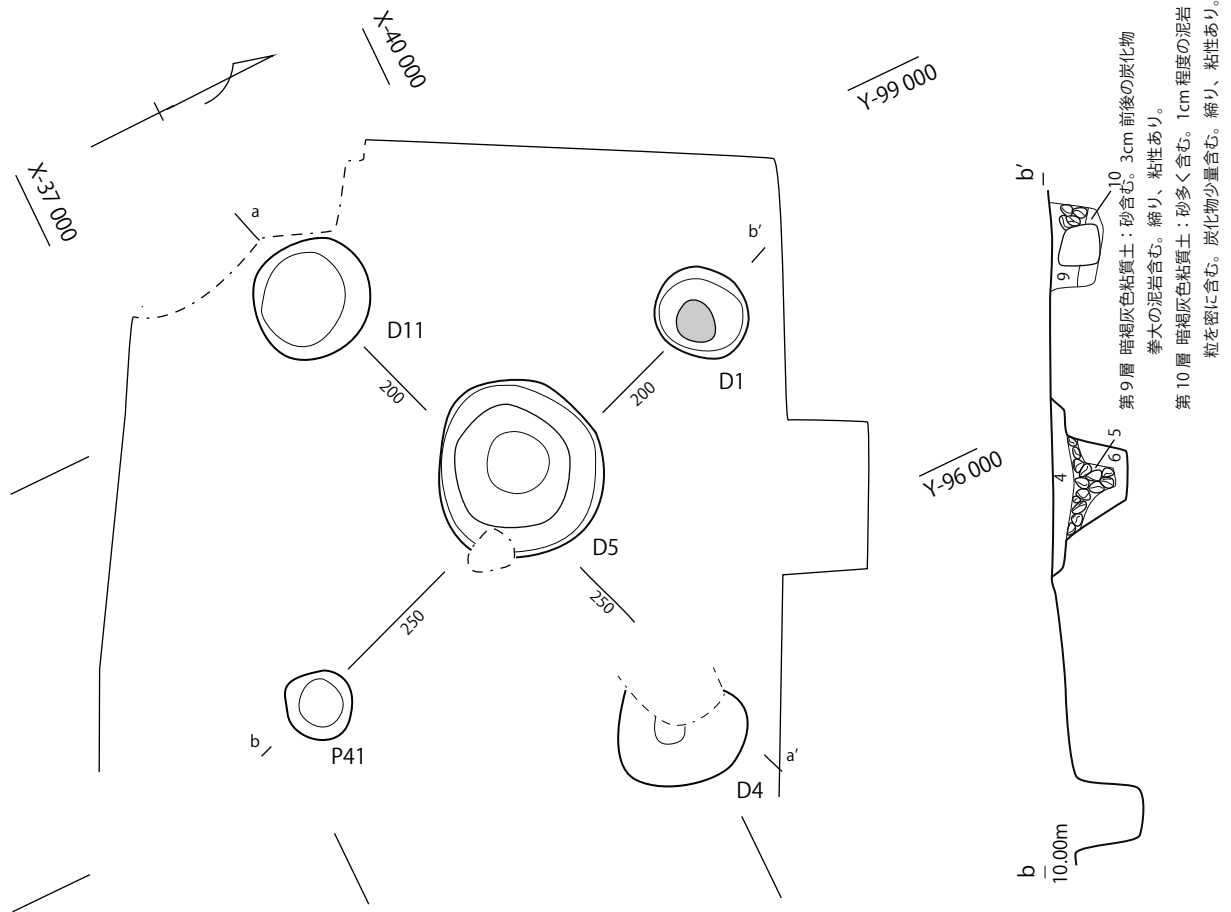
高は9.605mである。6の東海系のかわらけ底部が出土している。胎土は灰白色で白色粒、小石粒を含む。

土坑11は北西に位置する。平面形は円形で規模は93cm × 93cmである。断面形は箱型で埋土は上層に栗石が入る。底面標高は9.315mである。出土遺物の6はロクロ成形かわらけの大皿で、口縁部に油煙煤が付着する灯明皿として使用したものか。体部は内湾し、胎土はやや粗い。7は瀬戸・美濃製品の端反皿である。灰緑色の灰釉がかかる。口唇部は外反する。大窯期の第1段階前半に相当しようか。

土坑5は中央に位置しもっとも大きい土坑である。平面形は円形で断面は中段を持つ逆台形である。規模は138cm × 138cmで、埋土は中層に泥岩による栗石が密に入る。底面標高は9.335mである。出土遺物は5の鉄釘である。

### 建物2 (図10)

調査区全体に展開し検出された。一部礎石を持った柱穴により構成される。規模は北西から南東に3間(柱間距離北西から1.75m - 1.75m - 1.65m) × 北東から南西に1間(柱間距離2.23m)を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし、北東、南西には延びない様相を示している。柱穴14はそれなりの深さを持ち柱穴401と柱穴61との間に並ぶが建物に伴うものかは若干疑問が残る。



	D1	D4	D5	D11	P57
長径	86	10.4	138	93	38
短径	71	(50.5)	138	93	35
底海拔	9.600	9.330	9.335	9.315	9.580

単位 cm/海拔m

第1層 暗灰褐色粘質土：3mm～拳大の泥岩やや入る。炭化物、かわらけ片少量含む。  
 第2層 暗灰褐色粘質土：5cm大の泥岩、炭化物、かわらけ片少量含む。  
 第3層 暗灰褐色粘質土：5cm大の泥岩入る。炭化物非常に多い。締りなし、粘性あり。

第4層 暗灰色土：砂多く含む。拳大の泥岩をやや含む。粘性、しまりあり。  
 第5層 暗褐灰色粘質土：拳大の泥岩を密に含む。粘性、締りあり。(ネガタメ土)  
 第6層 暗褐灰色粘質土：炭化物、3cm大の泥岩粒やや多く含む。粘性、締りあり。

第7層 暗褐灰色粘質土：炭化物、6cm大の泥岩粒含有。粘性、締りあり。  
 第8層 暗褐灰色粘質土：少量の炭化物と拳大の泥岩が密に入る。粘性、締りあり。(ネガタメ土)

1~4：土坑4 土坑5：5 土坑11：6~7 柱穴41：8

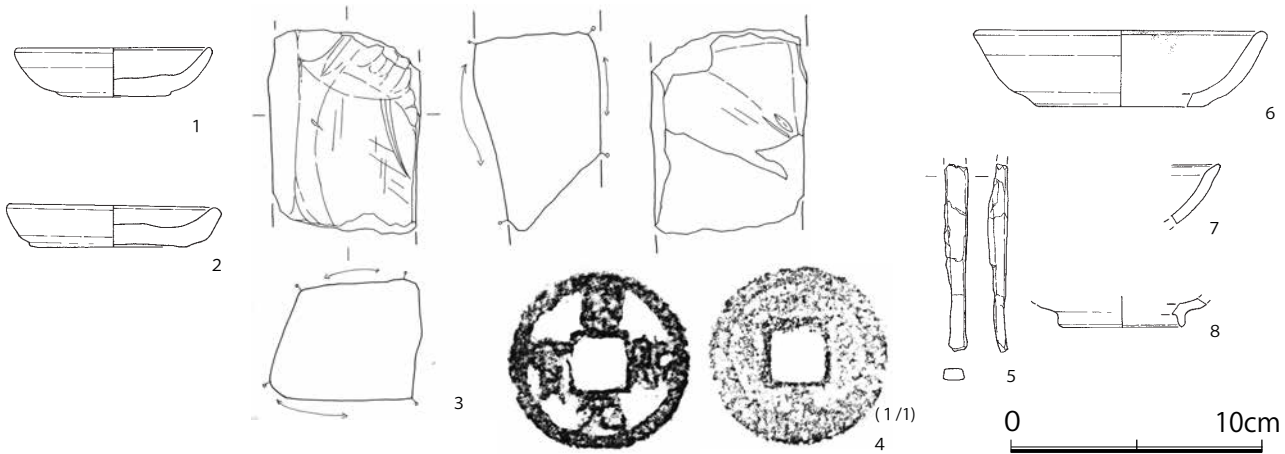


図9 第I面建物1

南東限の柱穴は確認されただけで5口が並びその柱間距離は北東 0.75 m - 0.70 m - 0.60 m - 1.0 m と一定していない。主軸方位は N - 37.5° - E である。

柱穴 401 は平面形、楕円形で安山岩の礎石を伴う。断面形は箱型で規模は (46)cm × 36cm を測り、底面標高は 9.710 m である。

柱穴 416 は平面形、楕円形で、安山岩の礎石を伴い、断面形は箱型である。規模は 60cm × 48cm を測り底面標高は 9.730 m である。

土坑 10 は平面形、円形。やはり安山岩による礎石がある。断面形は逆台形を呈し、規模は 55cm × 55cm を測る。底面標高は 9.590 m である。

柱穴 61 の平面形は円形で、断面形は U 字型を呈する。安山岩による礎石を伴う。規模は 39cm × 38 cm で底面標高は 9.615 m である。

土坑 13 は土坑 5 と土坑 8 に切られる。平面形は楕円形で、断面形は逆台形である。埋土は泥岩がやや入り炭化物の多い暗褐灰色粘質土である。底面標高は 9.900 m を測る。

土坑 6 は南東側を攪乱に切られる。平面形はおそらく楕円形であろう。断面形は逆台形であり、埋土は 3 層に分層された。規模は 83cm × (79) cm を測り、底面標高は 9.585 m である。

柱穴 56 は平面形円形で断面形は逆台形を呈する。埋土は泥岩粒が多めに入る明るめの暗褐灰色粘質土で規模は 44cm × (39) cm である。底面標高は 9.600 m を測る。

柱穴 415 は柱穴 414 に切れ過半部が調査区の外にあるため全貌は明らかではないが、平面形は円形か楕円形であろう。断面形は不明。規模は (53) cm × (22) cm で確認出来た底面標高は 9.310 m である。

柱穴 58 の平面形はほぼ円形で、断面形が逆台形を呈する。埋土は泥岩粒がやや多めに入る明るめの暗褐灰色粘質土である。規模は 38cm × 35cm を測り底面標高は 9.580 m である。

柱穴 47 の平面形は不整形円で断面は U 字型を呈する。埋土は泥岩の密に入る暗褐灰色粘質土である。規模は 43cm × 41cm、底面標高を 9.610 m 測る。出土遺物 1 は北宋銭の「聖宋元寶」篆書。初鑄年代は 1101 年である。

柱穴 14 は柱穴 11 に切られる。平面形は楕円形で断面形は U 字型である。規模は 35cm × 32cm であり、底面標高は 9.785 m である。

## 礎石列 (図 11)

調査区の北西隅で検出した。いずれも安山岩の礎石を伴う柱穴 3 個が並ぶがそれ以上は調査区内では展開せず建物として捉えられなかった。しかし、調査区外に展開する建物の一部であろう。主軸方位は N - 45° - W であり、柱間距離は北東の柱穴 12 から 100cm - 75cm である

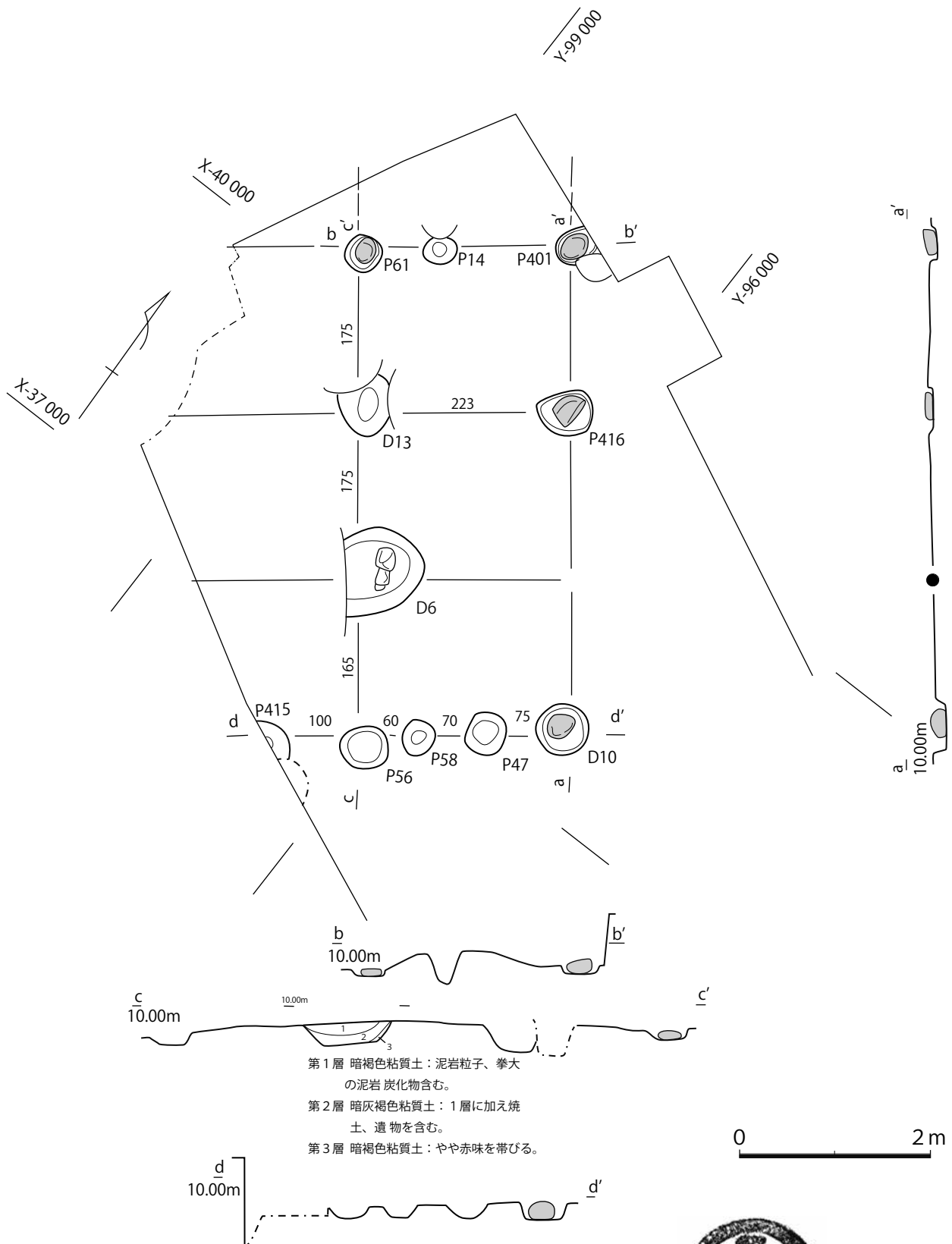
土坑 12 は北側を土坑 2 に切られる。礎石の周りには泥岩の栗石がやや密に入る。平面形は不整形で、断面は箱型を呈する。規模は 80cm × 64cm を測り、底面標高は 9.770 m である。

柱穴 62 は北側を土坑 7 に切られる。平面形はほぼ円形で、断面形は浅い逆台形である。規模は 55cm × 48cm を測り、底面標高は 9.700 m である。

柱穴 63 は調査区西壁に若干引っかかるが平面形は概ね円形と見られる。断面形は逆台形を呈する。埋土は炭化物の多く入る暗褐灰色粘質土である。規模は 41cm × 36cm で、底面標高は 9.635 m を測る。

## 落ち込み 1 (図 12)

調査区の東端は大きく落ち、大小の泥岩を重ね護岸されている。調査地点の東側には豆腐川が流れる。



	D6	D10	D13	P14	P47	P56	P58	P61	P401	P415	P416
長径	83	55	60	35	43	44	38	39	(46)	(53)	60
短径	79	55	(48)	32	41	(39)	35	38	36	(22)	48
底海拔	9.585	9.590	9.900	9.785	9.610	9.600	9.580	9.6	9.710	9.310	9.730

単位 / cm: 以外海拔m



柱穴 47

(1/1)

図 10 第 I 面建物 2

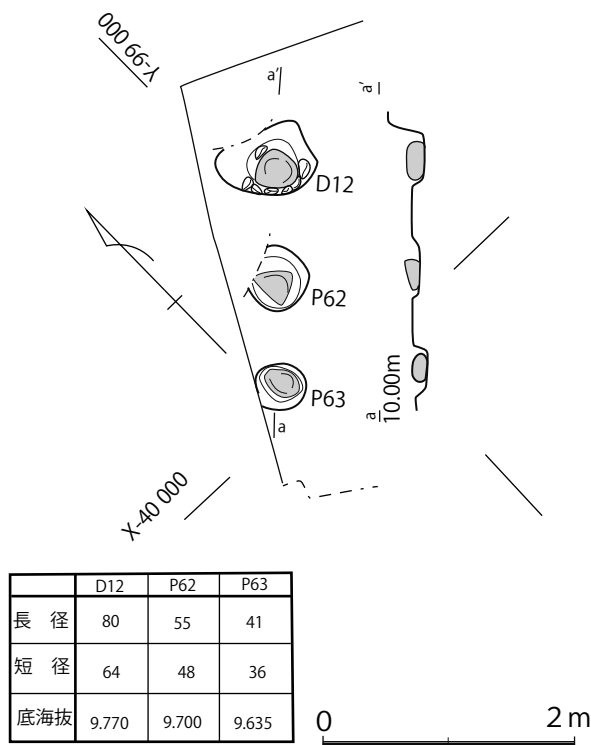


図 11 第 I 面礎石列

川の護岸と見ていいだろう。泥岩は概ね人頭大であるが、落ち込みの中段に幅 50～70cmの大型の泥岩を 3 個横並びに据えている。泥岩は中央で落ち込みの底部に散らばるが、泥岩で何かしらの施設を設けたと見るよりも護岸施設の崩れと見てとれる。落ち込みの北側は攪乱により破壊されているが、調査区北壁の堆積土層を見る限り落ち込みはほぼ真直ぐに北方へ延びていたようである。落ち込みの幅は最大で 1.4 m を測り、深さは 1.2 m ほど確認出来ている。

出土遺物は図 12 の 1～7 までが護岸からの出土であり、8～15 が落ち込みからである。1 は小型のロクロ成形かわらけである。口径、底径比があり、やや直線的に開く、内底部にナデがあり、外底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物の多い粗土である。2 は大型のロクロ成形かわらけである。体部下方に稜が入り、内底部には強くナデが入る。胎土は泥岩粒を含むやや粗土である。3 は瓦質の燭

台の脚部である。表面は黒色処理されミガキが入る。胎土は灰白色で小石粒を含む。4 は備前の播鉢である。小片であるが 7 条以上の播り目が見られる。5 は備前産播鉢の底部である。5 条以上の播り目を確認できる。6 は常滑片口鉢の I 類である。第 4 段階 1 型式か。7 は瀬戸の大平鉢。三足の脚が付くであろう。底部は回転ヘラ削り、灰緑色の灰釉を刷毛塗りする。以下 8 から 15 までは落ち込みから出土した遺物である。8 はロクロ成形かわらけの小型皿。体部中段に稜を持つ。器表摩滅するが内底面はナデ、底部は板状圧痕残る。胎土は含有物の多い粗土である。9 はロクロ成形のかわらけ中型の皿である。底部から体部にかけて油煙煤が付着するが内部には付着してない。10 は鍔付火鉢 IV c 類である。鍔部上面に菊花文が押印され、外面体部に菱形文が押印される。胎土は瓦器質で器表は黒色処理されている。鍔の大きさからかなり大型の火鉢と思われる。11 は常滑片口鉢の II 類。口縁部外側に強いヨコナデが入る。第 2 段階 7 型式あたりか。12 は常滑の甕口縁である。第 3 段階 9 型式。13 は常滑鉢の体部片を使った摩耗陶片。四辺くまなく使用し摩耗している。14 は常滑甕転用摩耗陶片である。二等辺三角形を呈し、その二等辺部分が摩耗している。15 も常滑甕転用摩耗陶片であり、一辺が摩耗する。16 は瀬戸の縁釉小皿、口縁に緑色の透明釉を漬け掛けする。17 は瀬戸の天目茶碗である。釉薬を掛け分けしている。古瀬戸後期様式 I 期に比定。18 は瀬戸の播鉢で 1 条に 8 本の播り目を確認できる。大窯期である。19 は瀬戸の灰釉碗の底部片を打ち欠き円盤状にしている。底部はロクロ回転糸切り。

### 土坑 (図 13)

土坑 2 は調査区の北西隅で検出された。中段に平場を持つ。このため断面形は段を持った箱型である。主軸方位は N - 33° - E であり、規模は (81) cm × (59) cm、底面標高は 9.525 m を測る。出土遺物は 1～5 で、1 はロクロ成形のかわらけ小皿である。体部上方に稜が入る。内底面に強いナデが見られ、底部には板状圧痕が残る。胎土はやや粗土である。2 は常滑甕片押印部分、縦 3 本横 2 本に × 文である。

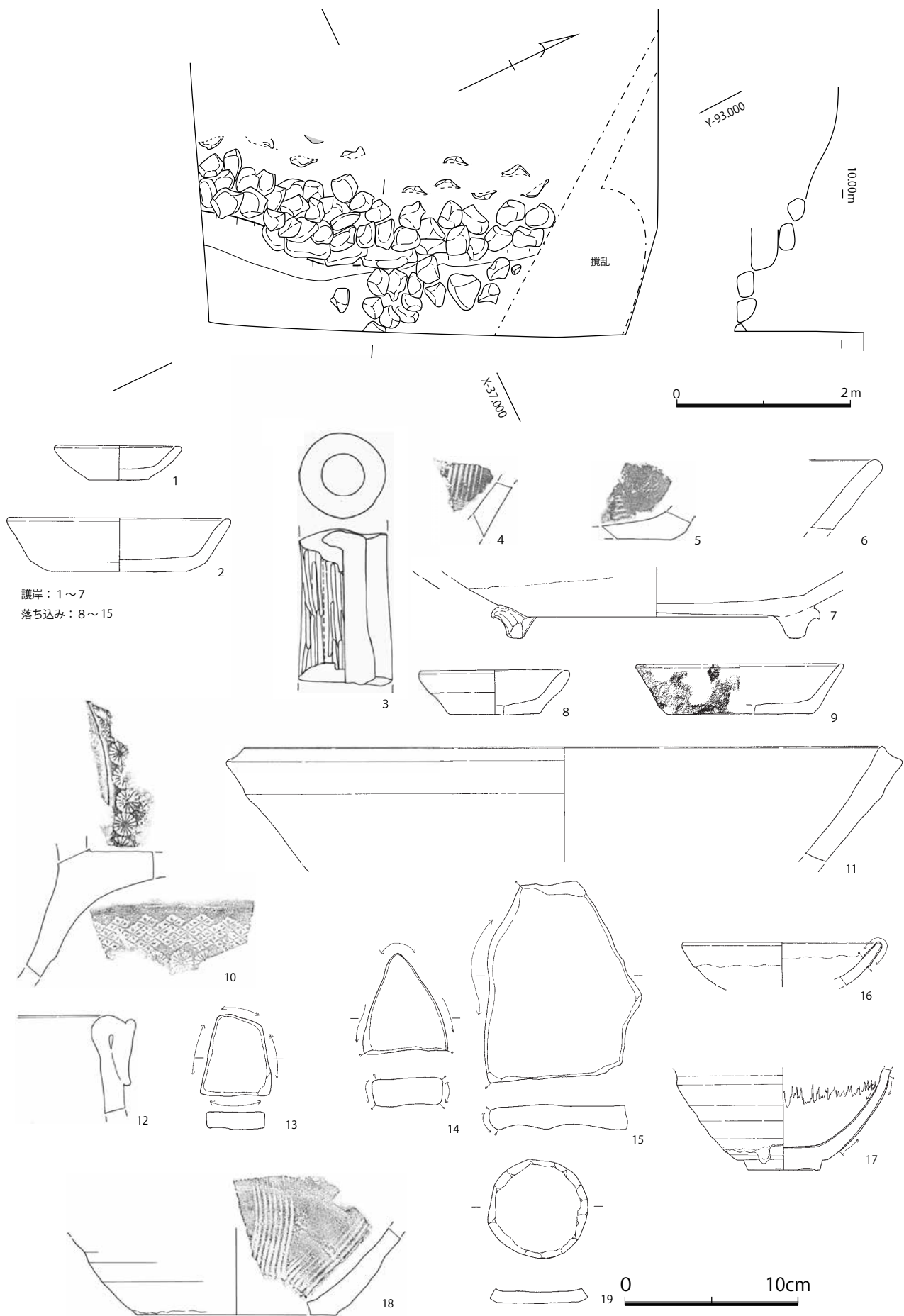


図12 第I面落ち込み1



3は瀬戸片口鉢、第8型式か。胎土は灰色で長石、礫をやや多く含有する。4は北宋銭の「熙寧元寶」。篆書で初鑄年代は1068年である。5は砥石、鳴滝産の仕上砥である。砥面は三面である。

土坑15は調査区南西域で検出された。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-30°-Wであり、規模は71cm×54cmで底面標高は9.480mを測る。出土遺物の6は鉄釘、7は北宋銭の「聖宋元寶」行書。初鑄年代は1101年である。

土坑16は調査区中央、北壁にかかって検出した。柱穴18・19に切られる。平面形は不整円形で断面形は逆台形を呈する。主軸方位はN-101°-Wであり、規模は137cm×76cmで底面標高を10.265m測る。出土遺物は8～11で、8はロクロ成形の大型かわらけで、体部上方が膨らみ内湾する。内底面に弱いナデがある。9は鉄釘。10は、北宋銭の「政和通寶」隸書、初鑄年は1111年である。11も北宋「咸平元寶」の真書で初鑄年は998年である。

### 柱穴 (図13)

柱穴10は調査区中央西側で検出し、建物1の土坑5を切る。平面形は不整円形で断面形は逆台形を呈する。規模は36cm×33cmで、底面標高は9.740mを測る。出土遺物は12～13である。12は須恵器の甕口縁部。口縁部の内側に沈線が走る。緻密な良土である。13は滑石の温石の破片。2次的に火を受けたようで部分的に黒い。

柱穴24は調査区の中央で検出した。中央に安山岩の礎石を持ち、周りを栗石で密に固める。建物としての広がり確認できなかった。平面形は不整円形で断面は緩い逆台形である。規模は95cm×90cmで底面標高は9.620mを測る。

柱穴25は調査区の中央で検出した。平面形は楕円形であり、北側が一段深くなる。断面形は段を持った箱型を呈する。規模は55cm×40cmで底面標高は9.430mを測る。埋土は拳大の泥岩の入る暗褐色粘質土である。出土遺物として14・15のかわらけがあげられる。両方ともロクロ成形の大皿である。内底面にナデがあり、底部に板状圧痕が残る。胎土はやや粗土。15は若干作りが粗雑で体部に二段の稜を持つ。内底面に強いナデ痕を残し、底部は板状圧痕が強く残る。口縁部を打ち欠いている。

柱穴27は調査区中央北西寄りで検出した。大きめの泥岩塊と拳大の泥岩が密に入る。平面形は円形で断面形はU字型を呈する。規模は42cm×40cm、底面標高は9.790mを測る。出土遺物は16・17で、16は瀬戸の縁釉小皿である。外面は露胎し、口縁に油煙煤が付着する。内面は灰緑色の透明釉が施釉される。17は自然石だが摩耗し、使用した可能性がある。

柱穴28は調査区北で検出した。平面形は円形、断面形は浅い皿状である。規模は38cm×33cmで底面標高は9.800mを測る。出土遺物は18の鉄釘である。

柱穴32は調査区西側で検出した。周辺は柱穴が密集する。柱穴12・33に切られる。平面形は不整円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は43cm×(40)cmで底面標高は9.505mを測る。埋土は拳大の泥岩を含有する暗灰褐色粘質土である。

柱穴33は調査区西側で検出した。柱穴12に切られる。平面形は楕円形で断面形は逆台形を呈する。規模は30cm×23cmで底面海拔は9.825mを測る。埋土は拳大の栗石を密に包含する。出土遺物は19の鉄釘である。

柱穴34は調査区西側で検出した。柱穴が密集する中でも最も古い部類に入る。柱穴32・33に切られる。平面形はおそらく円形、断面形は、逆台形である。規模は49cm×(30)cmで底面標高は9.580mを測る。埋土は拳大の泥岩が密に入る暗灰褐色粘質土である。

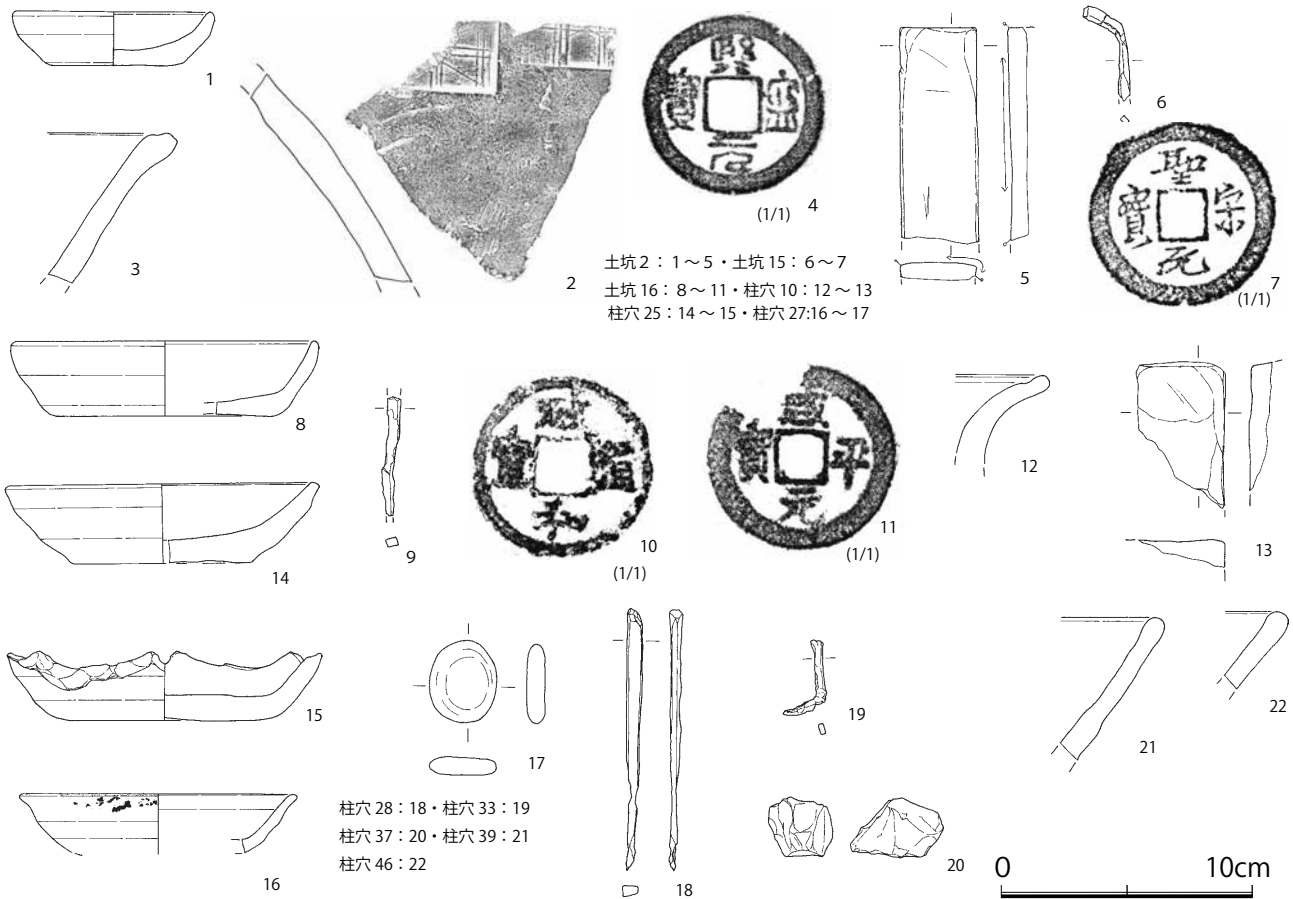
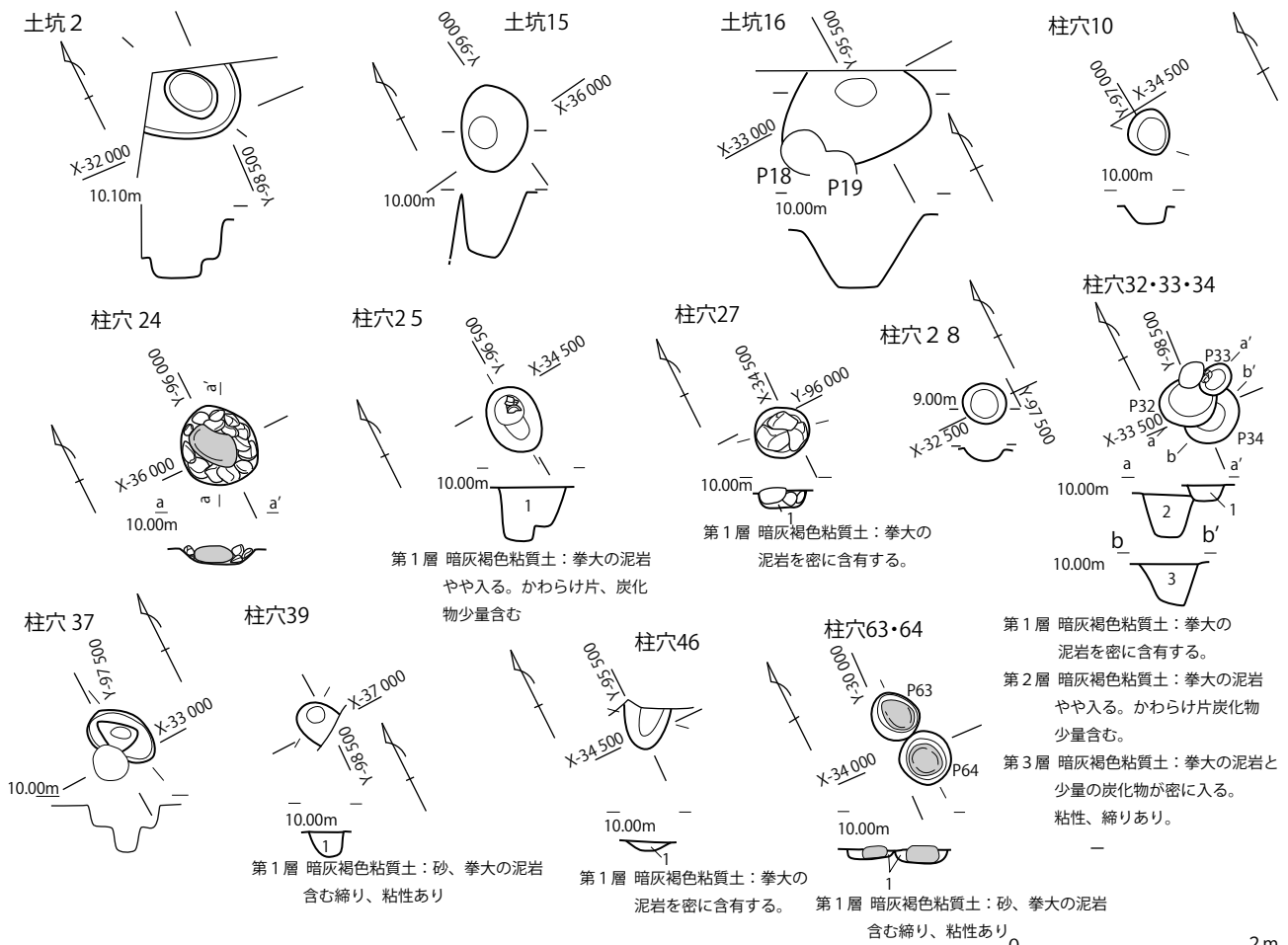


図 13 第 I 面土坑・柱穴

柱穴 37 は調査区北側にある据甕の前で検出した。柱穴 14 に切られる。中段に平場を持つ深くてしっかりした柱穴である。平面形は楕円形で中に柱部分と見られる半分ほどの直径の穴がある。規模は 56cm × (37)cm で底面標高は 9.570 m を測る。埋土は炭化物の多い、暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 20 のチャートである。

柱穴 39 は調査区の南で検出した。南半部を攪乱に切られる。平面形はおそらく楕円形で断面形は U 字型を呈する。規模は 32cm × (31)cm で底面海拔は 9.600 m を測る。埋土は炭化物を多く含んだ暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 21 の常滑片口鉢で第 2 段階 5 ～ 6a 型式か。

柱穴 46 は調査区中央北側で検出した。建物 1 の土坑 4 に切られる。平面形はおそらく楕円形で断面形は浅い皿状を呈する。規模は 43cm × (31)cm で底面海拔は 9.600 m を測る。埋土は泥岩が密に入る暗灰褐色粘質土である。出土遺物は 22 の常滑片口鉢 I 類、胎土はやや粗土で含有物が目立つ。第 2 段階 5 ～ 6a 型式。

柱穴 63 は調査区西端で検出した。安山岩の礎石を伴う。平面形は楕円形で断面形は U 字型を呈する。規模は 41cm × 36cm で底面海拔は 9.635 m を測る。埋土は砂、拳大の泥岩を含有する暗灰褐色粘質土である。

柱穴 64 は調査区西端、柱穴 63 と並んで検出した。安山岩の礎石を持つ。平面形はほぼ円形で断面形は緩い U 字を呈する。規模は 43cm × 40cm で底面海拔は 9.635 m を測る。埋土は柱穴 63 同様の暗灰褐色粘質土である。

出土遺物では写真のみの掲載であるが火を受けた泥岩に熔着痕のあるものが土坑 16 から出土している。

#### 第 I 面直上出土遺物 (図 14)

1 はロクロ成形かわらけ小皿、口縁が開き内底面はナデが入り、底部は強く板状圧痕が残る。胎土は土丹粒を含むやや粗土である。2 はロクロ成形のかわらけ大皿、口径、底径比があまりない。口縁の下に稜を持つ。内底面には強いナデがはいり、底部の板状圧痕は顕著である。胎土は含有物の多い粗土である。3 は常滑片口鉢の II 類。口縁ヨコナデし体部は指頭痕をナデ消している。胎土は含有物少なく精良である。第 3 段階 8 型式。4 は常滑甕片の押印部分である。単線 + × 文 + 縦線 7 本で構成されている。5 は白磁の壺である。底部近くか。胎土は精良堅緻。釉薬は内外面とも薄い。13 世紀前半までのものだろう。福建産。6 は銅製品の馬具で野沓の先端部分である。内側に繊維が若干残っているので、木製の野沓を銅製品で被せたものであろう。7 は北宋銭の「元豊通寶」行書。初鑄年は 1078 年である。8 は北宋銭の「景德元寶」真書。初鑄年は 1004 年である。9 は砂岩の加工石である。ちょうど掌に乗るくらいに球形に播られている。

#### 第 I 面出土遺物 (図 15)

1 は須恵器転用の摩耗陶片である。器表面と断面の一部を使用している。2 ～ 9 はロクロ成形のかわらけ皿であり、その内 2 ～ 7 は小型である。2 は体部真中あたりに稜が入り、内底面にナデが入る。口唇部に油煙煤が付着する。灯明皿である。胎土は砂のやや多く入るやや粗土である。3 は歪みが大きい。内底面は強くナデが入り底部は板状圧痕が残る。焼成が良く、砂がやや多い。4 は内底面にナデが入り、底部の板状圧痕強い。胎土は白色粒子が目立つ。5 は口径、底径比があまりなく直線的に立ち上がる。内底面に強いナデが入り底部に板状圧痕が強く残る。胎土は比較的精良と言えようが幾つかの泥岩粒が

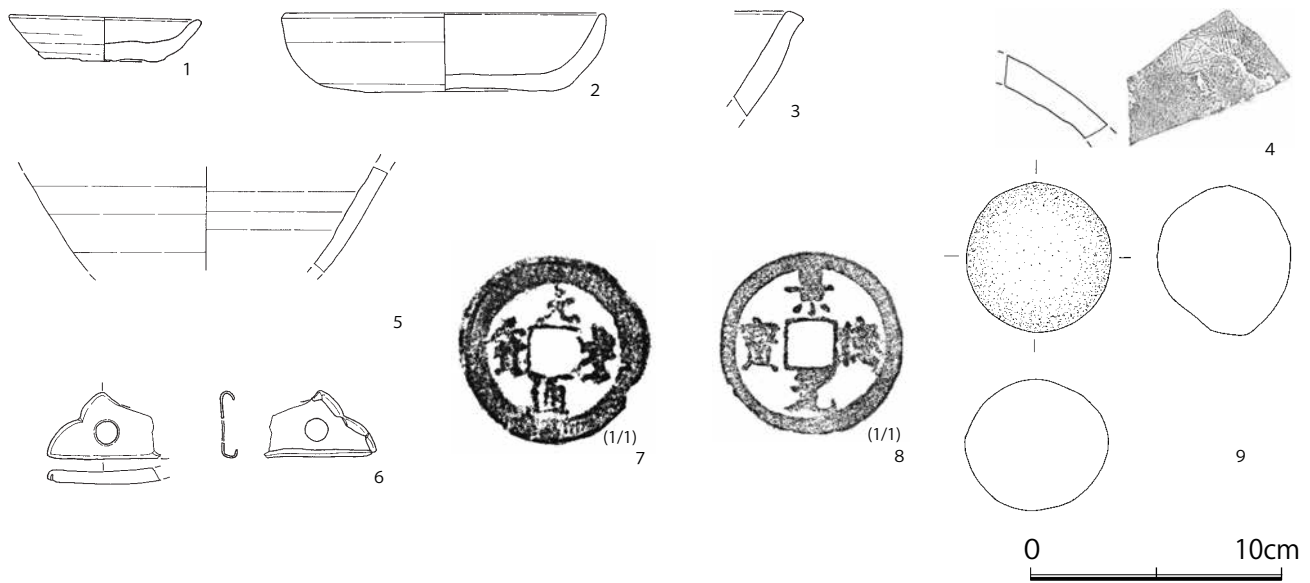


図14 第I面直上出土遺物

見られる。6はやや湾曲して立ちあがる。7は粗雑な作りである。内底面にナデが入り底部の板状圧痕も強い。胎土は含有物の多い粗土である。8・9は大皿である。8はやや開き気味に立ち上がり、若干の歪みを持つ。胎土は砂が多い。9は器高が高い。体部には二本のロクロ目が残る。焼成はやや甘く、胎土の芯が黒灰色である。10は瀬戸内系かわらけの底部片である。内底面に焼成時の黒斑が見られる。貼り付け高台である。11は常滑片口鉢Ⅱ類である。外体部は指頭痕をナデ消している。第2段階5型式。12は常滑甕の押印部分である。部分的だが格子に×か。13は青磁の端反碗口唇部の小片。胎土は精良堅緻、釉は不透明な淡水色で厚い。14は白磁の四耳壺の肩から頸部部分の破片。繋ぎ目であり、釉のかかった突起が見える。釉はやや青味がかった透明釉である。15・16は鉄釘である。

## 2. 第I b面の遺構と出土遺物

第I b面は泥岩による緻密な地形をなされた層で海拔は概ね9.5mを測る。調査区東側では第I面と共通する。調査区北西では炭化物が広がる。方形土坑2基、土坑3基、柱穴70個、落ち込み1個所である。遺構は第I面の遺構の掘り残しのものが多いようである。出土した遺物は須恵器、土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、火鉢、土器質の蒸籠、土錘、常滑産の甕と鉢、瀬戸産の深皿、渥美産鉢、青磁碗、石製品、銭、釘等がある。

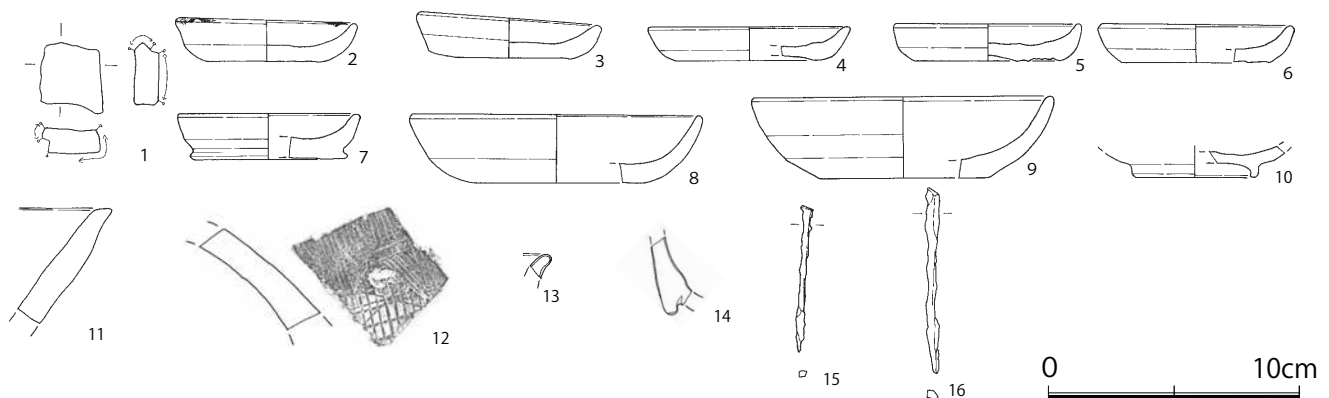


図15 第I面出土遺物

表2 第I面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P-1	(51.5)	(2.8)	7.5	9.835		P-52	40.0	37.0	30.0	9.530	A
P-2	27.0	27.0	5.1	10.42	P1を切る	P-53	43.0	(3.3)	42.5	9.565	A
P-3	3.5	3.2	5.7	9.835		P-54	29.0	(20.0)	2.0	9.797	D
P-4	34.0	32.0	6	9.875		P-56	44.0	(39.0)	12.0	9.600	E
P-5	34.0	32.0	6.0	9.875		P-57	47.0	38.0	11.0	9.620	E
P-6	25.0	24.0	4.0	9.865		P-58	38.0	35.0	21.5	9.580	E/ 建2
P-7	(3.0)	24.0	20.0	9.58	A/D10に切られる	P-59	45.0	(29.0)	60.0	9.300	A
P-8	26.0	26.0	16.0	9.715	D8を切る	P-60	58.0	50.0	6.5	9.655	A
P-9	41.0	(21)	3.5	9.880		P-61	39.0	38.0	10.5	9.615	建2
P-10	36.0	33.0	13.0	9.740	D5を切る	P-62	55.0	48.0	4.5	9.700	
P-11	35.0	32.0	12.0	9.785	P14・15を切る	P-63	41.0	36.0	7.5	9.635	A
P-12	26.0	16.0	—	—	P32・33を切る	P-64	43.0	40.0	6.5	9.635	A
P-14	35.0	32.0	10.5	9.785	P30を切る / 建2	P-401	(46.0)	36.0	2.5	9.710	礎石を持つ / 建2
P-15	51.0	51.0	14.0	9.780		P-402	40.0	36.0	17.0	9.370	
P-16	30.0	30.0	26.5	9.705	A/P37を切る	P-403	47.0	46.0	12.0	9.550	
P-18	36.0	(36.0)	12.0	9.800		P-404	17.0	14.0	22.0	9.700	
P-19	44.0	(2.9)	13.5	9.800	P18を切る	P-414	(53.0)	(24.0)	25.0	9.350	
P-20	36.0	35.0	31.5	9.540		P-415	(53.0)	(22.0)	28.0	9.310	建2
P-21	45.0	34.0	10.0	9.700		P-416	60.0	48.0	3.5	9.730	建2
P-22	29.0	24.0	21.5	9.620	A	D-1	86.0	71.0	40.0	9.600	建1
P-23	29.0	21.0	32.0	9.780	A	D-2	(81.0)	(59.0)	42.5	9.525	
P-24	(95.0)	(90.0)	23.5	9.620	A'	D-3	53.0	49.0	10.5	9.685	
P-25	55.0	40.0	44.0	9.430	A'	D-4	104.0	(50.0)	50.5	9.330	P46を切る / 建1
P-26	42.0	35.0	26.0	9.680	A	D-5	138.0	138.0	62.0	9.335	建1
P-27	42.0	40.0	6.0	9.790	B/P49を切る	D-6	83.0	(79.0)	24.5	9.585	建2
P-28	38.0	33.0	16.0	9.800		D-7	100.0	(46.0)	18.0	9.755	A
P-29	32.0	31.0	27.5	9.680		D-8	74.0	66.0	36.0	9.570	A'/P13・53を切る
P-30	(46.0)	(30.0)	35.0	9.590	A'	D-9	66.0	54.0	22.9	9.596	A
P-31	(33.0)	(20.0)	28.5	9.650		D-10	55.0	55.0	17.0	9.590	P7を切る / 礎石を持つ / 建2
P-32	43.0	(40.0)	38.0	9.505	A/P34を切る	D-11	93.0	93.0	55.0	9.315	P31・53を切る / 建1
P-33	30.0	23.0	12.0	9.825	B/P32・34を切る	D-12	80.0	64.0	15.0	9.770	礎石を持つ
P-34	49.0	(30.0)	34.5	9.580	B	D-13	60.0	(48.0)	38.0	9.900	A/ 建2
P-35	31.0	29.0	11.5	9.865	A	D-14	(75.0)	(60.0)	42.0	9.480	A
P-36	23.0	20.0	13.0	9.820	A	D-15	71.0	54.0	42.0	9.480	
P-37	56.0	(37.0)	38.0	9.570	A	D-16	137.0	76.0	42.5	10.265	
P-38	18.0	15.0	16.0	9.620							
P-39	32.0	(31.0)	15.5	9.600	A						(単位: 海拔m / 以外 cm) (P: 柱穴 D: 土坑)
P-40	41.0	41.0	12.5	9.605	B						
P-41	58.0	58.0	15.5	9.605	建1						
P-42	42.0	31.0	4.5	9.855							
P-45	39.0	25.0	9.5	9.825							
P-46	43.0	(31.0)	11.0	9.660	B						
P-47	43.0	41.0	10.0	9.660	B/ 建2						
P-48	31.0	23.0	24.5	9.750	A						
P-49	34.0	(23.0)	17.5	9.705	B						
P-50	48.0	36.0	39.0	9.335							
P-51	47.0	43.0	31.0	9.560	A						

土層注記

- A類 暗褐灰色粘質土: 直径3cm前後の泥岩がやや入る。炭化物が多く黒っぽい土
- A'類 暗褐灰色粘質土: A層に似るが泥岩粒が細かく炭化物が少ない
- B類 暗褐灰色粘質土: 泥岩がみっしりの泥岩層やや砂っぽい
- C類 暗灰色土: 泥岩やや入る。砂の多い灰色の土
- D類 暗黒褐色粘質土: 炭化物の少量入る粘性のある土。1cm未満の泥岩粒が少量混入
- E類 暗褐灰色粘質土: 明るい土、炭化物少量、4cm前後の泥岩粒やや多めに入る。

## 土坑 (図 17)

土坑 17 は調査区北東で検出した。平面形は楕円形に近い不整円形で断面は箱型を呈する。規模は 79 cm × 61cm で底面標高は 9.170 m を測る。遺物は上層で集中して出土した。以下が図示しえたものである。1 はロクロ成形のかわらけ大皿、体部中ほどに弱く稜が入り、器高が高い。内底面に強くナデが入り、底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物多く、粉質である。2 は常滑片口鉢の I 類の口縁部片である。胎土は礫を若干含有する。第 2 段階 5 ~ 6a 型式。3 は緑褐釉の壺である。口縁の内側に灰色の付着物がある。これは重ね焼きの際の熔着を防ぐものであろう。短頸で肩は張らず、体部と肩の間に沈線が二条施される。釉葉は淡灰緑色で不透明。内外に薄く施釉される。胎土は精良堅緻だがやや気孔も見られる。4 は砥石、鳴滝産の仕上砥である。砥面は三面使用している。

土坑 18 は長方形の土坑。調査区の北西隅で土坑 19 と並んで検出した。土坑 19 はほぼ同形態の遺構と思われる。遺構の周辺は炭化層が広がる。柱穴 96・97 に切られる。主軸方位は N - 7° - W であり、平面形は長方形で断面形は箱型を呈する。規模は (17.1) cm × (13.4) cm、底面標高は 9.371 m を測る。出土遺物は 5・6 で、5 は常滑甕の押印部分である。押印は四角に丸文か。胎土が含有物少なく精良である。6 は土製品の土錘片。

土坑 19：土坑 18 同様、方形もしくは長方形の土坑であり、土坑 19 と並んで検出した。遺構の周辺は炭化層が広がる。主軸方位は N - 7° - W であり、平面形は方形もしくは長方形で断面形は箱型を呈する。規模は (12.9) cm × (12.4) cm で底面標高 9.435 c m を測る。

## 第 I b 面出土遺物 (図 18)

1 は手捏ねかわらけ小型皿。底部は薄く、体部の稜は強く入る。全体にぼってりした器形である。2 から 4 はロクロ成形の小型かわらけである。2 は内底面の外周にナデが入り、中央部が盛り上がる。胎土は砂の多いやや粗土である。3 は直線的に立ち上がり、口縁部僅かに外反する。4 も口縁部が外反する。内底面にナデあり、底部に板状圧痕残る。胎土は含有物が少ないが泥岩粒が入る。5 はロクロ成形かわらけの大皿の口縁部片である。全体にぼってりとし、口縁部はやや外反する。6 は瀬戸内系白かわらけである。ロクロ成形で薄手の大皿であり、体部下方に強い稜を持ち、胎土は長石を多く含む。7 は常滑の片口鉢 I 類。体部のロクロ目がややきつい。胎土は灰色で長石、礫を含む。第 2 段階 5 型式が比定できよう。8 は常滑の甕の体部、押印部分である。格子目の押印がランダムに押印される。9 は常滑の甕、転用摩耗陶片、1 角が摩耗する。10 も常滑の甕、転用摩耗陶片である。頸部あたりか、2 辺が摩耗している。11 は甌等の底に敷く土製の篋である。円盤に複数の穿孔がある。小片であるが 3 穴が確認できる。胎土は瓦器質で粗く、二次焼成を受け、底部は灰色である。12・13 は土製品の土錘であり、指頭圧痕が僅かに残る。14 は鉄製品の釘か。15 は滑石鍋である。直径 8mm の穿孔が確認できる。鏝の上下は鑿により成形した後、木口状工具のようなもので掻き削った痕跡を残す。鏝幅は 1.8cm を測り、断面は台形を呈する。16 は砥石の中砥、伊予産である。白灰色で使用面は 3 面ある。17 はチャートであるが使用痕は不明。拳大の凝灰質砂岩を写真のみ掲載した。

## 炭化層出土遺物 (図 19)

ここで扱う炭化層とは I b 面を構成する泥岩地形層の下に堆積した炭化層を指す。この炭化層を剥ぐと II 面が現れる。

1・2 は炭化層上層から出土のロクロ成形のかわらけである。1 は小型で、胎土は砂を多く含む。内

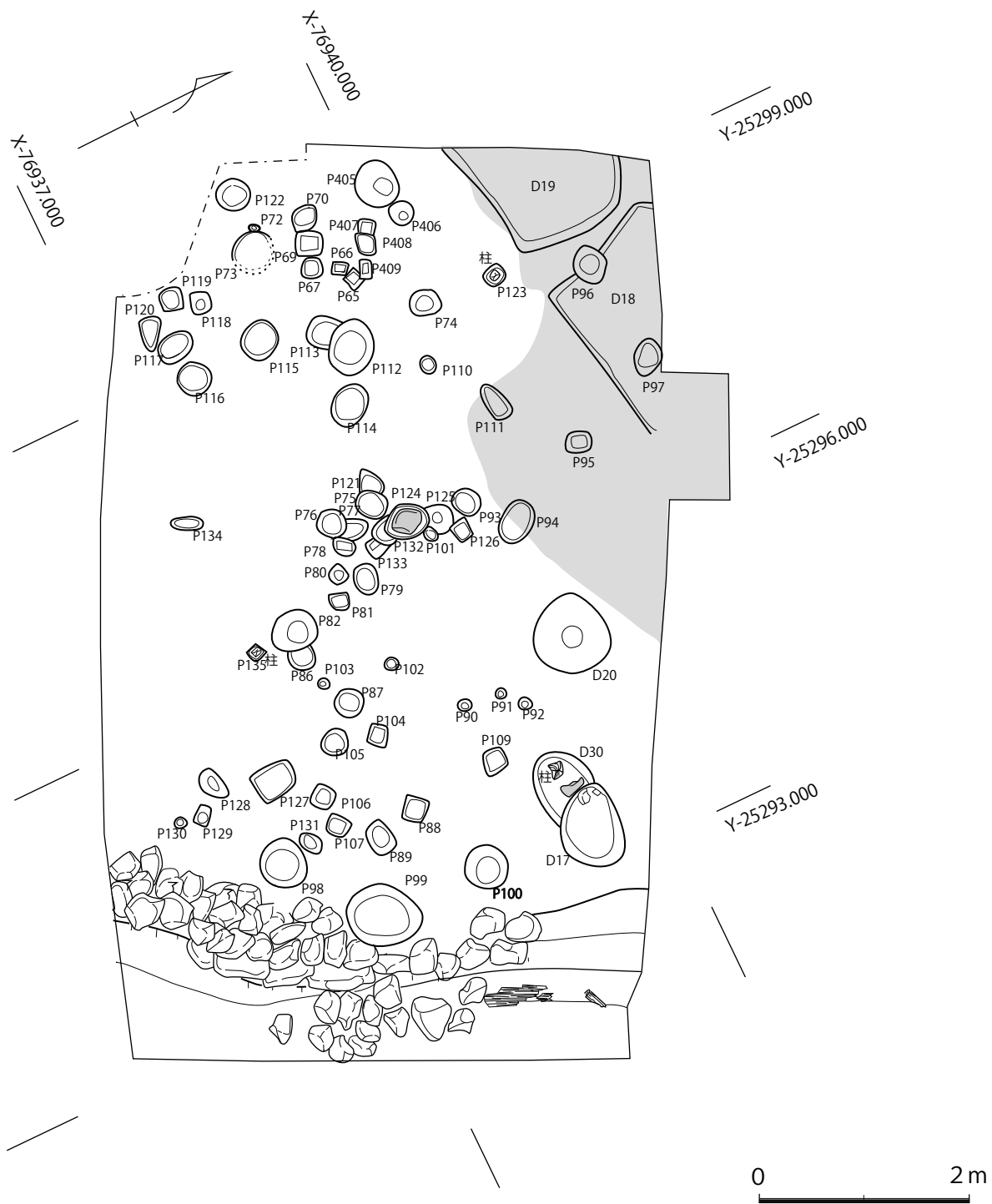


图16 第I b面全体图

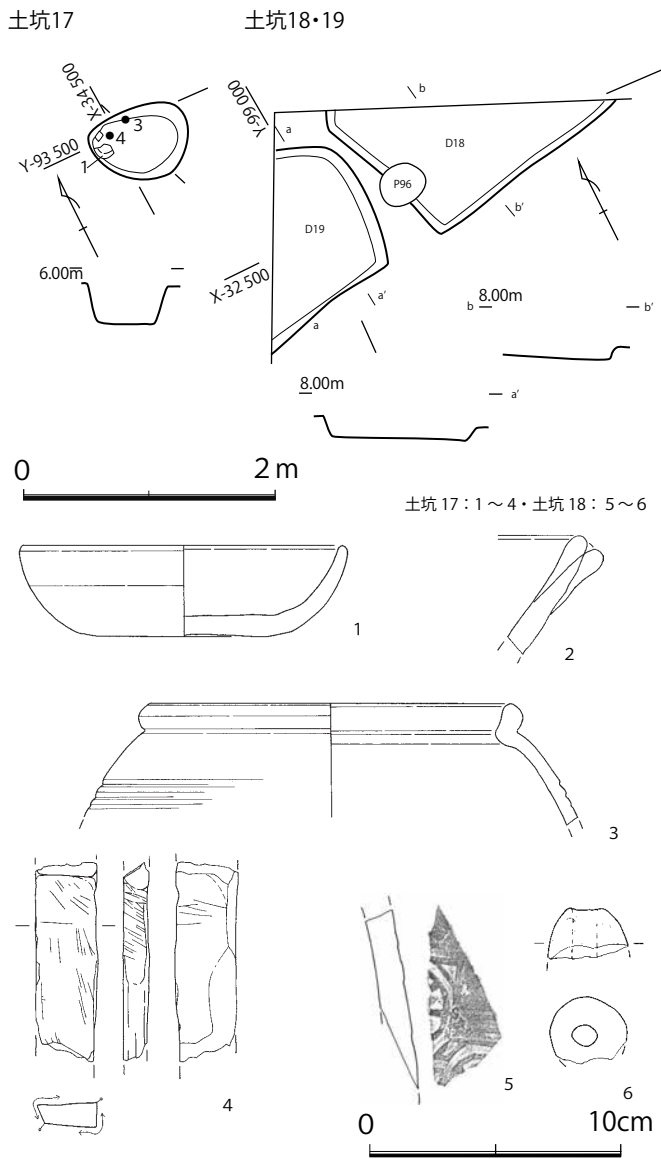


図17 第1b面土坑

胎土は白灰色で精良堅緻であり、釉は水青色の透明釉が内外面に薄く施釉されており、文様は牡丹唐草である。2は土製品の土錘で表面が摩滅しているが、指頭痕が僅かに残る。

### 建物3 (図21)

建物3は礎石により構成され、調査区の全体で検出されるが東側以外三方に広がる様相を示している。礎石は安山岩を主体とし、泥岩、凝灰質砂岩も混ざる。中には火を受け焼けた礎石もある。また柱当たりを面取りし加工した礎石も見られた(図21)。建物は南北に3間(柱間距離北から2.13m - 1.80m - 1.85m)、東西に2間(柱間距離1.94m - 1.94m)の確認である。3間3間の方形を成さないで御堂ではない。先にも述べたが東側以外は調査区外に広がる。主軸方位はN - 10° - Eであり、礎石間の石の配列に規則性が認められる。床束であろう。また、D - D'線上の礎石は石が複数伴って検出されている。A - A'線は平坦面の東限であり、南に延びない構造を持つようである。

1は礎石で柱座部分と底面を鑿で削り加工している。柱座部分は20cm × 12.5cmをやや窪ませるように削る。底部は平坦に削り礎石を安定させている。

底面にナデがあり、底部は板状圧痕が残る。口縁がやや開く器形である。2は大型で、胎土は砂を若干含有する良土。内底面に弱いナデが入り、底部は板状圧痕が残る。器壁薄く器高が高い。3から5は炭化層中からの出土である。3はロクロ成形の大型かわらけ皿。内外面に油煙煤が付着する。灯明皿であろう。口縁部片であるがぼってりした器形である。4・5は鉄製品の釘であろう。

### 3. 第II面遺構と出土遺物

先にも述べたように第I b面の地形の下に炭化層、焼土が堆積する。炭化層は厚いところで14cmを測った。その炭化層を取り除き、それを第II面とし、海拔9.400mで礎石建物を検出した。礎石建物を検出する段階で、礎石の上に轍状の遺構が渡った。埋土は炭化物をふんだんに含む。建物の基礎である可能性が高い。他に調査区の東側では落ち込みが確認されている。

出土遺物は手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、常滑産甕、瀬戸の深皿、皿、渥美産甕、青白磁の梅瓶、褐釉、鉄製品、土製品などである。

#### 第II面出土遺物 (図20)

第II面上から出土し図示しえた遺物は図20の1・2である。1は青白磁の梅瓶胴部片である。



表3 第I b面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P-65	17.0	15.0	3.0	9.500		P-109	24.0	21.0	6.5	9.440	
P-66	14.0	14.0	45.0	9.485		P-110	16.0	15.0	12.5	9.375	
P-67	19.0	16.0	16.5	9.350		P-111	38.0	19.0	18.0	9.385	
P-69	22.0	22.0	7.0	9.440		P112	51.0	44.0	15.0	9.410	P113 を切る
P-70	25.0	21.0	8.0	9.440		P113	31.0	26.0	5.0	9.510	
B-3	10.0	6.0	3.0	9.470		P-114	41.0	35.0	15.5	9.390	
P-73	(42.0)	(19.0)	5.0	9.200	P72 を切る。	P-115	38.0	36.0	16.5	9.355	
P-74	30.0	26.0	9.0	9.450		P-116	34.0	34.0	14.0	9.350	
P-75	31.0	26.0	24.0	9.290	P 1 2 1 を切る。	P-117	38.0	25.0	13.0	9.330	
P-76	31.0	27.0	20.5	9.310	P 77 を切る	P-118	20.0	20.0	16.5	9.315	
P-77	33.0	20.0	23.0	9.310		P-119	23.0	20.0	8.5	9.375	
P-78	21.0	14.0	20.0	9.300		P-120	34.0	21.0	10.5	9.335	
P-79	30.0	14.0	24.0	9.310		P-121	25.0	15.0	13.0	9.400	
P-80	17.0	16.0	7.5	9.425		P-122	33.0	28.0	7.5	9.395	
P-81	19.0	15.0	23.5	9.300		P-123	23.0	21.0	7.5	9.455	柱が残る
P-82	38.0	32.0	20.5	9.265	P84・85	P-124	42.0	34.0	21.0	9.370	P125 を切る / 礎石が残る
P-86	24.0	(20.0)	19.5	9.285		P-125	29.0	(25.0)	22.5	9.300	
P-87	29.0	26.0	23.5	9.265		P-126	19.0	18.0	8.0	9.440	
P-88	24.0	23.0	8.5	9.350		P-127	41.0	31.0	14.5	9.265	
P-89	32.0	23.0	17.0	9.300		P-128	34.0	21.0	7.0	9.340	
P-90	13.0	13.0	4.5	9.455		P-129	20.0	14.0	7.5	9.300	
P-91	11.0	10.0	4.5	9.470		P-130	15.0	10.0	5.5	9.315	
P-92	14.0	12.0	5.0	9.480		P-131	26.0	11.0	15.0	9.225	
P-93	25.0	24.0	15.0	9.360		P-132	25.0	(15.0)	25.1	9.370	
P-94	44.0	30.0	25.0	9.290		P-133	18.0	(18.0)	14.0	9.400	
P96	39.0	32.0	13.5	9.385		P-134	31.0	12.0	15.0	9.350	
P97	29.0	25.0	8.0	9.375		P-135	16.0	16.0	23.0	9.185	柱が残る
P-98	46.0	46.0	10.0	9.290		P-405	45.0	37.0	54.0	8.970	方形土坑
P-99	72.0	56.0	12.0	9.265		P-406	24.0	20.0	6.5	9.460	方形土坑
P-100	44.0	44.0	14.5	9.300		P-407	16.0	14.0	2.5	9.480	
P-101	15.0	12.0	8.0	9.450		P-408	22.0	15.0	12.5	9.475	
P-102	14.0	14.0	7.5	9.415		P-409	17.0	12.0	11.5	9.485	
P-103	10.0	10.0	6.5	9.390		D-17	79.0	61.0	32.0	9.170	
P-104	20.0	13.0	6.5	9.440		D-30	56.0	(48.0)	33.0	9.170	
P-105	17.0	16.0	17.5	9.260		D-20	71.0	68.0	21.5	9.340	
P-106	20.0	20.0	17.0	9.290		D-18	(17.1)	(13.4)	11.0	9.370	
P-107	20.0	19.0	10.0	9.330		D-19	(12.9)	(12.4)	28.5	9.435	

(単位：海拔 m / 以外 cm)  
(P：柱穴 D：土坑)

## 土層注記

- A類 暗褐灰色粘質土：直径3cm前後の泥岩がやや入る。  
炭化物が多く黒っぽい土
- A'類 暗褐灰色粘質土：A層に似るが泥岩粒が細かく炭化物が少ない
- B類 暗褐灰色粘質土：泥岩がみੱしりの泥岩層やや砂っぽい
- C類 暗灰色土：泥岩やや入る。砂の多い灰色の土
- D類 暗黒褐色粘質土：炭化物の少量入る粘性のある土。  
1cm未満の泥岩粒が少量混入
- E類 暗褐灰色粘質土：明るい土、炭化物少量、4cm前後の  
泥岩粒やや多めに入る。

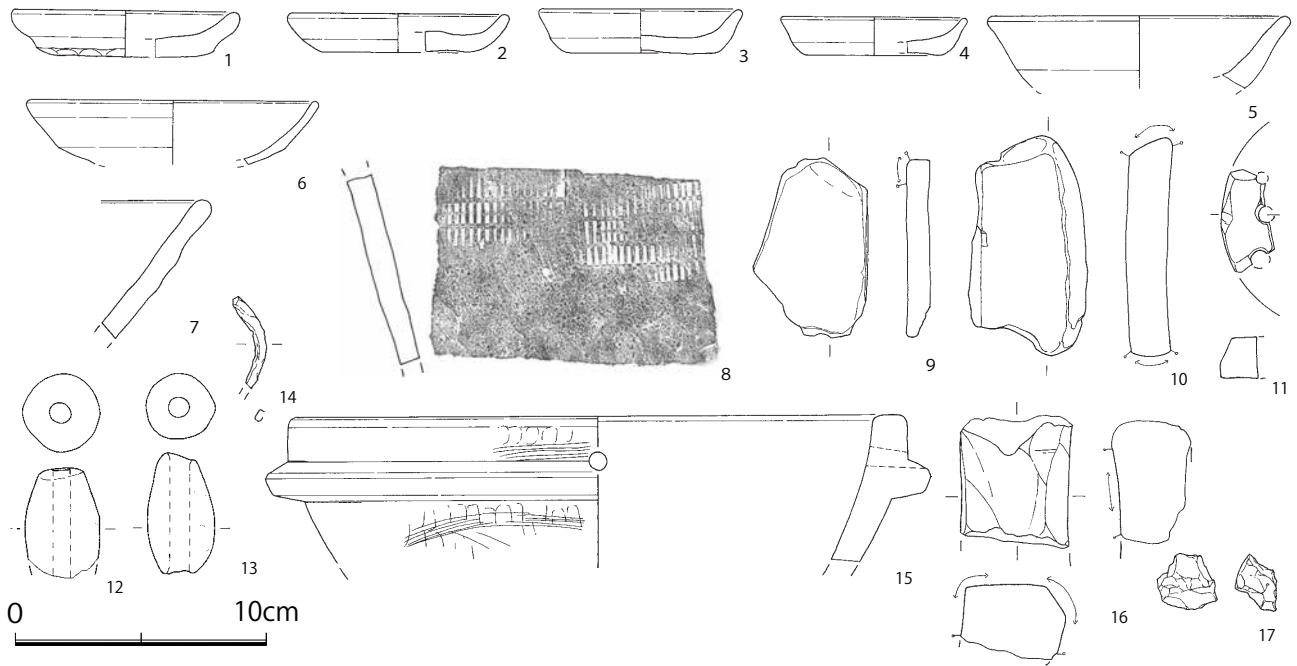


図18 第Ⅰb面出土遺物

落ち込み2 (図22)

第Ⅱ面での調査区東側の落ち込みは調査区南壁、北壁の土層堆積図から図面を起こした。泥岩による護岸施設を外すと、途中段差を持つがゆるやかな傾斜を呈する。確認出来た幅は北壁で1.95m、南壁で2.00mを測る。70cmで底面が確認できたがさらに東側には下がっていく様相を示す。

出土遺物は護岸を取り外し第Ⅰ面から第Ⅱ面までのものを採取した。1はロクロ成形の小型かわらけであるが、内底面の隅に直径5mmの穿孔がある。胎土は砂、含有物を多く含む粗土であり、器形は体部下半がやや張る。口縁は僅かに外反する。2は渥美産甕の押印部分である。胴部片であろう。押印は格子目が二段見て取れる。3は常滑甕の転用打ち欠き陶片である。二辺の端が打ち欠けている。4は瀬戸の緑釉小皿である。胎土は砂を含む硬質土であり、口縁に緑色の透明釉がかかる。貫入が見られる。5は褐釉の小片の転用摩耗陶片である。側面はかなり摩耗している。

4. 第Ⅲ面遺構と出土遺物

第Ⅱ面から細かい泥岩を多量に含む暗褐色粘質土を10～20cm掘り下げると海拔9.300mで泥岩による暗黄褐色粘質土の地形層が検出され、これを第Ⅲ面とした。第Ⅲ面では第Ⅱ面の礎石建物の礎石の下から柱を持つ柱穴が検出され、掘立柱建物となった。

遺構は他に土坑が2基、柱穴114個、木樋1箇所、落ち込み1箇所である。出土遺物は土師器、須恵器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、火鉢、常滑甕、鉢、瀬戸皿、四耳壺、鉢、渥美甕、備前鉢、瓦、

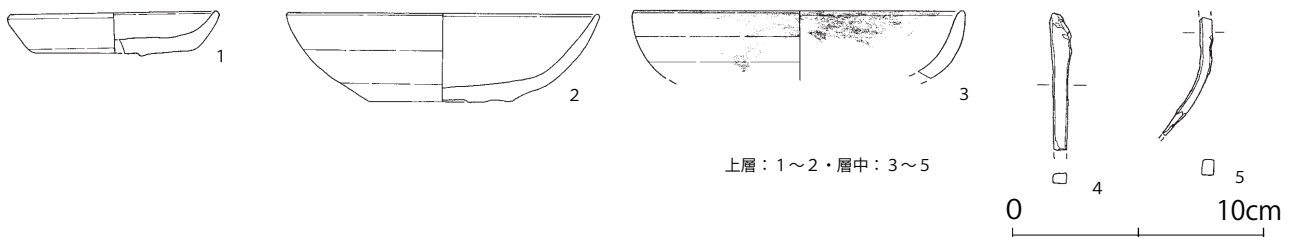
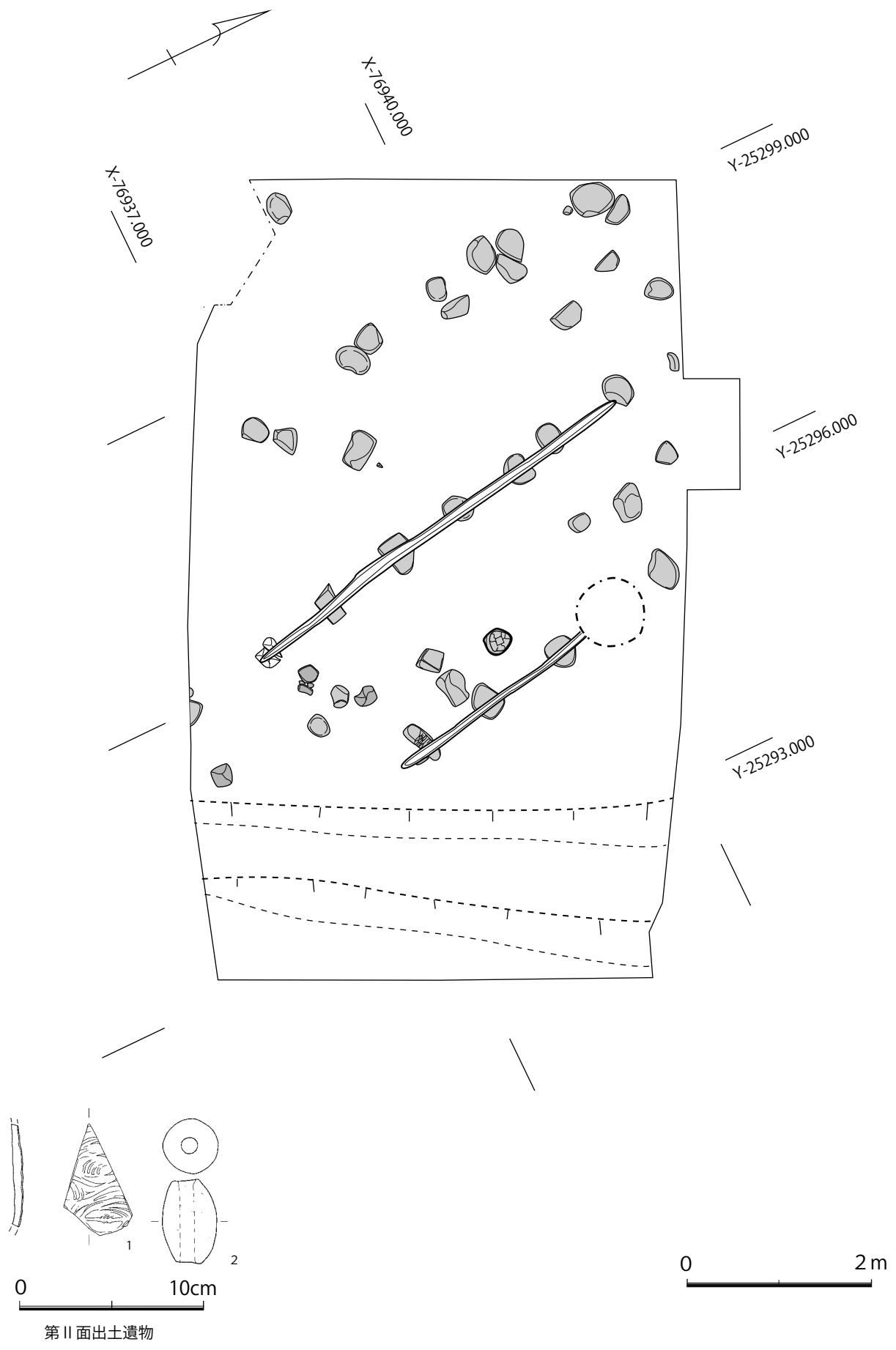


図19 炭化層出土遺物



第II面出土遺物

图 20 第II面全体图

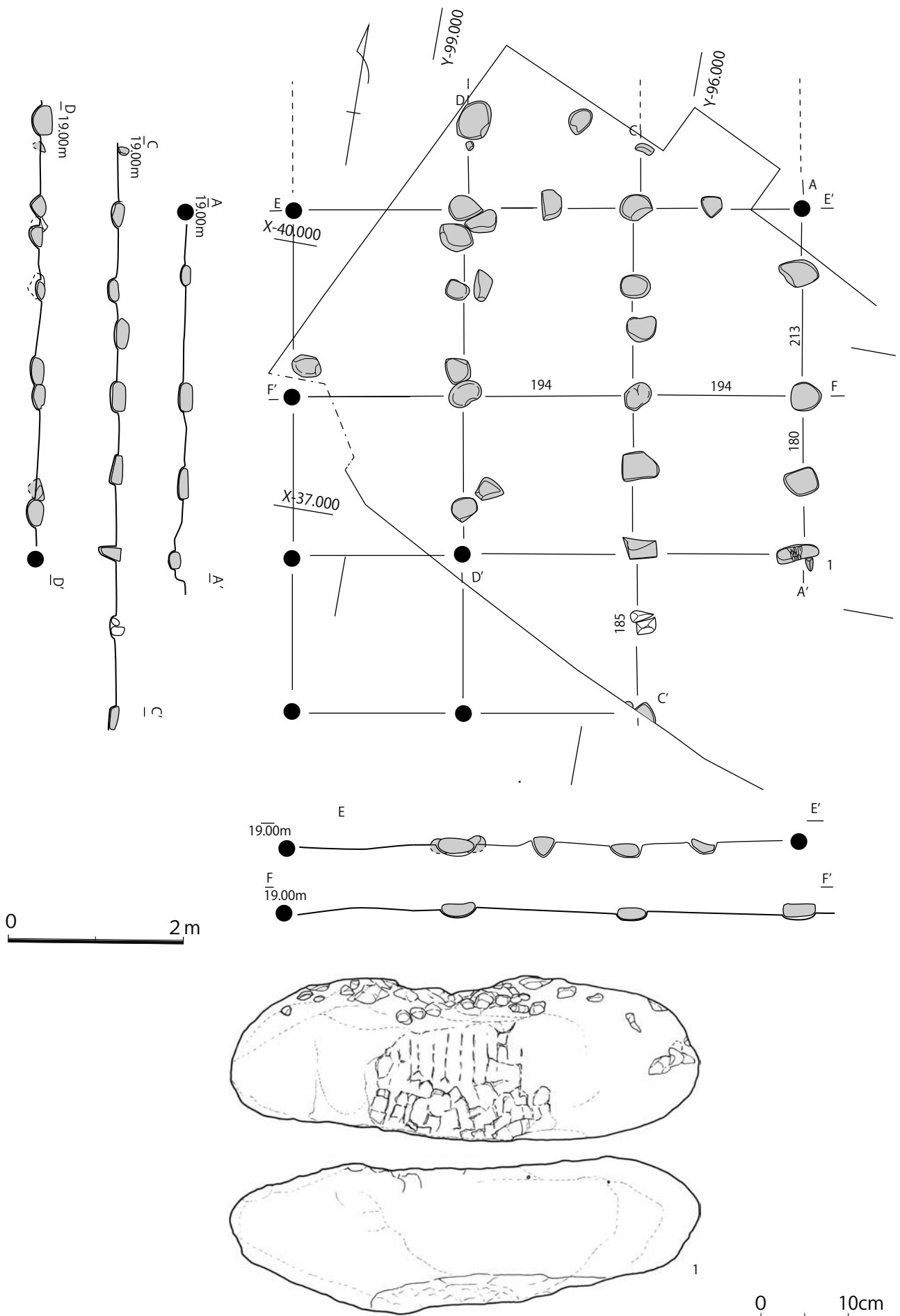


图 21 第 II 面建筑物 3

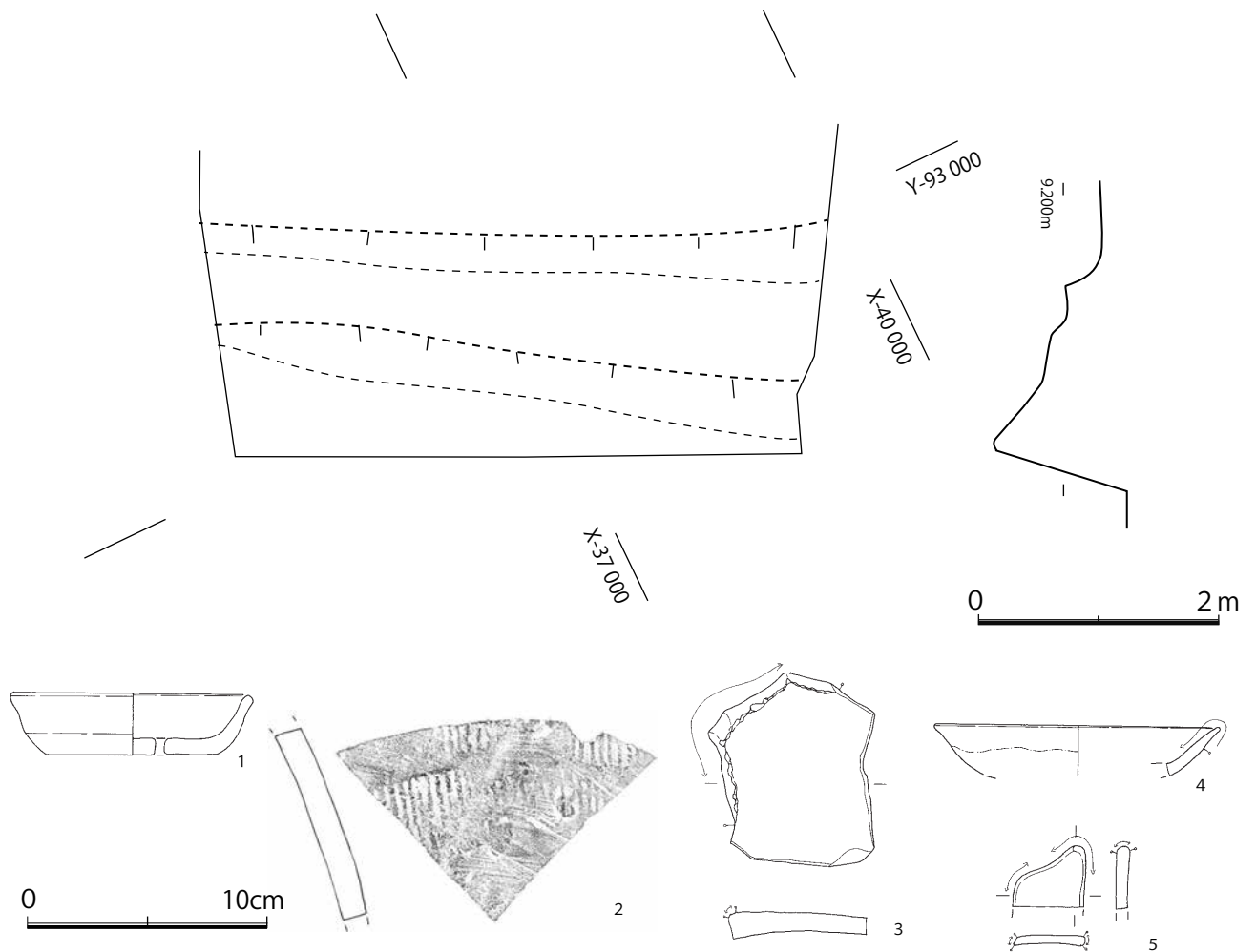


図22 第Ⅱ面落ち込み2

土製品、鉄製品、銭、木製品等である。

#### 建物4 (図24・25)

第Ⅱ面の礎石を取り上げ、掘り下げると礎石のあった場所に柱を持つ柱穴が検出され1棟の掘立柱建物となりこれを建物4とした。建物は調査区全体に展開し検出された。規模は南北に3間(柱間距離北から2.10m - 2.06m - 2.06m)。東西に3間(柱間距離西から1.97m - 2.05m - 1.90m)を確認したが全容は調査区の外に展開するので掴めない。しかし東側には木樋が検出されており、東限が示される。東の柱穴列は第Ⅱ面の礎石建物同様南に1間延びず柱穴はどれも浅い上に幅10cm程の小さな柱しか持たない。底的な施設になるのだろうか。また束柱とおぼしい柱穴も確認された(柱穴195・161・244・247)。主軸方位は建物3と同じN - 10° - Eである。埋土は半拳大の泥岩を含む非常に粘性の強い黒褐色強粘質土である。柱はいずれも礎板を持つ。柱の残存長は50cmから80cmで幅は15cmから20cmであり、丁斧痕が残り、四隅を面取りしているため厳密には八角形である。

柱穴137は調査区西の試掘坑にかかった柱穴である。しっかりした柱と礎板を持つ。柱穴は試掘坑に切られるが平面形はおおよそ円形であろう。断面形は逆台形を呈し、規模は65cm × (54)cm、深さは49.7cm、底面標高は8.733mを測る。柱の規模は残高59cm、幅16cm。礎板は柱当たりの痕跡を残す。規模は27.5cm × 16cmである。出土遺物は手捏ねかわらけの小型である。口縁に油煙煤が付着しており灯明皿であろう。内底面は剥離し荒れている。

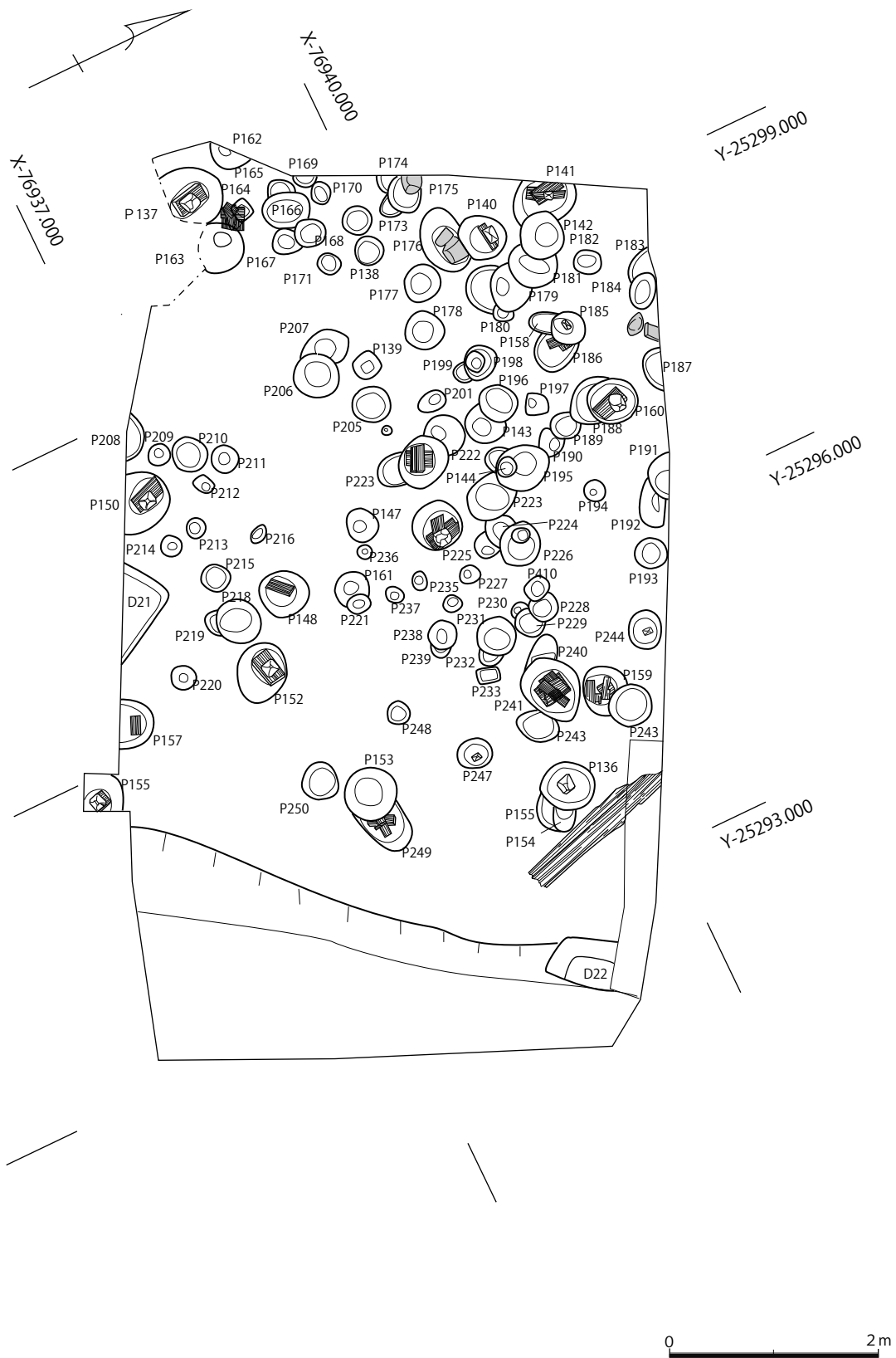
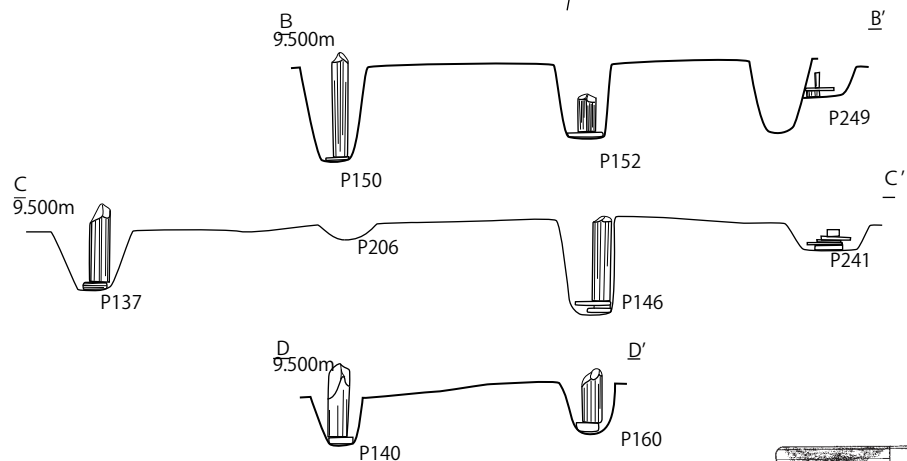
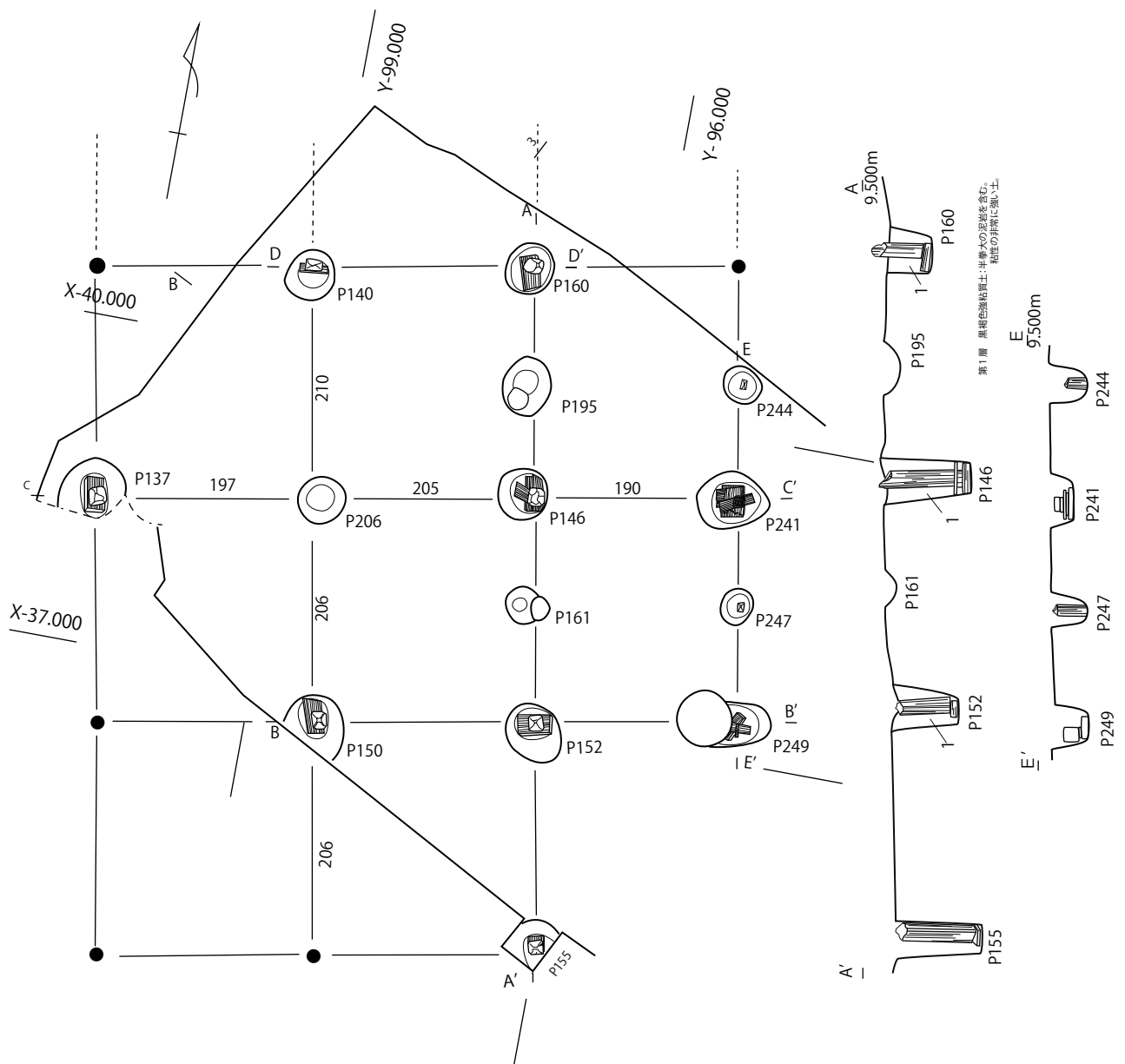
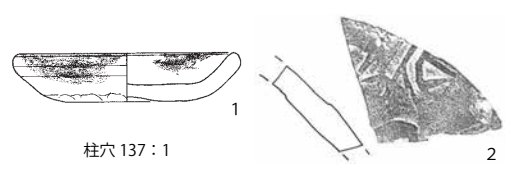


図 23 第三面全体図



	P195	P144	P146	P161	P152	P155	P150	P249	P137	P206	P241	P140	P244	P247
柱間	53.0	19.0	47.0	33.0	14.0	(43.0)	59.0	(40.0)	65.0	44.0	68.0	47.0	37.0	33.0
柱径	45.0	19.0	46.0	33.0	10.7	(19.0)	43.0	38.0	(54.0)	44.0	52.0	44.0	32.0	30.0
海抜	9.155	9.335	8.515	9.220	8.670	9.150	8.490	8.970	8.733	9.190	9.050	8.830	9.025	8.990

単位：海抜m/ 以外cm



柱穴 137 : 1  
柱穴 140 : 2



図 24 第三面建物 4

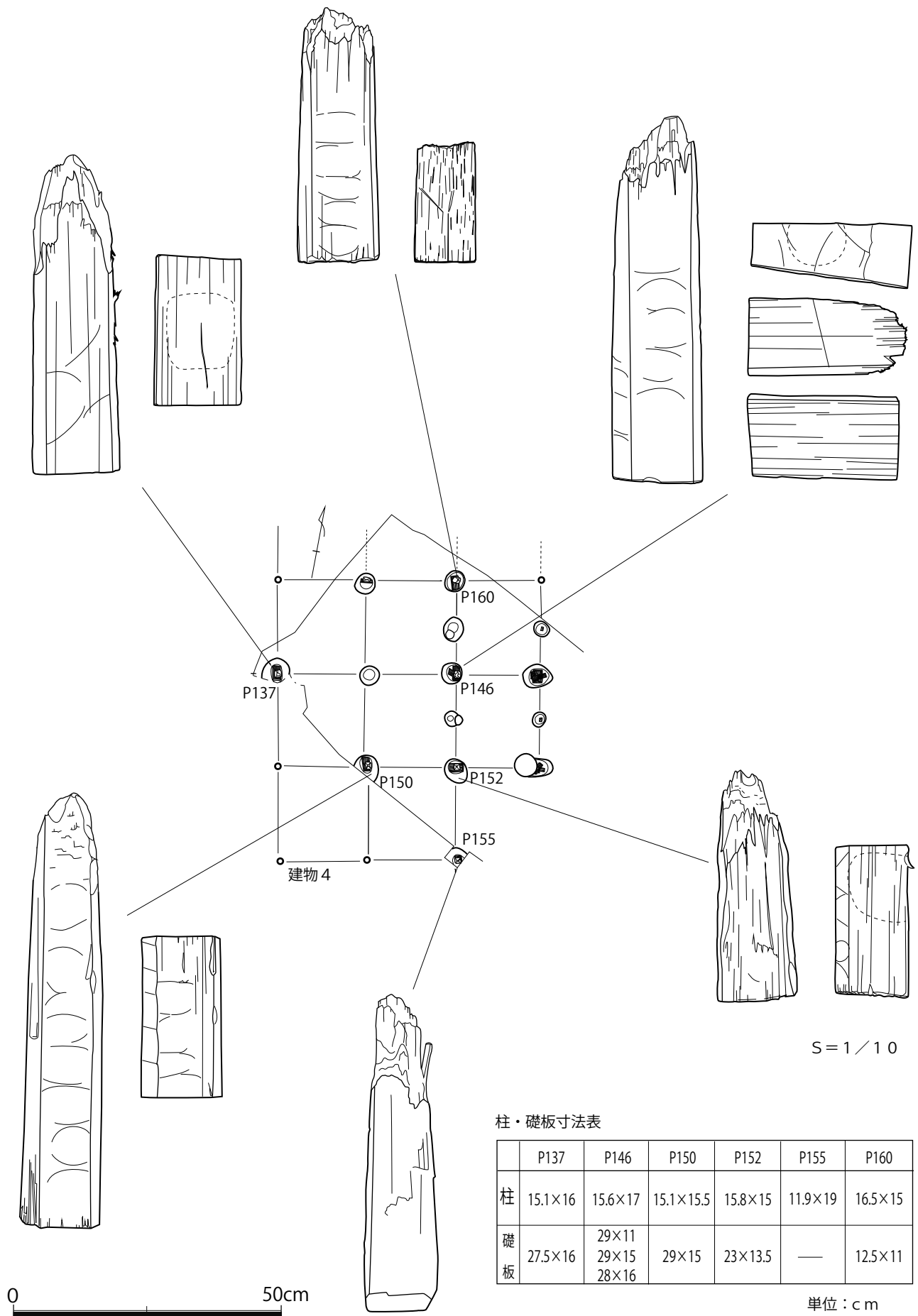


図 25 第三面建物 4 の柱と礎板詳細図



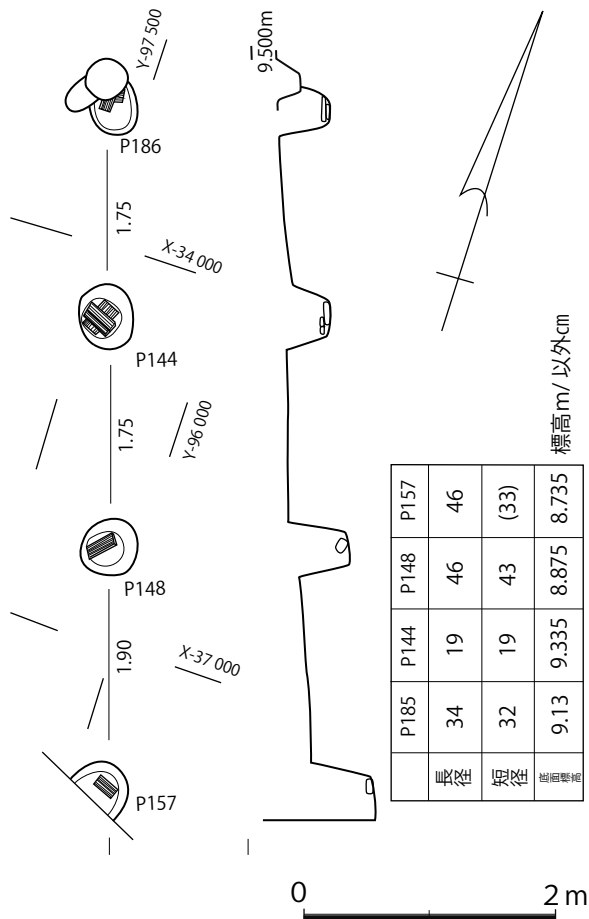


図 26 第三面柱穴列

柱穴 146 は平面形は円形、断面形はU字型を呈する。規模は 47cm × 46cm で深さ 83cm、底面標高は 8.515 m を測る。柱は礎板を三枚伴い出土した。礎板は雑然と重ねられ一番上の礎板には柱当たりの痕跡を残す。柱の残高は 68cm で幅は 17cm、礎板は上から、29cm × 11cm、29cm × 15cm、28cm × 16cm である。

柱穴 161 は柱穴 221 に切られる。束柱であろう。平面形は円形で断面形は皿状を呈する。規模は 33cm × 33cm で、深さは 8cm、底面標高が 9.22 m を測る。

柱穴 152 の平面形は楕円形で断面形は箱型を呈する。規模は 14cm × 10.7cm で深さは 57cm、底面標高は 8.670 m を測る。柱は残高 43cm で幅 15cm。礎板は柱当たりの痕跡を残す。寸法は 23cm × 13.5cm である。

柱穴 155 は建物の柱穴の並びを想定して調査区を一部拡張した。拡張を最小限に抑えたため、遺構全体は掘めなかったが柱を持つ柱穴の検出があった。平面形はおそらく円形で断面形は箱型を呈する。規模は (43) cm × (19)cm、深さ 120cm で底面標高が 9.150 m を測る。柱は底部を面取りしてあった。長さは 59cm で幅は 19cm を測る。

柱穴 244 は束柱であろう。幅 10cm 位の小さな柱を持つ。平面形は円形で断面形はU字型である。規模は 37cm × 32cm、深さは 27.5cm で底面標高は 9.025 m である。

柱穴 241 は柱は腐敗し原型を留めないが礎板は四枚重なり出土した。平面形は不整形で断面形は逆台形を呈する。規模は 68cm × 52cm で、深さは 25cm と浅い。底面標高は 9.050 m である。

柱穴 247 は束柱である。幅 10cm の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字形である。深さは 28cm、底面標高は 8.990 m を測る。

柱穴 140 は調査区北西で検出した。平面形はほぼ円形で断面U字型を呈し、規模は 47cm × 44cm、深さは 48cm で底面標高 8.830 m を測る。出土遺物は常滑の甕胴部の押印部分である。押印は四角に車輪・菊花文。

柱穴 206 は調査区東で検出した。平面形は円形で、断面形は皿状を呈する。規模は 44cm × 44cm、深さ 11cm、底面標高 9.190 m を測る。

柱穴 150 は調査区南で検出した。調査区南壁に切られるが、平面形は概ね円形で断面はU字型を呈し、規模は 59cm × 43cm、深さは 76.5 cm であり、底面標高は 8.490 m を測る。柱は礎板を伴う。残存状態良好で残高が 79cm、幅は 15.5cm を測り、四隅を面取りしている。また、丁斧痕も顕著である。礎板は 29cm × 15cm を測る。

柱穴 160 は調査区北東で検出した。平面形は円形で、断面形はU字形を呈する。規模は 51cm × 41cm で深さは 38cm。底面標高は 8.920 m を測る。柱の残高は 48cm で幅が 15cm。礎板は 12.5cm × 11cm である。柱穴 195 は束柱か。平面形は楕円形で断面形は皿状を呈する。規模は 53cm × 45cm で深さは 16.5cm と浅く、底面標高は 9.155 m を測る。

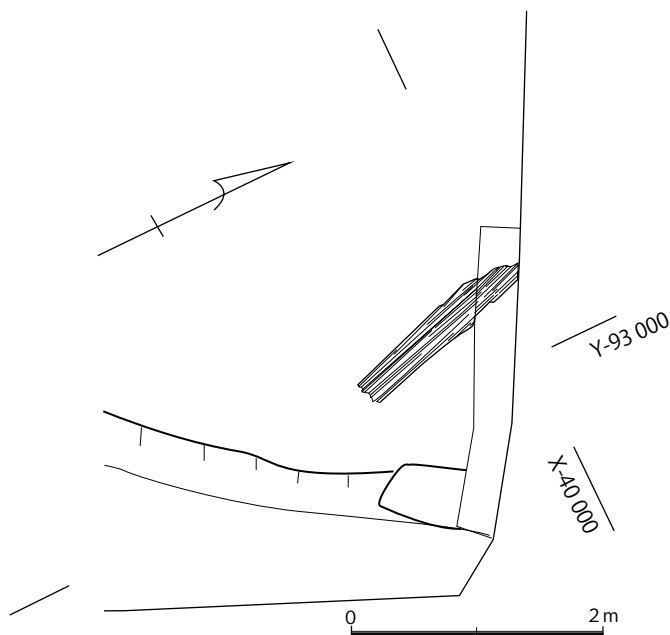


図 27 第三面木樋出土状況

柱穴 249 は柱穴 153 に切られる。平面形は楕円形で断面形は U 字型である。規模は (40) cm × 38cm、深さは 29cm、底面標高、8.970 m である。柱は幅 10cm のもので、礎版は 2 枚組み合わせる。

柱穴列 (図 26)

調査区中央で建物 4 とは軸を異にする柱穴列を検出した。建物としての規則的な展開は掴められず、柱穴列とした。柱は残らないがいずれも礎版を伴う。規模は南北に 3 間 (北から柱間距離で 1.75 m - 1.75 m - 1.90 m) で、主軸方位は N - 18° - E である。柱穴 186 は柱穴 185・158 に切られる。平面形は楕円形で断面形は U 字型を呈する。規模は 34cm × 32cm で底面標高は 9.13 m である。柱穴 144 は、平面形は円形で断面は逆台形を呈する。規模は 19cm × 19cm。底面標高は 9.335 m を測る。柱穴 148 は平面形不整円形で断面は箱型を呈する。規模は 46cm × 43cm、底面標高は 8.875 m を測る。埋土は 1 ~ 3cm の泥岩と炭化物が多く入る黒褐色強粘質土である。柱穴 157 は調査区南壁に切られる。平面形は概ね円形を呈すると思われる。断面形は箱型か。規模は 46cm × (33)cm で底面標高は 8.735 m を測る。

### 木樋出土状況 (図 27)

調査区の北東隅で木樋の底部を検出した。調査時には捉えられなかったが、調査区北壁の土層堆積を観察すると木樋の周囲は窪み、溝状の掘り込みが見られた。第 IV 面まで掘り下げると木樋と同じ位置で溝が検出されているため、以前からの溝に第三面段階で木樋が設けられたのだろう。木樋の厚さは 3cm で幅は 30cm。確認出来た長さは 1.6 m であるが、調査区北壁より先に延びる。

### 落ち込み 3 (図 28)

調査区の東端で検出した。遺構は傾斜を持って落ち込んでいき、現地表下 2 m 以下にもぐり底部は掴めなかった。確認した最大幅は 2.2 m である。出土遺物は 1 ~ 4 までが上層からで、5 ~ 8 が下層からの出土である。1 はろくろ成形のかわらけ大皿である。内底面に強いナデが入る。胎土はきめ細かくて焼成はやや甘い。2 は常滑の甕口縁部片である。縁帯幅 4cm である。第 3 段階 9 型式であろう。3 は常滑片口鉢 II 類。胴部の指頭痕はナデ消されている。胎土は精良で含有物少ない。第 2 段階 5 型式か。4 は常滑の甕の押印部分で格子文様である。5 はろくろ成形の小型のかわらけである。内底面のナデが強く残る。胎土は含有物が多くやや粗い。6 はろくろ成形の大型のかわらけである。体部は直線的に立ち上がり、口縁部がやや外反する。内底面はナデが強く入り、底部の板状圧痕は強く残る。胎土は含有物が少なくきめが細かい。7 は瀬戸の四耳壺の胴部片である。内面に強く指頭が見られる。胎土は硬質の精良土である。外面は緑灰色の釉がかかる。8 は瀬戸の卸皿底部片。内底面はへらによる卸目が付く。黄緑色の釉がかかり、底部は糸切りである。胎土は砂を含む軟質の精良土。9 は手捏ねかわらけの大皿

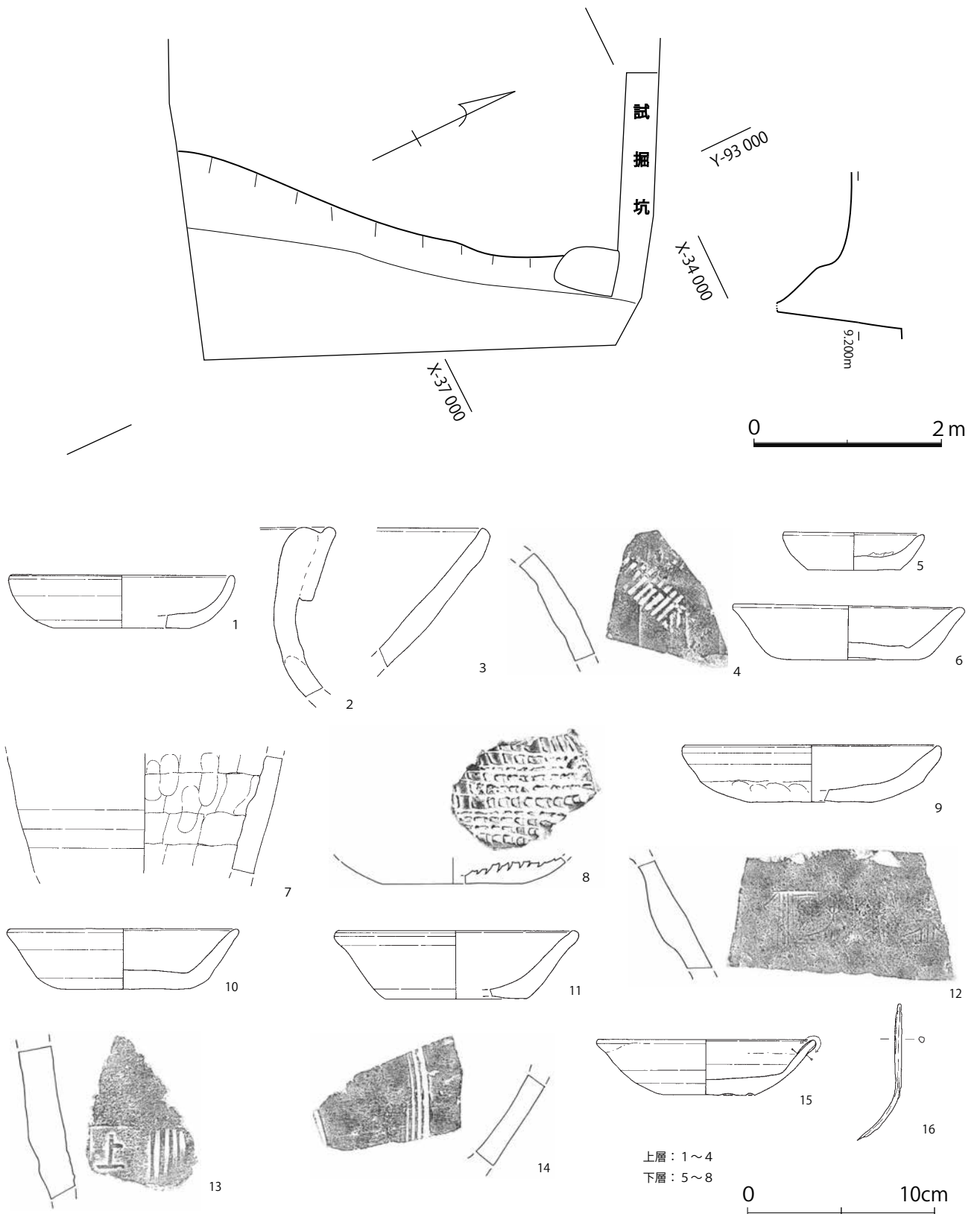


図28 第三面落ち込み3

である。指頭は無数に残り、体部に稜が巡る。胎土はやや良土。10はロクロ成形かわらけ大型。ぼってりとしている。内底面にナデが入り、底部は板状圧痕が残る。胎土は含有物を含むやや粗土である。

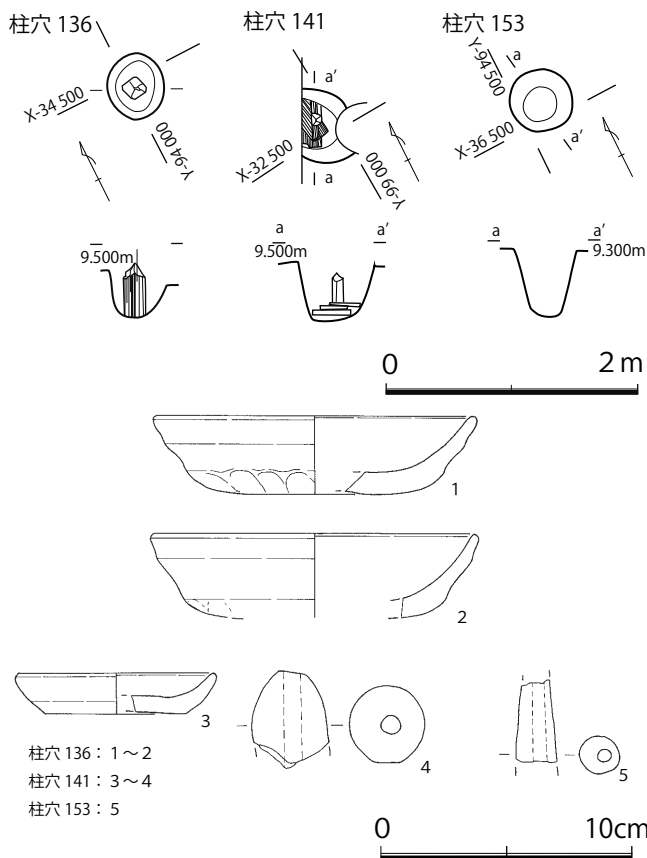


図 29 第Ⅲ面柱穴

柱穴 136 は調査区北東の木樋の近くで検出した。柱穴 154・155 を切る。20cm角の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字型である。規模は 51cm×46cmで底面標高が 8.980 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐色強粘質土である。出土遺物の 1 と 2 は手捏ねかわらけ大皿、指頭痕が顕著であり、口縁のヨコナデが強い。柱穴 141 は調査区の北西で検出した。三枚の礎板と幅 10cmに満たない杭のような柱を持つ。柱穴 142 に切られ、平面形は楕円形、断面形はU字型である。規模は 61cm×(26)cmで底面標高は 8.955cmを測る。埋土は 10cm大の泥岩と炭化物が入る黒褐色粘質土である。出土遺物は 3・4で、3はロクロ成形のかかわらけ皿小型。体部に稜が巡りやや内湾する。内底面弱くナデが入り、底部に板状圧痕が残る。4は土製品の土錘片で微かに指頭痕が残る。柱穴 153 は調査区の東側で検出した。柱穴 249 を切る。平面形は円形で断面形はU字型である。規模は 52cm×51cmで底面標高は 8.715 mである。出土遺物は 5の土製品の土錘である。柱穴 152からは鉄滓が出土し写真のみ掲載した。

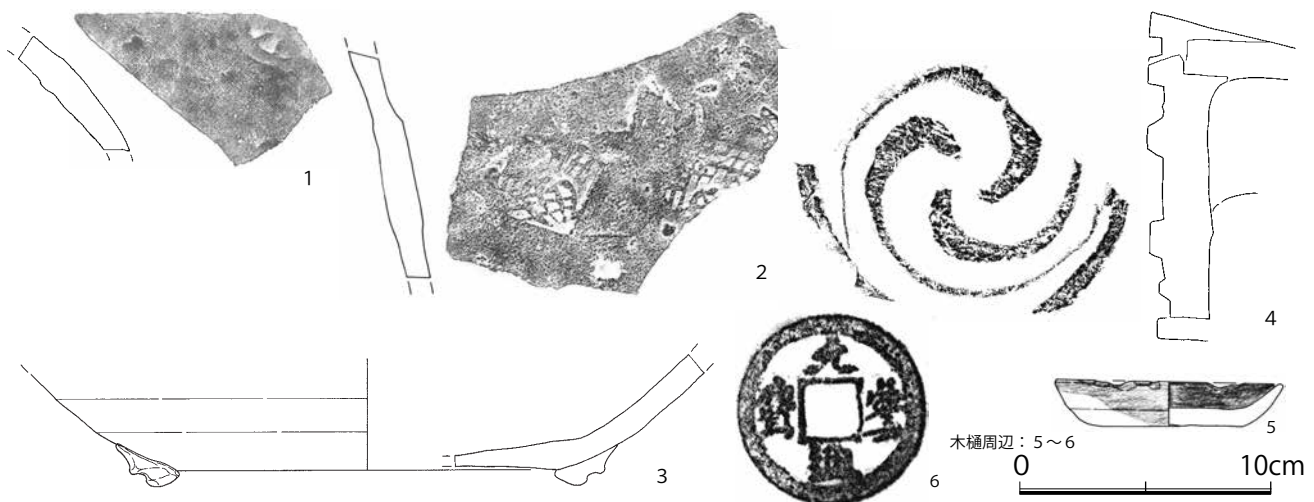


図 30 第Ⅲ面直上出土遺物

11はロクロ成形かわらけ皿大型。器高が高く口縁部外反する。内底面はナデが入る。胎土はやや良土である。12は常滑、甕胴部の押印部分。薄くてあまり判然としない。13は常滑甕の肩辺りの押印部分で、「上」という文字に縦の4本線が加わる。14は備前の播鉢である。5条の播り目が見られる。かなり摩滅している。15は瀬戸の縁釉小皿、回転ヘラ削りによる簡易的な削り出し高台が付く。口縁部には緑色の透明釉がかかる。胎土は硬質な良土である。内底面が摩耗している。

柱穴 (図 29)

柱穴 136 は調査区北東の木樋の近くで検出した。柱穴 154・155 を切る。20cm角の柱を持つ。平面形は楕円形で断面形はU字型である。規模は 51cm×46cmで底面標高が 8.980 mを測る。埋土は炭を多く含む黒褐色強粘質土である。出土遺物の 1 と 2 は手捏ねかわらけ大皿、指頭痕が

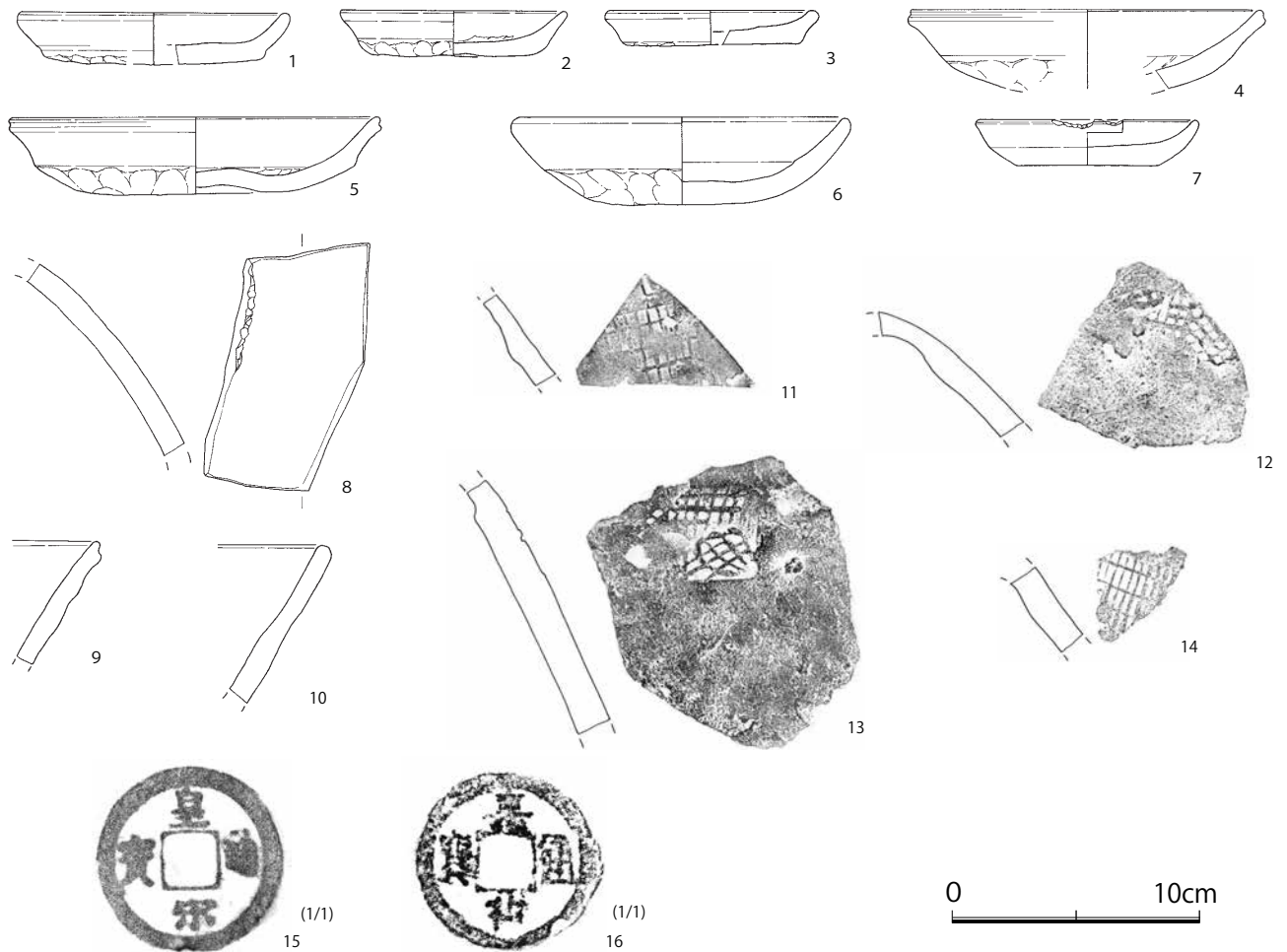


図 31 第Ⅲ面出土遺物

第Ⅲ面直上出土遺物（図 30）

1 は常滑の甕肩部片の押印部分で、文様は車輪・菊花である。2 は常滑の甕胴部片の押印部分である。文様は方形に斜格子である。3 は瀬戸の折縁深皿の底部片である。底部、体部外面は回転ヘラ削りで、脚が付く。内面は淡灰緑色の灰釉を刷毛塗りしている。胎土は軟質のやや良土である。4 は東海尾張系の軒丸瓦である。文様は左回りの三つ巴文である。巴文は断面が台形状で、頭（先端部）がとがり気味、尾の末端は周縁と連なる。周縁の幅は狭い。瓦当は離れ砂が付き背面は横位のナデで粗く整形される。丸瓦部径と瓦当径がやや異なり、横長にいびつである。5・6 は木樋の周辺から出土した面上遺物である。5 はロクロ成形の小型かわらけである。特に内面にくまなく油煙煤が付着している。また口縁の一部を打ち欠いている。内底面にナデがはいり、底部は板状圧痕が残る。6 は北宋銭「元豊通寶」行書。初鑄年は 1078 年である。

第Ⅲ面出土遺物（図 31）

1 から 3 は手捏ねかわらけの小型である。1 は粉質の良土で、1 段の指頭が見られる。2 は口縁の稜が弱い。内底面にナデが入り、底部に板状圧痕が僅かに残る。胎土は砂をやや多く含むが良土である。3 は作りがやや粗雑で底部が扁平である。胎土は砂を含む良土。4 から 6 は大型の手捏ねかわらけである。4 は口唇部に沈線が走る。内底面のナデは口縁部のヨコナデにより切られる。小片ながら二段の指頭痕が確認できる。胎土は含有物の少ない良土である。5 は口唇部に沈線巡り、内底面中央は盛り上がる。体部に口縁のヨコナデによる強い稜が入る。内底面のナデは口縁部のヨコナデに切られる。指頭痕

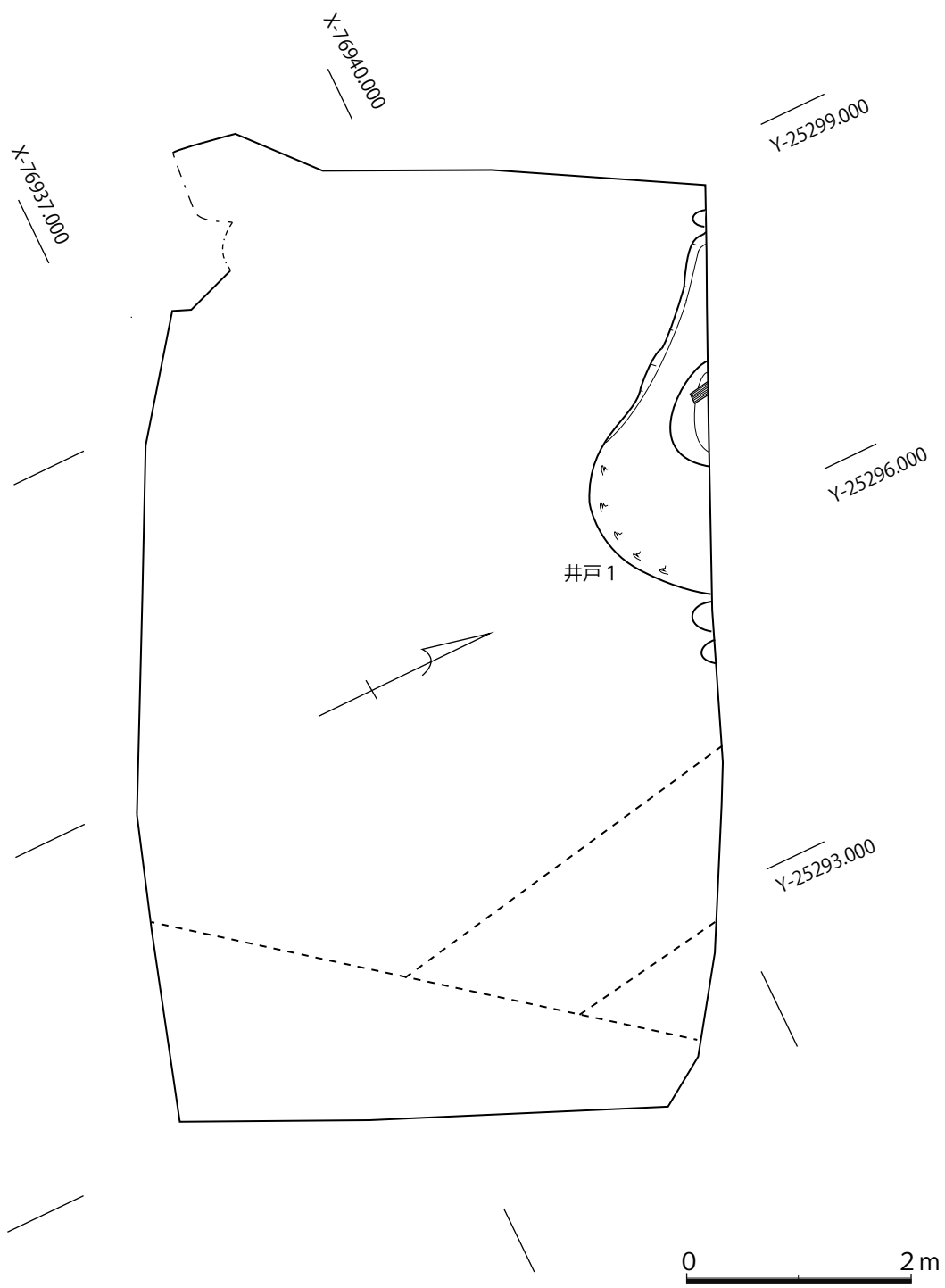


图 32 第Ⅲb 面全体図

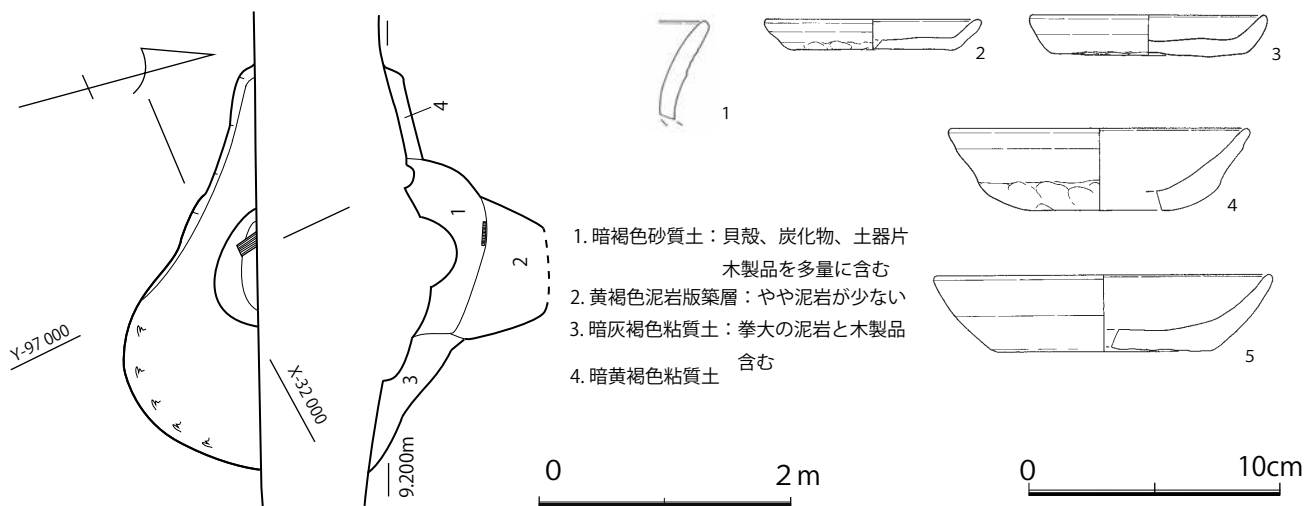


図 33 第Ⅲ b 面井戸 1

は二段確認できる。胎土は砂を少量含む良土である。6は全体に摩滅しているが体部に二段の指頭痕が確認できた。口縁部のヨコナデによる体部の稜は弱い。胎土は粉質の良土である。7は小型のロクロ成形かわらけである。口縁部の一部が打ち欠かれている。内底面にナデが入り、外体部の中央に稜が巡る。胎土は含有物の多いやや粗土である。8は渥美の甕胴部片、転用打ち欠き陶片である。1辺の角が打ち欠かれている。9は常滑片口鉢Ⅰ類の小片である。口唇部に沈線が巡る。1段階3型式が比定出来よう。10は常滑片口鉢Ⅱ類の小片である。体部はナデ上げ、内面はやや摩滅している。胎土は小石粒等の含有物が多い。第2段階5型式であろう。11は渥美の甕胴部片、格子文の押印部分である。12は常滑の甕肩部片、斜格子の押印部分である。13は常滑の甕胴部片で格子+斜格子の押印部分である。14は常滑の甕胴部片の格子の文様部分である。15は北宋銭「皇宋通寶」真書で、初鑄年は1056年である。16は判読が難しく「嘉□通寶」としか見えないがおそらく、北宋銭の「嘉祐通寶」の真書であろう。初鑄年は1056年である。

## 5. 第Ⅲ b 面遺構と出土遺物

第Ⅲ面から第Ⅳ面まで掘り下げる間に面としては非常に捉えにくく調査が不完全となった、第Ⅲ b 面の検出がある。海拔は9.25mを測り、部分的に泥岩による粗い地形がなされていたようである。井戸の検出がある。遺物は土師器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、渥美甕、常滑甕の出土があるがいずれも井戸1からの出土である。

### 井戸 1 (図 33)

調査区北西で北壁に切られて検出した。このため遺構は底部まで掘り上げることが出来なかった。埋土は貝殻、炭化物、遺物片、木製品を多量に含む。掘り方は浅く不整形である。掘り方の規模は320cm×104cm、井戸は(93)cm×35cmで深さは(1.5)mである。出土遺物の1は土師器壺の口縁小片である。三条の沈線が巡るようである。2、3は小型の手捏ねかわらけである。底部が扁平であるが2はヨコナデがきつく指頭痕との間の稜がはっきりしている。4は大型の手捏ねかわらけである。体部は二段の指頭痕が顕著であり作りが丁寧である。胎土は砂の多いやや良土。5はロクロ成形かわらけの大型である。内底面弱いナデが入る。底部は乾燥台から剥がした時の棒状の圧痕がある。写真のみの掲載で桃の種の出土がある。掘り方からは(18)cm×12.5cm、厚さ3.5cmの加工岩の出土がある。(写真のみの掲載)

表4 第三面遺構観察表

遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考	遺構番号	長径	短径	深度	底標高	覆度 / 備考
P136	51.0	46.0	32.0	8.980	A/P154・155を切る柱残る	P197	22.0	20.0	11.0	9.220	A
P137	65.0	(54.0)	49.7	8.733	A/建物3/柱が残る	P198	34.0	28.0	36.5	8.975	A/P199を切る
P138	28.0	27.0	6.0	9.215	A	P199	19.0	(13.0)	6.0	9.275	A
P139	26.0	26.0	23.5	9.075	A	P200	40.0	39.0	10.5	9.195	A
P140	47.0	44.0	48.0	8.830	A/P176を切る/建物3/柱残る	P201	28.0	16.0	6.0	9.275	A
P141	61.0	(26.0)	38.5	8.955	A/柱が残る	P202	42.0	(29.0)	9.0	9.240	
P142	46.0	42.0	23.0	9.090	D	P204	33.0	(24.0)	10.0	9.225	A
P143	38.0	(25.0)	24.5	9.090	B	P205	38.0	35.0	9.5	9.215	A
P144	19.0	19.0	6.5	9.335		P206	44.0	44.0	11.0	9.190	A/P207を切る/建物3
P145	51.0	43.0	34.0	8.985	A/P202・204/礎版残る	P207	52.0	35.0	85.0	9.205	A
P146	47.0	46.0	83.0	8.515	建物3/柱残る	P208	(46.0)	(17.0)	3.0	9.200	B
P147	34.0	29.0	26.5	9.055	A	P209	23.0	21.0	34.0	8.925	A
P148	46.0	43.0	41.0	8.875	A	P210	41.0	35.0	8.0	9.195	A
P150	59.0	43.0	76.5	8.490	A/建物3/柱残る	P211	25.0	25.0	4.0	9.220	A
P152	14.0	10.7	57.0	8.670	A/建物3/柱残る	P212	19.0	15.0	3.0	9.230	A
P153	52.0	51.0	53.5	8.715	P249を切る	P213	19.0	19.0	4.5	9.225	A
P154	(23.0)	22.0	35.5	8.945	P55を切る	P214	20.0	20.0	6.0	9.205	A
P155	(43.0)	(19.0)	120.0	9.150	A/建物3	P215	26.0	26.0	10.0	9.170	B
P157	46.0	(33.0)	47.5	8.735	A	P216	20.0	13.0	8.0	9.220	A
P158	24.0	(21.0)	10.0	9.200	P186を切る	P218	45.0	43.0	17.0	9.100	P219を切る
P159	50.0	43.0	44.5	8.830	礎版残る	P219	(30.0)	(9.0)	8.5	9.185	D
P160	51.0	41.0	38.0	8.920	A/建物3/柱残る/P188を切る	P220	25.0	25.0	7.0	9.180	A
P161	33.0	33.0	8.0	9.220	A/建物3	P221	21.0	16.0	9.0	9.210	A/P161を切る
P162	(43.0)	(19.0)	29.0	8.950		P222	28.0	(12.0)	3.5	9.285	B
P163	50.0	43.0	33.0	8.945	A	P223	(41.0)	37.0	4.5	9.270	B/P224を切る
P164	17.0	17.0	14.0	9.110	E	P224	31.0	(22.0)	7.5	9.220	D/P225を切る
P165	28.0	(14.0)	20.0	9.070	E	P225	24.0	(19.0)	8.5	9.250	
P166	48.0	38.0	24.5	9.015	A/P165を切る	P226	45.0	38.0	8.5	9.245	A/P224を切る
P167	29.0	26.0	24.5	9.035	A/P166を切る	P227	21.0	18.0	12.0	9.220	
P168	30.0	29.0	20.5	9.065	D/P166・167を切る	P228	30.0	25.0	6.0	9.260	A/P229を切る
P169	25.0	(12.0)	7.0	9.235	E	P229	29.0	(19.0)	3.0	9.290	B/P230を切る
P170	23.0	19.0	15.0	9.135	B	P230	18.0	(10.0)	0.5	9.325	A
P171	23.0	22.0	9.5	9.175	A	P231	39.0	39.0	10.0	9.220	B/P232を切る
P172	39.0	38.0	3.0	9.220	A	P232	25.0	11.0	5.0	9.240	A
P173	23.0	(15.0)	9.5	9.170	B	P233	21.0	14.0	6.5	9.225	A
P174	(24.0)	(20.0)	15.5	9.135	B	P234	18.0	17.0	4.0	9.280	B
P175	37.0	34.0	10.0	9.190	D	P235	18.0	15.0	5.0	9.260	A
P176	65.0	40.0	15.5	9.130	B	P236	14.0	14.0	14.5	9.225	A
P177	40.0	34.0	4.5	9.240	A	P237	13.0	13.0	6.0	9.250	B
P178	47.0	(24.0)	16.5	9.135	A	P238	29.0	27.0	17.0	9.140	P239を切る
P179	46.0	(30.0)	23.5	9.070	A/P178・P180を切る	P239	21.0	(8.0)	7.0	9.240	A/P238を切る
P180	21.0	(11.0)	10.5	9.200	B/P178を切る	P240	24.0	(24.0)	25.0	9.050	A
P181	45.0	(30.0)	24.0	9.070	B/P179を切る	P241	68.0	52.0	25.0	9.050	A/P242切る/建物3/柱残る
P182	27.0	22.0	4.0	9.270	E	P242	41.0	30.0	4.5	9.255	
P183	25.0	(24.0)	10.5	9.205		P243	43.0	41.0	16.5	9.095	A/P159を切る
P184	36.0	24.0	8.5	9.230	P183を切る	P244	37.0	32.0	27.5	9.025	柱残る/建物3
P185	34.0	32.0	17.5	9.130	A	P247	33.0	30.0	28.0	8.990	A/柱残る/建物3
P186	38.0	(29.0)	38.5	8.930		P248	22.0	21.0	16.0	9.120	A
P187	41.0	(21.0)	20.5	9.090		P249	(40.0)	38.0	29.0	8.970	A/建物3
P188	51.0	44.0	39.0	8.920	P189を切る	P250	37.0	36.0	5.5	9.140	B
P189	20.0	19.0	7.5	9.225	P190を切る	P251	20.0	(11.0)	5.5	9.205	A
P190	25.0	20.0	8.5	9.225		P252	60.0	45.0	57.0	9.240	建物3/柱残る
P191	34.0	(21.0)	7.5	9.225		P410	26.0	20.0	6.5	9.255	P228を切る
P192	48.0	24.0	31.5	8.775		P411	25.0	23.0	20.8	8.882	
P193	32.0	30.0	6.5	9.230		P412	52.0	45.0	17.5	8.945	
P194	12.0	12.0	11.0	9.180		P413	51.0	(32.0)	35.0	8.800	
P195	53.0	45.0	16.5	9.155	A/P190・223を切る/建物3	D21	(82.0)	(48.0)	3.0	9.230	B/方形土坑
P196	36.0	34.0	2.5	9.315	A	D22	(56.0)	(48.0)	20.5	8.985	A/方形土坑

土層注記

- A類 黒褐色強粘質土：1～3cmの泥岩粒、炭化物の多く入る黒い土
- B類 暗褐色粘質土：1～2cmの細かい泥岩がやや入る。  
赤色粒子が見られる赤っぽい土（A類に切られる。）
- C類 黒褐色粘質土：泥岩が少なく、炭化物が多く入る黒々した土  
（B類に切られる）
- D類 黒褐色粘質土：10cm大の泥岩、炭化物が入る。（A類を切る）
- E類 黒褐色粘質土：1cm大の泥岩を極少量含み、炭化物を含む黒い土。

（単位：海拔m / 以外 cm）  
（P：柱穴 D：土坑）



## 6. 第Ⅳ面の遺構と出土遺物

第Ⅳ面は暗褐色粘質土による中世基盤層であり、海拔は 9.200m を測る。池と溝の検出があり、その間を暗渠によりつなぐ。また、溝の先には落ち込みがある。暗渠近くの池の縁で羽子板、縄などの出土がある。全体ではほかに縄文土器、土師器、須恵器、手捏ねかわらけ、ロクロ成形かわらけ、白かわらけ、青磁、渥美、常滑、瀬戸、銭、土製品、木製品の出土がある。

### 池 1 (図 35・36)

池は調査区中央やや東寄りで弧を描き南西に広がるように検出した。調査区北西隅では微高地がある。池の落ち込みは急な勾配である。深さは 1 m を掘ったが、掘りきれしていない。土層の観察により第一次堆積、第二次堆積と池の底が二時期あったことは掴めた。池は最長で幅 5.8 m を確認している。東岸では木組の暗渠を検出しており池の水位は暗渠により調節していたことが推測できる。出土遺物は 1 から 3 は土師器の甕である。1 は古墳時代後期の駿東型の甕である。口唇部に折り返しが付き頸部は九の字に曲がる。2、3 は奈良・平安時代の相模型の甕である。4、5 は小型の手捏ねかわらけである。4 は一段の指頭痕が巡る。強くヨコナデが入り、稜線がくっきり入る。比較的丁寧な作りである。5 は 4 に比べると粗雑な作りである。6 は大型の手捏ねかわらけである。二段の指頭痕が顕著にみられ、内底部中央はやや盛り上がる。指頭痕とヨコナデの間は強く稜が入る。作りはとても丁寧で、形がよく、胎土も含有物の少ない良土である。7 は東幡の甕胴部片である。胴部の外面は斜格子の叩き目がくまなく残る。内面は指頭痕が顕著である。8 は東幡の捏ね鉢底部片。内外面とも糸切りする。円盤状に底部を糸切りして輪積み成形するのだろう。9 は常滑甕の転用摩耗陶片である。一辺の一部が摩耗している。10 は同安窯系青磁櫛搔き文皿である。体部下方に稜を持ち外反しながら立ち上がる。底部は回転ヘラ削りで露胎する。内底面は細かい櫛点描文を有する。釉は緑色の透明釉でやや薄く施釉する。胎土は精良堅緻である。I 類 2 b に比定出来よう。11 は土製品の土錘である。12 は漆器の椀の底部。内外漆が塗られる。無文である。13 は草履芯片、わらの圧痕が残る。14、15 は櫛である。漆が塗ってある。14 は櫛目が疎である。15 は密であり、意匠が施してある。16 は羽子板である。暗渠の近くで出土した。柄の部分は短いが、長さ 38.1cm、厚さは 1.0cm を測る。形代というよりは実用向きである。後述するが、現段階で日本最古の羽子板である。17 は縄、羽子板の近くで出土した。両端はちぎれているが長さ 19.5cm、幅は 3.8cm である。素材は藁とみられる。縄は右向きに縋われている。縄はより合わせる時にほぐれない様に捩って搓るがその様相は見取れた。

### 暗渠 (図 37・38)

暗渠は調査区の東側で検出した。池 1 と溝 1 を繋いでいる。海拔は 9.30 m である。傾きは見られずほぼ水平のようだ。暗渠は池の水位を調節するため池から溝 1 に水を流し、溝 1 は落ち込みに水を流したと見られる。暗渠の中央は第Ⅲ面の柱穴に壊されていた。規模は長さ 151.0cm、幅は 15cm、高さは 18cm を測る。底板の両端に角材を打ちつけ水路を作り、蓋は鉄釘で固定して地中に埋めた。掘り方であるが完掘には至らなかった。

### 落ち込み 4 (図 37)

落ち込み 4 は調査区東端で検出した。現地地表下 2 m を掘っても底は検出されなかった。確認出来た最

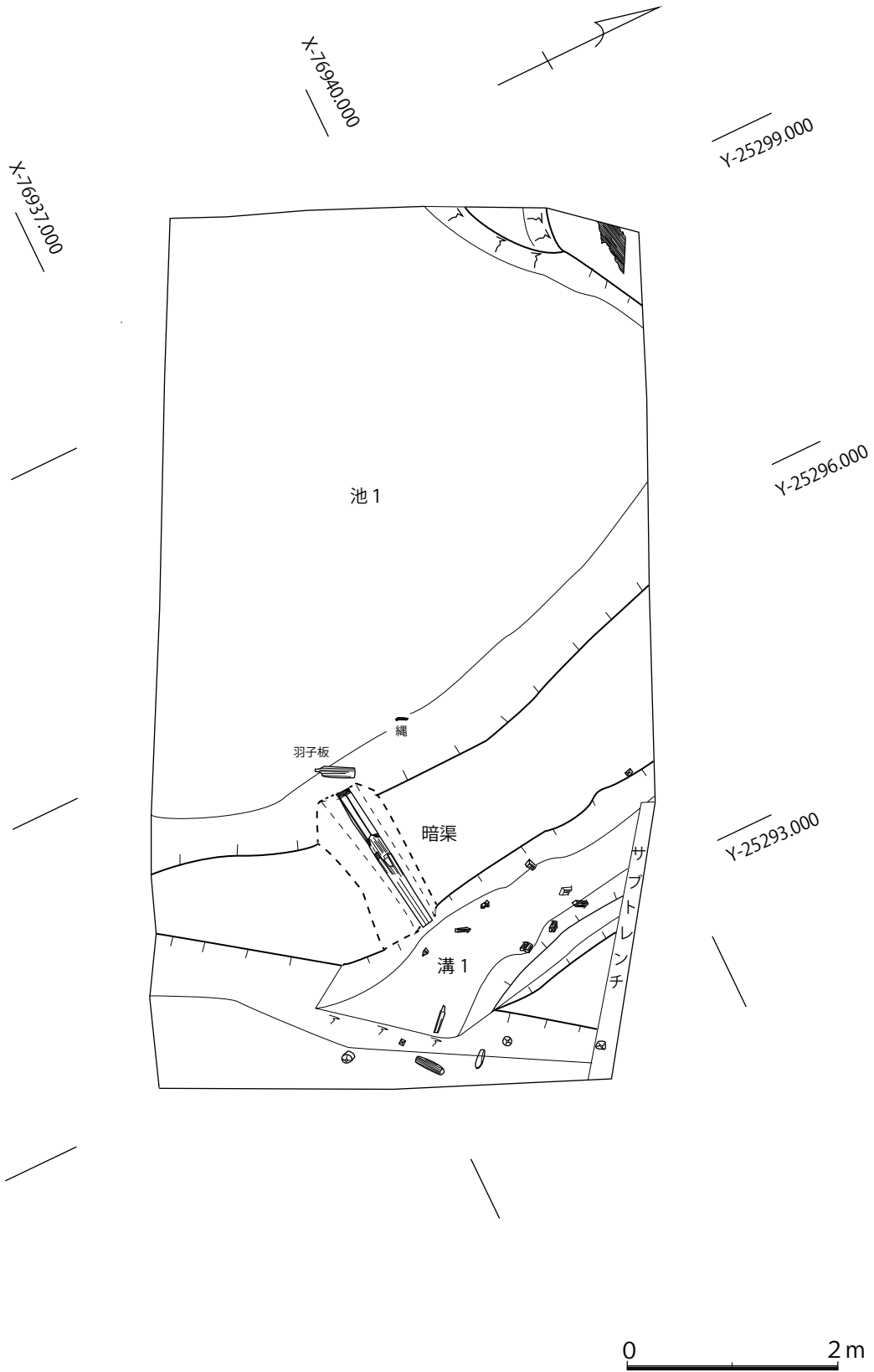
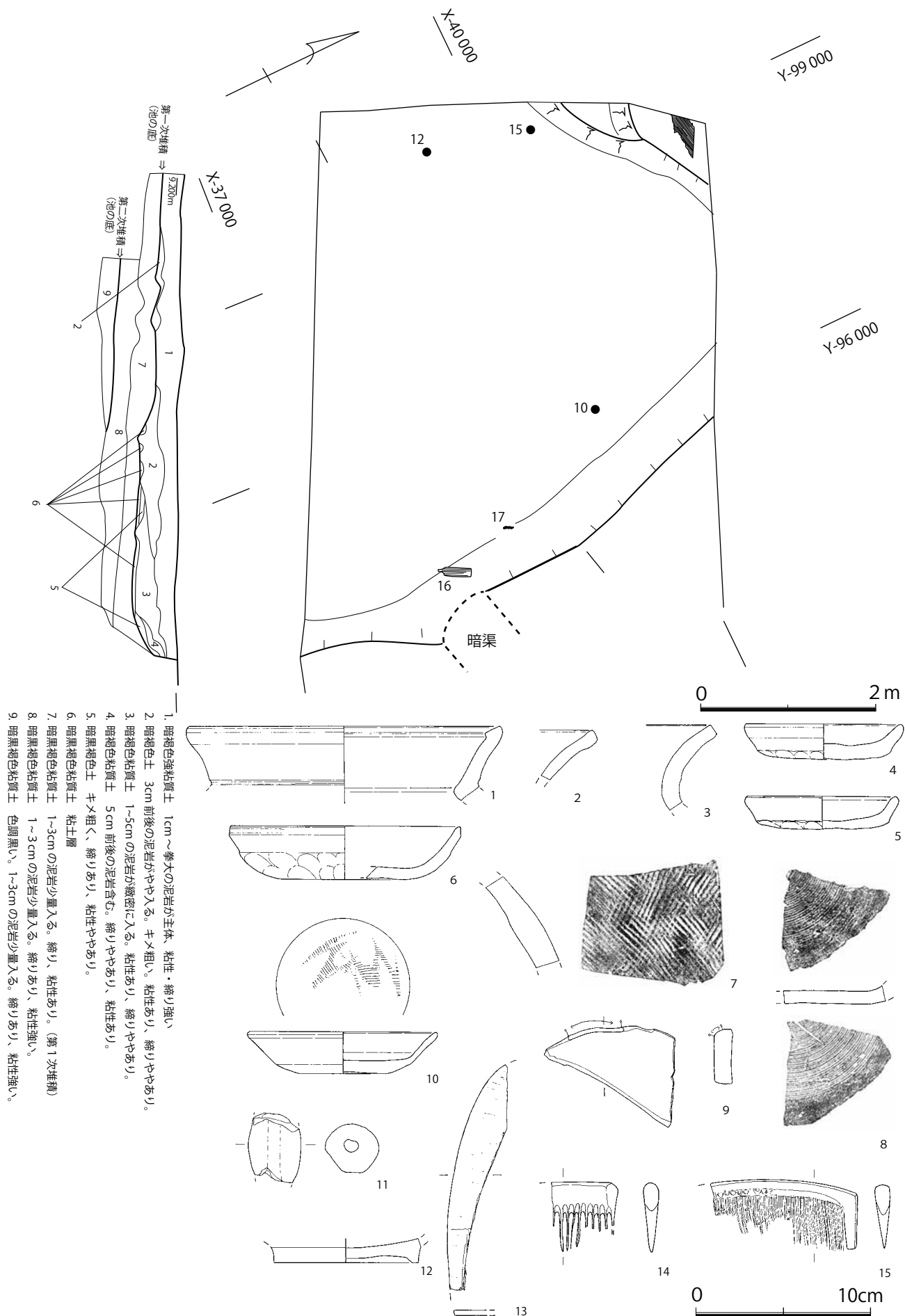
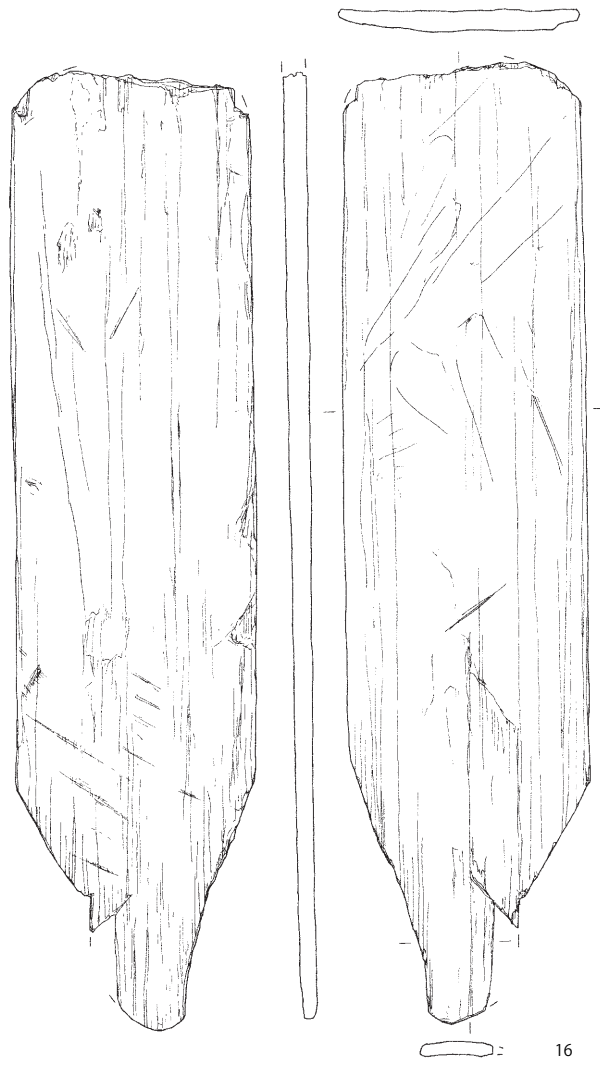


図 34 第IV面全体図



1. 暗褐色強粘質土 1cm～拳大の泥岩が主体 粘性・締り強い
2. 暗褐色土 3cm 前後の泥岩がやや入る。キメ粗い。粘性あり、締りややあり。
3. 暗褐色粘質土 1～5cm の泥岩が緻密に入る。粘性あり、締りややあり。
4. 暗褐色粘質土 5cm 前後の泥岩含む。締りややあり、粘性あり。
5. 暗褐色土 キメ粗く、締りあり、粘性ややあり。
6. 暗褐色粘質土 粘土層
7. 暗褐色粘質土 1～3cm の泥岩少量入る。締り、粘性あり。(第1土堆積)
8. 暗褐色粘質土 1～3cm の泥岩少量入る。締りあり、粘性強い。
9. 暗褐色粘質土 色調黒い。1～3cm の泥岩少量入る。締りあり、粘性強い。

図35 第IV面池1 (1)



0 10cm



0 10cm

图 36 第IV面池 1 (2)

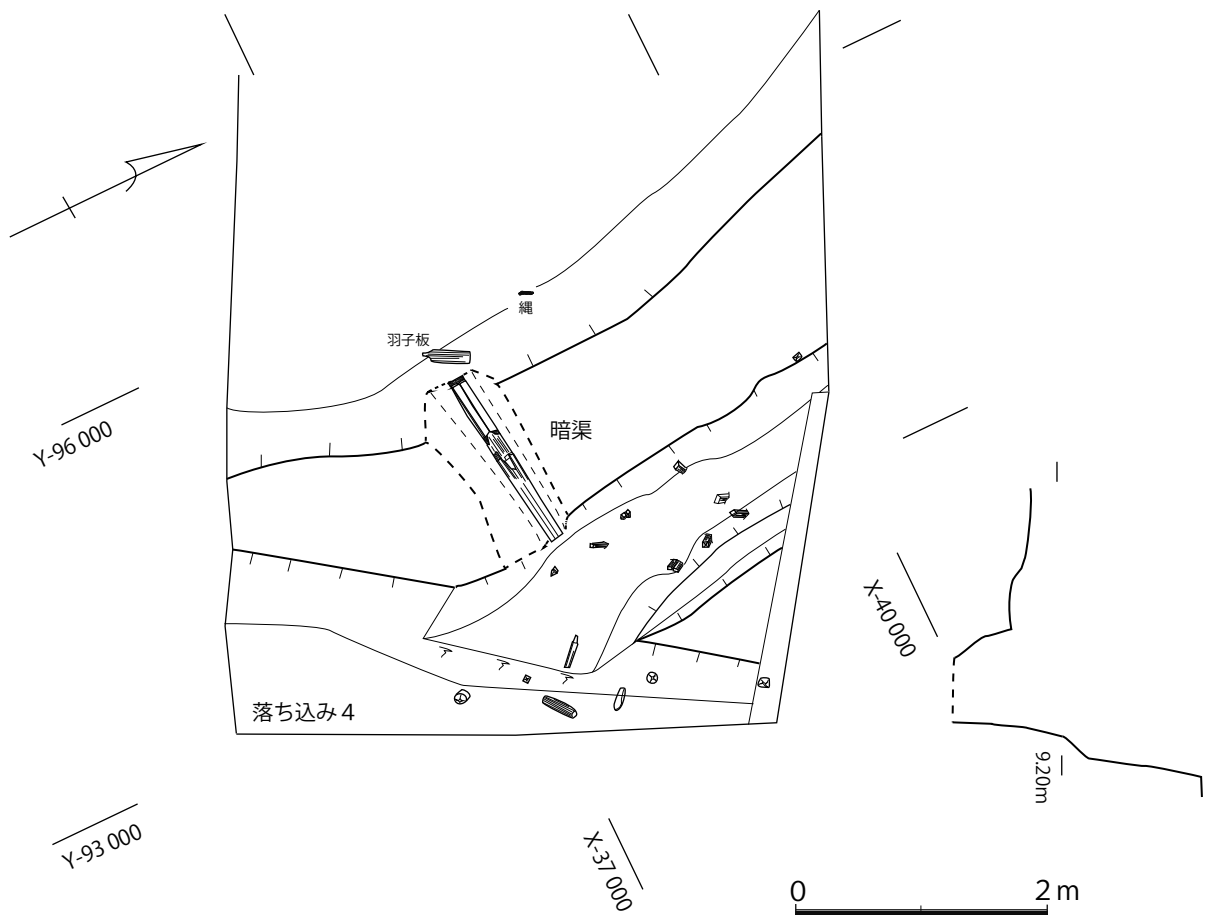


図 37 第Ⅳ面暗渠・落ち込み 4

大幅は 1.50 m である。溝 1 は落ち込みに注ぎこむ様相を示しており、これにより、第Ⅰ面より続いた落ち込みは溝、もしくは現在調査地の東に流れる豆腐川の可能性がある。また溝 1 との接点付近では杭が何本か見られ施設があったことをうかがわせる。

#### 溝 1 (図 39)

調査区北東隅で検出した。東側に段差を持ちながら 118.0cm の幅を持ち、確認された長さは 305.0cm である。深さは 50cm から 60cm であり緩やかに落ち込み 4 に流れ込む。底には流路に沿って杭が検出されている。後に第Ⅲ面では先述したように木樋を伴う溝となる。出土遺物は 1 が古墳時代の坏である。全体に摩滅をしているがヘラ削りされている。2 は土師器の相模型のか甕の口縁部片、砂を多く含む胎土である。3・4 は小型の手捏ねかわらけである。3 は底部が平坦で指頭痕も分かりにくい。4 は胎土は良土で作りも丁寧である。5 は「開元通寶」の隸書である。

#### 第Ⅳ面出土遺物 (図 40)

1 は上層で出土したロクロ成形の大型かわらけである。体部はやや内湾して立ち上がり、二本の稜線が巡る。底部は板状圧痕が残る。2 は須恵器の壺の口縁片である。胎土は含有物の少ない精良な土である。3、4 は手捏ねかわらけの大型である。3 は指頭痕とヨコナデの間の稜線が弱い。4 は胎土が粉質の良土であり、作りが丁寧で稜線がはっきりしている。5、6 はロクロ成形小型かわらけである。5 は全体に摩滅している。6 は油煙煤を付着させた灯明皿である。内底面のナデがきつく、作りがやや粗雑。7 はロクロ成形大型かわらけである。内底面のナデが強く残る。二次焼成を受け灰色に変色している。



図 38 第IV面暗渠

8はロクロ成形かわらけの底部に直径9mmの窪みがある。9は渥美の甕の格子の押印部分である。10は常滑甕の肩のあたり、押印部分である。文様は格子である。11は常滑の甕の転用摩耗陶片である。二辺を使用している。12は常滑片口鉢I類である。口唇部に沈線が巡る。第1段階3型式あたりか。13は山茶碗窯系の無頸壺である。肩部に指頭による文様を施す。口縁の端がやや歪みを見せるのは片口の部分か。14は竜泉窯鎬蓮弁文碗、胎土は精良堅緻である。釉薬は緑灰色で透明。薄く施釉され貫入が入る。II-b類であろう。

### 7. 表採遺物 (図 41)

1は古墳時代後期の甕、口縁部片。頸部の内側をへら調整している。2は手捏ねかわらけの小型である。底部は平坦で口縁のヨコナデと指頭の境は緩く稜が入る。3から5は手捏ねかわらけの大型である。3は二段の指頭痕が見られる。内面に白色の付着物がある。4は内底面に爪の痕が残る。5は粉質の良土である。内底面が盛り上がる。6と7はロクロ成形かわらけの小型である。6は内底面がナデにより中央が盛り上がる。7は内底面のナデが強く入る。8は常滑片口鉢I類である。口縁は丸く膨らむ。第2段階5～6a型式。9、10は常滑片口鉢I類の底部片である。内面は両方とも摩滅している。底部は砂底で貼り付け高台の上は横位のへら削りである。11は常滑片口鉢のI類口縁部片、口唇部に沈線が巡る。第1段階3型式か。12、13は常滑の甕の口縁部片である。12は縁帯が下に延びない。第1段階4型式。

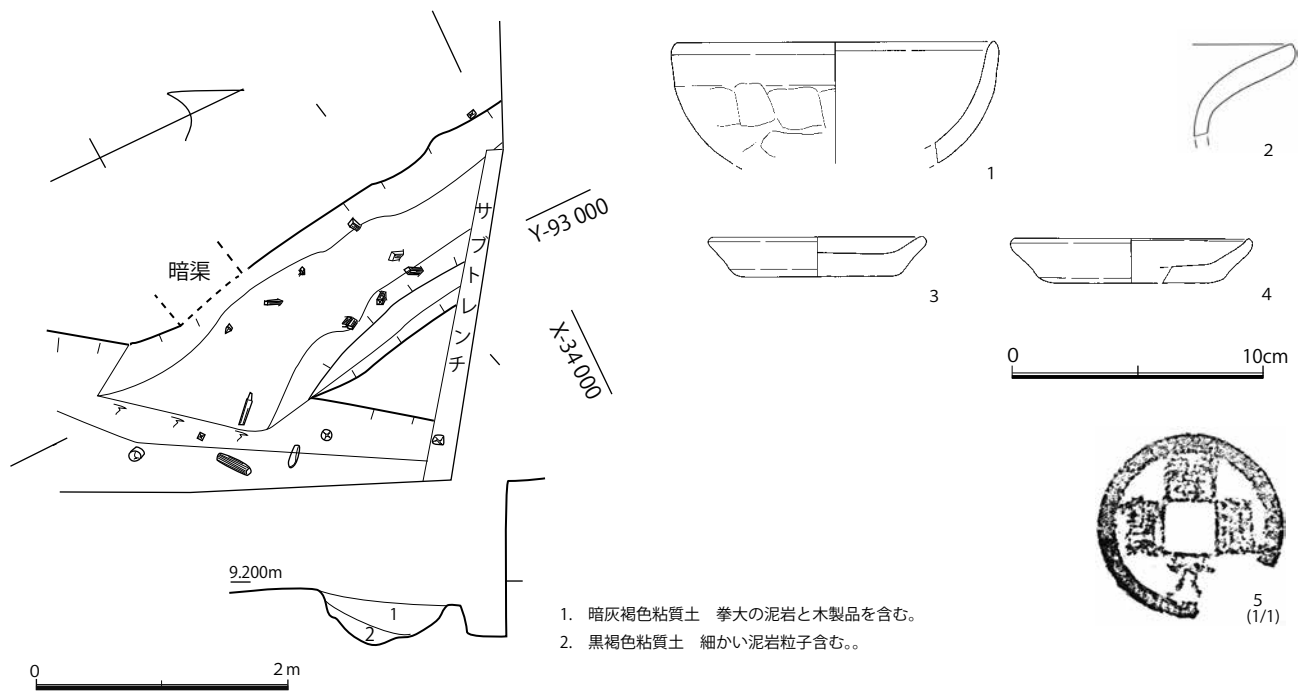


図 39 第IV面溝 1

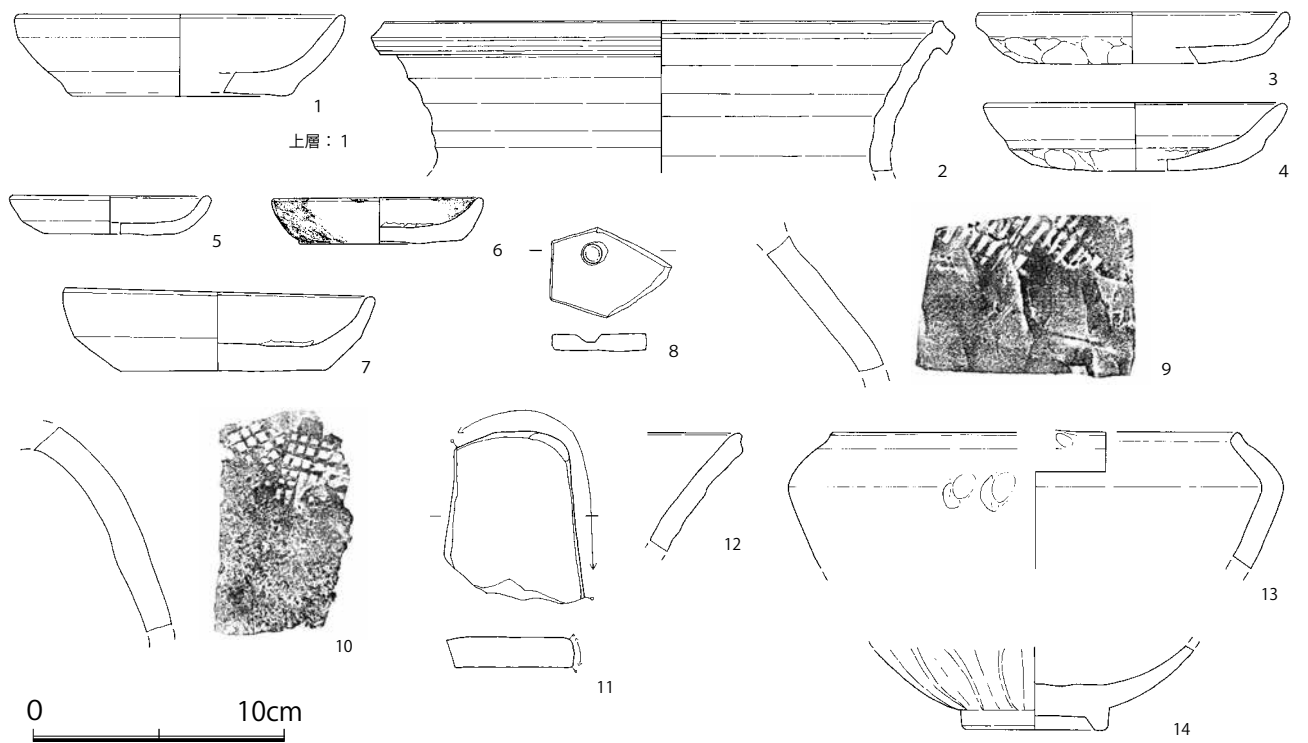


図 40 第IV面出土遺物

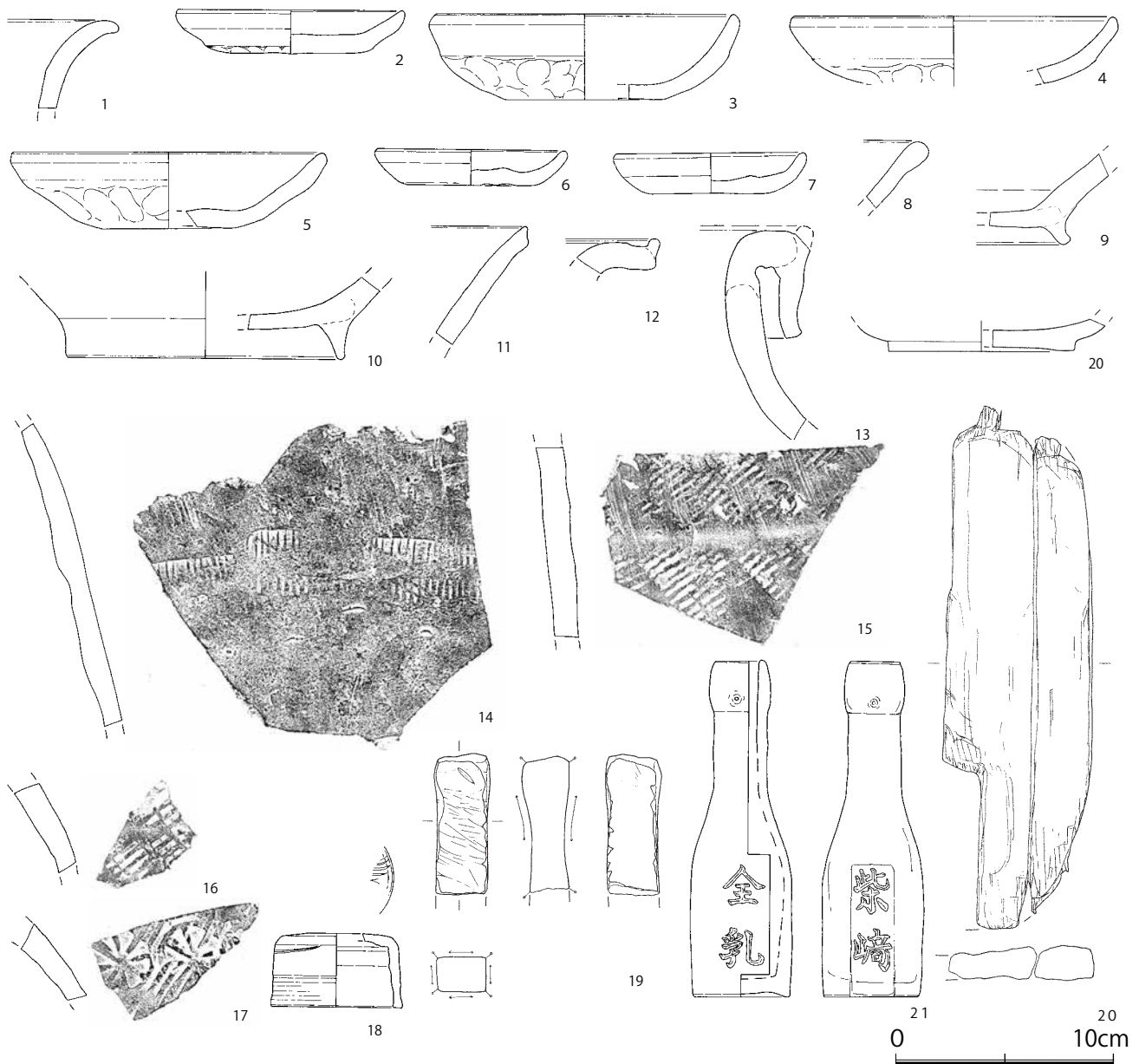


図 41 表採遺物

13は縁帯の上部が欠損している。第3段階8型式。14～17は常滑甕の胴部で14・15・16は格子文の押印が施される。17は車輪・菊花文の押印である。18は青白磁、梅瓶の蓋である。胎土は精良堅緻で、釉薬は淡青水色である。頂部の文様は不明、裾部には4条の沈線が巡る。19は中砥で上野産。砥面は4面全て使用している。20は木製鍋蓋である。21はガラス瓶である。牛乳の瓶とみられ、「全乳」「柴崎」の文字が読み取れる。鎌倉市由比ガ浜に所在する柴崎牛乳店のものであろう。なお、写真のみの掲載であるが、鉄宰の出土がある。



表5 遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図7-1	I面 掘甕	常滑 甕	口径51.4cm 底径21.4cm 器高92.1cm 輪積み成形 内面に指頭痕、ヨコナデ 外面肩・胴上部に押印有り 胎土は灰色で長石・礫、小石粒をやや多く含む 器表は褐色 口縁～外面肩に茶褐色の自然降灰
図9-1	I面 建物1土坑4	かわらけ 小型	口径(7.5)cm 底径(4.4)cm 器高1.85cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む やや粗土 焼成良好
2	I面 建物1土坑4	かわらけ 小型	口径8.1cm 底径6.3cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I面 建物1土坑4	砥石 中砥	残長[8.1] cm 幅5.4cm 厚5.1cm 砥面2面 伊予産
4	I面 建物1土坑4	銭	紹熙元寶 南宋 1190年 真書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm ※裏文字があるはずだが腐食していて解読できない、元もしくは五カ
5	I面 土坑5	鉄釘	残長[7.1] cm 幅0.7cm 厚0.4cm 重さ6.4g
6	I面 土坑11	かわらけ 大型	口径(11.0)cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I面 土坑11	瀬戸 端反皿	口縁部片 回転ヨコナデ 胎土は灰色で精良土 釉薬は灰緑色の灰釉
8	I面 柱穴41	東海系 かわらけ	底径(4.8)cm 胎土は灰白色で白色粒・小石粒・雲母を含む、やや粗土
図10-1	I面 建物2柱穴47	銭	聖宋元寶 北宋 1101年 篆書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
図12-1	I面 落ち込み1護岸	かわらけ 小型	口径(7.0)cm 底径(3.5)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒・赤色粒・小石粒を含む粗土 焼成良好
2	I面 落ち込み1護岸	かわらけ 大型	口径(12.5)cm 底径7.8cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面強いナデ 胎土は橙色で海綿骨針・赤色粒・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I面 落ち込み1護岸	瓦質 燭台	残長[8.7] cm φ4.9cm 胎土は灰白色で小石粒を含む 器表は黒色処理されている ミガキ
4	I面 落ち込み1護岸	備前 播鉢	胴部片 ヨコナデ 胎土は暗灰色で長石・礫・赤色粒を含む 器表は暗褐色 内面に7条以上の播り目あり
5	I面 落ち込み1護岸	備前 播鉢	底部片 ヨコナデ 胎土は赤橙色で長石・赤色粒、礫をやや多く含む 器表は赤橙色 内面に播り目あり
6	I面 落ち込み1護岸	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石、白色粒を多く含む 器表は灰色 5以前か
7	I面 落ち込み1護岸	瀬戸 大平鉢	底径(16.5)cm 回転ヘラ削り 内面～外面上部まで灰緑色の灰釉を刷毛塗り 胎土は灰黄色で長石・小石粒・白色粒を含む、やや粗土 器表は橙色～淡黄白色
8	I面 落ち込み1	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.1)cm 器高2.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は黄橙色で海綿骨針・白色粒・赤色粒・砂粒・小石粒を含む、含有物の多い粗土 焼成良好 内底面ナデ
9	I面 落ち込み1	かわらけ 中型	口径(11.6)cm 底径(8.3)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は黄橙色で海綿骨針・砂粒・泥岩粒を含む、含有物の多いやや粗土 焼成良好 外体部油煙煤付着 内面磨滅
10	I面 落ち込み1	鍔付火鉢	胴部片 鍔部に菊花押印あり 外体部菱形文が押印 胎土は橙色で砂粒・白色粒を含む瓦器質 器表は黒色処理されている IVc類
11	I面 落ち込み1	常滑 片口鉢Ⅱ類	口径(36.4)cm 胎土は小石粒、砂粒を多く含む 器表は赤褐色 焼成良好
12	I面 落ち込み1	常滑 甕	口縁部片 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は赤褐色 焼成良好 第3段階9型式
13	I面 落ち込み1	常滑鉢 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長4.6cm 幅4.0cm 厚1.0cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は赤褐色 焼成良好
14	I面 落ち込み1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長5.6cm 幅4.8cm 厚1.5cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は茶褐色 焼成良好
15	I面 落ち込み1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長11.3cm 幅9.0cm 厚1.4cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
16	I面 落ち込み1	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.2)cm 胎土は黄灰色で砂粒を極少量含む精良軟質土 釉薬は緑釉で透明 焼成良好
17	I面 落ち込み1	瀬戸 天目碗	底径(4.2)cm 削り出し高台、ヘラケズリ 古瀬戸後期様式Ⅰ期 胎土は明黄灰色で砂粒・小石粒を含む軟質土 釉薬は掛け分けしている
18	I面 落ち込み1	瀬戸 鬼板の播り鉢	底径(11.4)cm ヨコナデ 一部ナデアゲ 胎土は明黄色で砂粒を含む軟質土 釉薬は黒褐色 焼成良好 内面に1条8本の播り目、施釉
19	I面 落ち込み1	瀬戸灰釉碗 底部の円盤	底部片 直径5.6cm 厚0.6cm 外底部回転糸切り 胎土は暗黄灰色で砂粒を少量含む軟質土 釉薬は暗灰色
図13-1	I面 土坑2	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.5)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I面 土坑2	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面に押印あり 胎土は淡灰橙色で長石・白色粒子、礫をやや多く含む 器表は暗茶褐色
3	I面 土坑2	瀬戸 片口鉢	口縁部片 輪積み成形のちロクロ整形 ヨコナデ 胎土は灰色で長石、礫をやや多く含む 器表は灰色、口縁頂部～内面上部に薄く灰色の自然降灰
4	I面 土坑2	銭	熙寧元寶 北宋 1068年 篆書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
5	I面 土坑2	砥石 仕上砥	残長[8.5] cm 幅3.0cm 厚0.8cm 側面に切出し痕 砥面3面 鳴滝産
6	I面 土坑15	鉄釘	残長[3.8] cm 重さ2.4g
7	I面 土坑15	銭	聖宋元寶 北宋 1101年 行書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.6cm
8	I面 土坑16	かわらけ 大型	口径(11.8)cm 底径(8.6)cm 器高2.95cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
9	I面 土坑16	鉄釘	残長[4.6] cm 重さ1.6g

表6 遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 13-10	I面 土坑 16	銭	政和通寶 北宋 1111年 隸書 外径 2.4cm 内径 2.0cm 孔径 0.7cm
11	I面 土坑 16	銭	咸平元寶 北宋 998年 真書 外径 2.4cm 内径 1.9cm 孔径 0.6cm
12	I面 柱穴 10	須恵器 甕	口縁部片 ヨコナデ 胎土は灰黄色で長石、小石粒を多く含む緻密土 器表は灰色
13	I面 柱穴 10	滑石 温石	残長 [5.6] cm 残幅 [3.4] cm 残厚 [0.7] cm
14	I面 柱穴 25	かわらけ 大型	口径 (12.0)cm 底径 (7.0)cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡黄橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒、黒色粒やや多く含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
15	I面 柱穴 25	かわらけ 大型	底径 (7.2)cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡黄橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・小石粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 口縁部を打ちかいている
16	I面 柱穴 27	瀬戸 緑釉小皿	口径 (10.7)cm 口縁頂部～内面に施釉 外面は露胎、油煙煤付着 胎土は灰色で白色粒を含む、やや良土 釉薬は淡く薄い灰緑色で透明の灰釉
17	I面 柱穴 27	石加工品	最大長 3.2cm 幅 2.6cm 厚 0.7cm
18	I面 柱穴 28	鉄釘	長 10.3cm 幅 0.6cm 厚 0.4cm 重さ 8.6g
19	I面 柱穴 33	鉄釘	残長 [2.9] cm 幅 0.4cm 厚 0.2cm 重さ 0.8g
20	I面 柱穴 37	チャート	最大長 3.6cm 幅 2.5cm 厚 2.3cm
21	I面 柱穴 39	常滑 片口鉢 I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫、長石を多く含む 器表は灰色 5～6a期
22	I面 柱穴 46	常滑 片口鉢 I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・白色粒・5mm 大の小石粒を含む 器表は灰色 5～6a期
写真のみ	I面 土坑 16	石	長 4.2cm 幅 5.8cm 厚 3.0cm 溶接痕
図 14-1	I面直上	かわらけ 小型	口径 7.3cm 底径 4.7cm 器高 1.7cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	I面直上	かわらけ 大型	口径 12.5cm 底径 9.4cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・1～3mm 大の泥岩粒を含む粗土 焼成良好 内底面ナデ
3	I面直上	常滑 片口鉢 II類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色で長石・白色粒を含む 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 器表は褐色、口縁頂部～内面に薄く暗緑灰色の自然降灰 8期
4	I面直上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に押印あり 胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む 器表は褐色
5	I面直上	白磁 壺類	胴部片 素地は白色で精良堅緻 釉薬は淡く薄い灰緑色で半透明、細かい気泡が少量ある、内外面に薄く施釉
6	I面直上	銅製品 野舎	長 2.6cm 残幅 [4.4] cm 厚 0.6cm
7	I面直上	銭	元豐通寶 北宋 1078年 行書 外径 2.4cm 内径 1.8cm 孔径 0.6cm
8	I面直上	銭	景德元寶 北宋 1004年 真書 外径 2.4cm 内径 1.9cm 孔径 0.6cm
9	I面直上	加工石	砂岩 長 5.8cm 幅 5.8cm
図 15-1	I面出土	須恵器 転用磨耗陶片	最大長 2.5cm 最大幅 2.5cm 最大厚 1.0cm 表面が一部磨滅している 胎土は灰色で長石・石英・小石粒・白色粒を含む、やや粗土
2	I面出土	かわらけ 小型	口径 6.9cm 底径 4.8cm 器高 1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 焼成良好 胎土は淡橙色で雲母やや多い、海綿骨針・小石粒・赤色粒・泥岩粒を含むやや粗土
3	I面出土	かわらけ 小型	口径 7.0cm 底径 5.6cm 器高 1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
4	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.7)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.3cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
5	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.2)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.45cm 回転ロクロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・6mm 大の石粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
6	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.4)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.45cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I面出土	かわらけ 小型	口径 (7.2)cm 底径 (5.8)cm 器高 1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、粗土 焼成良好
8	I面出土	かわらけ 大型	口径 (11.3)cm 底径 (6.6)cm 器高 2.7cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・泥岩粒、砂粒をやや多く含む、やや粗土 焼成良好
9	I面出土	かわらけ 大型	口径 (11.7)cm 底径 (6.6)cm 器高 3.2cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
10	I面出土	瀬戸内系 かわらけ	底部 (4.8)cm ヨコナデ 貼り付け高台 胎土は淡橙白色で雲母・小石粒・白色粒・赤色粒を含む、やや粗土
11	I面出土	常滑 片口鉢 II類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で長石を含む 器表は褐色 2段階 5型式
12	I面出土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消し 外面には押印・工具によるナデ痕あり 胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む 器表は淡橙色
13	I面出土	青磁 端反り碗	口縁部片 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡水色で不透明、気泡あり、施釉やや厚い
14	I面出土	白磁 四耳壺	口径 (11.6)cm 頸部～肩片 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡い灰水色で半透明、気泡あり、施釉薄い
15	I面出土	鉄釘	残長 [5.7] cm 重さ 4.2g

表7 遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15-16	I面出土	鉄釘	残長 [7.3] cm 重さ 4.6g
図17-1	I b面 土坑17	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(6.8)cm 器高3.55cm 回転口クロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む粉質土、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I b面 土坑17	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転口クロ整形 胎土は灰色で長石・礫・白色粒を含む 器表は灰色 5~6a期
3	I b面 土坑17	緑褐釉 壺	口径(14.2)cm 胎土は灰色で小石粒・白色粒を含む緻密土 釉薬は淡灰緑色で不透明、内外面に薄く施釉
4	I b面 土坑17	砥石 仕上砥	残長 [7.8] cm 幅2.4cm 厚1.0cm 砥面2面 側面にも使用痕あり 鳴滝産
5	I b面 土坑18	常滑 甕	胴部片 胎土は暗灰色で白色粒・小石粒を含む 器表は暗灰色で押印有
6	I b面 土坑18	土錘	残長 [2.0] cm 最大φ3.0 孔φ1.0cm
図18-1	I b面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.6)cm 底径(5.0)cm 器高1.8cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む粉質の良土 焼成良好
2	I b面出土	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.8)cm 器高1.5cm 回転口クロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は淡赤橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
3	I b面出土	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.6)cm 器高1.7cm 回転口クロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・泥岩粒・赤色粒を少量含む、やや粗土 焼成良好
4	I b面出土	かわらけ 小型	口径(7.2)cm 底径(5.4)cm 器高1.5cm 回転口クロ 外底部回転系切り 内底面ナデ 胎土は薄い橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
5	I b面出土	白かわらけ 大型	口径(11.3)cm 回転口クロ 胎土は橙白色で長石・礫をやや多く含む粗土 焼成良好 瀬戸内系
6	I b面出土	かわらけ 大型	口径(11.6)cm ヨコナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
7	I b面出土	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転口クロ整形胎土は灰色で長石・礫・黒色粒を含む 内面~外面口縁下まで灰色の自然降灰が薄くかかる 器表は灰色 5~6a
8	I b面出土	常滑 甕	胴部片 内面は指頭痕をナデ消している 外面に格子目の押印有 胎土は淡灰黄色で長石・礫を含む 器表は暗褐色
9	I b面出土	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長7.2cm 幅4.4cm 厚0.9cm 輪積み成形 胎土は灰色で長石、白色粒を多く含む緻密土 器表は灰色
10	I b面出土	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長8.6cm 幅4.6cm 厚1.7cm 輪積み成形 胎土は灰色で長石、小石粒を多く含む 器表は褐色、灰緑色の自然降灰がかかる
11	I b面出土	土製品 蒸籠の簧	φ(9.0)cm 厚1.6cm 孔φ0.5cm 胎土は橙色で雲母・白色粒・赤色粒・泥岩粒を含む 二次焼成か一部が薄く灰色になっている
12	I b面出土	土錘	残長4.4cm 最大φ3.1cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙色で雲母・白色粒を含む、やや良土
13	I b面出土	土錘	長4.8cm 最大φ2.6cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・黒色粒を含む、やや良土
14	I b面出土	鉄釘	残長 [3.6] cm 幅0.3cm 厚0.5cm 重さ1.3g
15	I b面出土	滑石 鍋	口径(24.0)cm 孔φ0.7cm ノミ痕の上から木口状工具でヨコナデしている
16	I b面出土	砥石 中砥	残長 [5.1] cm 幅4.1cm 残厚 [3.2] cm 側面に切り出し痕 砥面3面 伊予産
17	I b面出土	チャート	最大長2.1cm 最大幅2.2cm
写真のみ	I b面出土	岩石	凝灰質砂岩 長12.0cm 幅9.0cm 厚7.6cm
図19-1	I b面 炭化層上層	かわらけ 小型	口径(8.0)cm 底径(5.6)cm 器高1.6cm 回転口クロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む粗土 焼成良好 内底面ナデ
2	I b面 炭化層上層	かわらけ 大型	口径12.2cm 底径5.6cm 器高3.4cm 回転口クロ 外底部回転系切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒を含む良土 焼成良好 内底面ナデ
3	I b面 炭化層中	かわらけ 大型	口径(13.0)cm 灯明皿 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・黒色粒を含む 焼成良好 内外面油煙煤付着
4	I b面 炭化層中	鉄釘	残長 [5.4] cm 幅0.5cm 厚0.4cm 重さ3.2g
5	I b面 炭化層中	鉄釘	残長 [4.6] cm 幅0.45cm 厚0.6cm 重さ2.8 g
図20-1	II面出土	青白磁 梅瓶	胴部片 ヨコナデ 素地は白色で白色粒・黒色粒を含む精良土 釉薬は水青色で半透明、気泡あり 内外面に薄く施釉
2	II面出土	土錘	長4.6cm 最大φ3.0cm 孔φ0.8cm 胎土は淡橙白色で雲母・白色粒・黒色粒・赤色粒を含む、やや良土
図21-1 写真のみ	II面 建物3	礎石	長52.0cm 幅18.0cm 厚14.0cm 柱座に鑿状工具による加工痕あり
図22-1	II面 落ち込み2	穿孔かわらけ 小型	口径(9.6)cm 底径(7.0)cm 器高2.55cm 回転口クロ 外底部回転系切り 胎土は橙色で海綿骨針・赤色粒・泥岩粒、砂粒を多く含む粗土 焼成良好 中底面に穿孔あり
2	II面 落ち込み2	渥美 押印	胴部片 残長 [13.2] cm 残幅 [8.3] cm 厚1.5cm 砂・黒色粒子を含む 黒灰色 焼成良好 押印・格子2段
3	II面 落ち込み2	常滑甕 転用打ち欠き陶片	常滑甕胴部片を使用 長7.9cm 幅6.8cm 厚0.8cm 輪積み成形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
4	II面 落ち込み2	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.6)cm 内面~外面口縁部下まで施釉 胎土は黄灰色で砂粒を少量含む硬質土 釉薬は緑色で透明、貫入あり
5	II面 落ち込み2	褐釉 転用磨耗陶片	褐釉壺を使用 長2.9cm 幅2.5cm 厚0.5cm 側面がかなり磨減している 素地は赤褐色で砂粒を少量含む精良堅緻 釉薬は黄褐色 焼成良好
図24-1	III面 建物4柱穴137	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(4.8)cm 器高1.9cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 灯明皿 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・泥岩粒、赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	III面 建物4柱穴140	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 外面には押印あり 胎土は暗灰色で白色粒子・礫を含む 器表は暗灰色

表8 遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考	
図 28-1	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(7.2)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む良土 焼成やや甘い 二次焼成カス付着	
	2	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で礫・小石粒、長石を多く含む 器表は赤褐色で長石が吹き出している 縁部より下に暗緑灰色の自然降灰
	3	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕をナデ消している 胎土は灰色で礫・白色粒を含む 器表は茶褐色 口縁頂部～内面に暗緑灰色の自然降灰が薄くかかる 第2段階5型式
	4	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 ヨコナデ 外面に格子押印あり 胎土は暗灰色で礫・小石粒を含む 器表は暗灰色
	5	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 小型	口径7.4cm 底径4.8cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・砂粒を含む、やや粗土 焼成良好
	6	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(11.5)cm 底径(7.3)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は暗橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好 内底面ナデ
	7	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 四耳壺	胴部片 内面に指頭痕 外面ヨコナデ 胎土は灰色で砂粒を含む硬質の精良土 釉薬は緑灰色の不透明 焼成良好
	8	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 鉤皿	底径(7.5)cm ヨコナデ 外底部回転糸切り 胎土は黄灰色で砂粒を含む軟質の精良土 釉薬は黄色で透明 焼成良好
	9	Ⅲ面 落ち込み3	手捏ねかわらけ 大型	口径(13.5)cm 底径(6.4)cm 器高3.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む、やや良土 焼成やや甘い
	10	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.0)cm 底径(7.0)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含むやや粗土 焼成良好 内底面ナデ
	11	Ⅲ面 落ち込み3	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(7.4)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
	12	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕 外面には押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒を含む粘質のやや粗土 器表は茶褐色
	13	Ⅲ面 落ち込み3	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕 外面には押印あり 胎土は暗灰色で礫・長石、小石粒を多く含む粗土 器表は茶褐色
	14	Ⅲ面 落ち込み3	備前 播り鉢	胴部片 輪積み成形 ヨコナデ 胎土は淡赤褐色で礫・小石粒・赤色粒を含む 器表は暗灰色 内面に5条の播り目あり
	15	Ⅲ面 落ち込み3	瀬戸 緑釉小皿	口径(11.4)cm 底径(5.1)cm 器高2.9cm 回転ヘラ削り 削り出し高台 貫入あり 胎土は灰黄色で小石粒・白色粒を含む良土 釉薬は灰緑色で透明の灰釉を漬けかけ
	16	Ⅲ面 落ち込み3	鉄釘	長7.0cm φ0.3cm 重さ2.7g
図 29-1	Ⅲ面 柱穴136	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.5)cm 底径(5.6)cm 器高3.1cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒を含む良土 焼成良好	
	2	Ⅲ面 柱穴136	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.6)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒、黒色粒を多く含む良土 焼成やや甘い
	3	Ⅲ面 柱穴141	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒、赤色粒をやや多く含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ
	4	Ⅲ面 柱穴141	土錘	残長[3.8]cm 最大φ3.0cm 孔φ0.7cm 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針を含む良土 指頭
	5	Ⅲ面 柱穴153	土錘	残長[3.3]cm 最大φ1.6cm 孔φ0.5cm 胎土は淡褐色で雲母・白色粒・赤色粒を含む、やや良土
写真のみ	Ⅲ面 柱穴152	鉄滓	長6.2cm 幅5.1cm 厚1.4cm	
図 30-1	Ⅲ面上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面に車輪・菊花の押印あり 胎土は暗灰色で礫、白色粒を多く含む 器表は暗緑灰色の降灰釉がかかる	
	2	Ⅲ面上	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面には押印・工具ナデ痕あり 胎土は黄灰色で長石・赤色粒、白色粒を多く含む粘質の粗土 器表は褐色
	3	Ⅲ面上	瀬戸 折縁深皿	底径(16.8)cm 回転ヘラ削り 内面は淡灰緑色の灰釉を刷毛塗り 胎土は灰黄色で礫・白色粒を含む、やや良土
	4	Ⅲ面上	軒丸瓦 東海尾張系	外径12.6cm 周縁内径11.2cm 左回りの三つ巴文、断面が台形状、先端部がとがり気味、尾の末端は周縁と連なる 周縁の幅は狭い 瓦当は離れ砂が付く、背面は横位のナデで粗く調整されている 丸瓦部径と瓦当径がやや異なり横長にいびつ 胎土は砂粒を多く含む 色調は灰色 焼成良好 12末～13c頃、鎌倉初期も
	5	Ⅳ面上 木樋周辺	かわらけ 小型	口径8.8cm 底径6.0cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・白色粒、赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好 灯明皿
	6	Ⅳ面上 木樋周辺	銭	元豊通寶 北宋 1078年 行書 外径2.5cm 内径2.0cm 孔径0.7cm
図 31-1	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(10.5)cm 底径(5.0)cm 器高2.2cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針・砂粒を少量含む粉質の良土 焼成良好	
	2	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.9)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 外底部に板状圧痕 胎土は暗黄色で海綿骨針、砂粒をやや多く含む良土 焼成良好
	3	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 小型	口径(7.8)cm 底径(6.9)cm 器高1.3cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	4	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(13.6)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	5	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(14.2)cm 底径(7.8)cm 器高3.1cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含む良土 焼成良好
	6	Ⅲ面出土	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.9)cm 底径(5.3)cm 器高3.5cm 手づくね後内底面ナデ・口縁部ヨコナデ 胎土は淡褐色で海綿骨針・砂粒を含む粉質の良土 焼成良好 内底面が磨滅
	7	Ⅲ面出土	かわらけ 小型	口径(8.7)cm 底径(5.7)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は淡黄色で砂粒・海綿骨針・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 口縁一部が打ち欠け
	8	Ⅲ面出土	渥美甕 転用打ち欠け陶片	胴部片 胎土は砂粒を含む 器表は暗茶褐色 焼成良好
	9	Ⅲ面出土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で砂粒・小石粒を多く含む 器表は灰色 焼成良好 1段階3型式
	10	Ⅲ面出土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 内面～外面口縁部下までヨコナデ、胴部はナデアゲ 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好 内面やや磨滅 第2段階5型式

表9 遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 31-11	Ⅲ面出土	渥美甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒を含む 器表は暗灰色 焼成良好
12	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(斜格子) 胎土は小石粒を多く含む 器表は褐色 焼成良好
13	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(格子+斜格子) 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
14	Ⅲ面出土	常滑甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
15	Ⅲ面出土	銭	北宗銭 皇宋通寶 初 1038年 真書 外径2.4cm 内径2.0cm 孔径0.7cm
16	Ⅲ面出土	銭	北宗銭 嘉祐通寶 北宋 1056年 真書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm
図 33-1	Ⅲ面 井戸1	土師器 壺	口縁部片 ヨコナデ 口縁に三条の沈線 胎土は淡橙色で雲母・白色粒・赤色粒・小石粒をやや多く含む粗土
2	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.3)cm 底径(6.3)cm 器高1.2cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・泥岩粒を含む、やや良土 焼成良好
3	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 小型	口径(9.1)cm 底径(7.7)cm 器高1.6cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を含む、やや良土 焼成良好
4	Ⅲ面 井戸1	手捏ねかわらけ 大型	口径(11.7)cm 底径(5.6)cm 器高3.2cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む粉質土、やや良土 焼成良好
5	Ⅲ面 井戸1	かわらけ 大型	口径(13.0)cm 底径(8.5)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好 内底面ナデ 棒状圧痕
写真のみ1	Ⅲ面 井戸1	桃の種	
写真のみ2	Ⅲ面 井戸1 裏込め	岩石	最大残存長(18.0)cm 幅13.4cm 厚3.7cm 四角に加工してある
図 35-1	Ⅳ面 池1	土師器	口径(17.6)cm 二次焼成か全体にスス付着 胎土は淡赤橙色で雲母・赤色粒・白色粒・小石粒を多く含む粗土
2	Ⅳ面 池1	土師器	胎土は橙色で雲母・赤色粒・小石粒を多く含む粗土 二次焼成か全体にスス付着
3	Ⅳ面 池1	土師器	胎土は橙色で雲母・白色粒・小石粒を多く含む粗土 二次焼成か全体にスス付着
4	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 小型	口径(8.8)cm 底径(4.8)cm 器高2.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・白色粒・赤色粒・黒色粒を多く含む、やや良土 焼成甘い
5	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 小型	口径8.3cm 底径5.4cm 器高1.8cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡黄灰色で雲母・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや良土 焼成甘い 二次焼成か全体にスス付着
6	Ⅳ面 池1	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.9)cm 底径(7.2)cm 器高3.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・白色粒・黒色粒を含む良土 焼成良好
7	Ⅳ面 池1	東播 甕	胴部片 輪積み成形 内面は指頭痕をナデ消している 外面にタタキ目あり 胎土は灰色で礫、白色粒を含む粘質の良土 器表は暗灰色
8	Ⅳ面 池1	東播 捏ね鉢	底部片 外底部回転糸切り 輪積み成形 胎土は暗灰色で長石・石英・小石粒・白色粒を含む 器表は暗灰色
9	Ⅳ面 池1	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長5.2cm 幅7.4cm 厚1.0cm 輪積み成形 胎土は黄褐色で長石、白色粒・赤色粒を含む 器表は茶褐色
10	Ⅳ面 池1	同安窯系青磁 櫛書き文皿	口径(10.5)cm 底径5.0cm 器高2.35cm 底部のみ露胎 内底面に櫛描き模様あり 素地は灰色で精良堅緻 釉薬は淡灰緑色で透明、施釉薄い I類2b
11	Ⅳ面 池1	土錘	残長[3.8]cm 最大φ3.0cm 孔径0.7cm 二次焼成か全体にスス付着 胎土は淡黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を多く含む、やや良土
12	Ⅳ面 池1	木製品 漆皿	底径(8.2)cm
13	Ⅳ面 池1	木製品 草履芯	残長[12.8]cm 残幅[2.1]cm 厚0.3cm 藁の圧痕が残る
14	Ⅳ面 池1	木製品 櫛	1cm幅に歯が3枚あり
15	Ⅳ面 池1	木製品 櫛	1cm幅に歯が12枚あり 意匠が施してある
16	Ⅳ面 池1(2)	木製品 羽子板	長38.1cm 幅9.7cm 厚1.0cm
17	Ⅳ面 池1(2)	縄	残長[19.5]cm 幅3.8cm
図 38-1	Ⅳ面 暗渠	木製品	長152.7cm 幅13.5cm 厚10.7cm 鉄釘4箇所あり
図 39-1	Ⅳ面 溝1	土師器 坏	口径(12.6)cm ヨコナデ 外面に工具による削り痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・白色粒・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土
2	Ⅳ面 溝2	土師器 甕	口縁部片 ヨコナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒・黒色粒・砂粒を多く含む
3	Ⅳ面 溝2	かわらけ 小型	口径(8.2)cm 底径(5.6)cm 器高1.55cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒を含む粉質、やや良土 焼成良好
4	Ⅳ面 溝2	かわらけ 小型	口径(9.2)cm 底径(6.0)cm 器高1.75cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡黄灰色で海綿骨針を含む粉質、良土 焼成やや甘い
5	Ⅳ面 溝2	銭	開元通寶 隸書 外径2.4cm 内径1.9cm 孔径0.7cm
図 40-1	Ⅳ面上	かわらけ 大型	口径(12.6)cm 底径(8.5)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・黒色粒・赤色粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
2	Ⅳ面上	須恵器 壺	口径(22.0)cm 胎土は砂粒を少量含む 色調灰色 焼成良好
3	Ⅳ面上	手捏ねかわらけ 大型	口径(12.0)cm 底径(6.6)cm 器高2.0cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針、砂粒を少量含むやや良土 焼成やや良好

表 10 遺物観察表 (6)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 40-4	IV面上	手捏ねかわらけ 大型	口径(11.2)cm 底径(5.8)cm 器高(2.7)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒を含む粉質の良土 焼成良好
5	IV面上	かわらけ 小型	口径(7.6)cm 底径(5.1)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面磨滅 胎土は淡黄色で海綿骨針・赤色粒・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗土 焼成良好
6	IV面上	かわらけ 小型	口径8.0cm 底径6.4cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 内底面ナデ 胎土は橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好 灯明皿
7	IV面上	かわらけ 大型	口径12.0cm 底径8.2cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り・板状圧痕 胎土は橙色+灰色で海綿骨針・砂粒・泥岩粒を含む、やや粗雑 焼成良好 内底面強いナデ 二次焼成を受ける
8	IV面上	かわらけ 加工品	底部片 外底部回転糸切り 胎土は暗橙色で海綿骨針・砂粒を含む、やや良土 焼成良好
9	IV面上	渥美 甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒・白色粒を含む 器表は暗灰色 焼成良好
10	IV面上	常滑 甕	胴部片 外面に押印あり(格子) 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は褐色 焼成良好
11	IV面上	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 胎土は砂粒・小石粒を少量含む 器表は明褐色 焼成良好
12	IV面上	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は砂粒・小石粒を含む 器表は灰色 焼成良好 第1段階3型式
13	IV面上	無頸壺 (山茶碗)	口径16.0cm 底径8.2cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外面に自然釉がかかる、爪による模様を施し 胎土は砂粒・小石粒を含む 色調は灰色 焼成良好 口縁の一部が指頭され、もしかしたら片口の部分かもしれない
14	IV面上	青磁 鎗蓮弁文碗	底径5.6cm 高台内側が露胎 素地は灰色で精良堅緻 釉薬は緑灰色で透明、貫入あり 焼成良好 II-b
図 41-1	表採	土師器	口縁部片 ヨコナデ 頸部内側へ整形 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒、白色粒を多く含む
2	表採	手捏ねかわらけ 小型	口径10.2cm 底径6.2cm 器高1.95cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む良土 焼成やや甘い
3	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径(13.9)cm 底径(6.8)cm 器高3.9cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・砂粒を多く含む、やや良土 焼成良好
4	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径(14.4)cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 内底面に爪の痕が残る 胎土は淡灰橙色で雲母・海綿骨針・砂粒を多く含む良土 焼成やや甘い
5	表採	手捏ねかわらけ 大型	口径(14.0)cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 手づくね後内底面・口縁部ナデ 胎土は黄灰色で雲母・海綿骨針・黒色粒を含む良土 焼成やや甘い
6	表採	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.8)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒・黒色粒を含む良土 焼成良好
7	表採	かわらけ 小型	口径(8.4)cm 底径(5.4)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底面ナデ 胎土は橙色で雲母・海綿骨針・赤色粒を含む、やや粗土 焼成良好
8	表採	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫・黒色粒・小石粒を多く含む 器表は灰色 5~6a期
9	表採	常滑 片口鉢I類	底部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 内面は使用により磨滅している 胎土は灰色で2~3mm大の小石粒を含む、やや粗土 器表は灰色
10	表採	常滑 片口鉢I類	底部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で礫・長石・小石粒を多く含む粗土 器表は灰色 外底部に離れ砂付着
11	表採	常滑 片口鉢I類	口縁部片 輪積み成形のち回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・小石粒を多く含む 器表は灰色 第1段階4型式
12	表採	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 ヨコナデ 胎土は灰色で長石・小石粒を含む 器表は褐色 口縁~内面に緑灰色の自然降灰
13	表採	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 内面に指頭痕・ヨコナデ 外面に緑灰色の自然降灰 胎土は暗灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は褐色 第3段階8型式
14	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面に指頭痕・ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は灰色
15	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は灰色で礫・長石・白色粒、小石粒を多く含む粗土 器表は灰色
16	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に格子の押印あり 胎土は暗灰色で礫・白色粒、小石粒を含む 器表は暗灰色
17	表採	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 内面ヨコナデ 外面に車輪・菊花の押印あり 胎土は暗灰色で礫・白色粒、小石粒を含む 器表は暗灰色
18	表採	青白磁 梅瓶蓋	径(6.0)cm 器高3.3cm 素地は灰白色で精良土 釉薬は淡青水色で透明、貫入あり 施釉薄い 内面は露胎
19	表採	砥石 仕上砥	遺存長[6.4]cm 幅2.6cm 厚2.2cm 淡灰緑色 上部に切出し痕 砥面4面 上野産
20	表採	木製品 漆椀	底径(8.5)cm 内外に漆が塗られる
21	表採	木製品 鍋蓋	残長[23.4]cm 残幅[6.6]cm 厚1.5cm
22	攪乱	ガラス瓶	口径2.2cm 底径4.3cm 器高13.3cm 明治~大正
写真のみ	表採	鉄滓	長4.8cm 幅3.6cm 厚0.7cm

## 第四章 まとめと考察

### 1. 遺構の変遷 (図 42)

今回の調査では計 6 面の生活面を検出し、これを 6 時期に分けることが出来た。

第 1 期：第Ⅳ面が相当する。池、溝、暗渠、落ち込み等の検出があるがそれらは全て連動している。これらの遺構は黒褐色粘質土の中世基盤層を掘り窪めている。池は調査区西側全面に広がる。水位の調節をするため東岸に暗渠は設けられる。その存在からみて池は中央部というより縁辺あたりであろう。調節された水は北から流れる溝 1 に流れ込み、溝 1 から落ち込み 4 に注がれる。落ち込み 4 は現在調査区の東側を流れる「豆腐川」と思われる。「豆腐川」は前述したようにかつては幅が 3 間以上、深さも 5 間以上あって、飯島から船が入ってきたと言われている(『としよりのはなし』)。かつて「高御倉」・「浜御倉」・「浜の庫倉」などと呼ばれる倉庫群のあったととれる調査地点一帯の土地柄に深く関係しないだろうか。

出土遺物として、池 1 からは暗渠に吸い寄せられるように羽子板、縄が出土している。羽子板に関しては後述する。この時期、この土地は宗教的な要素が強い。第 1 期の年代は 12 世紀末から 13 世紀前半である。

第 2 期：第Ⅲ b 面が相当する。調査区の北西で井戸が検出されている。第Ⅲ面から第Ⅳ面の間のみがこの時期の土地利用として調査区一帯は、前代の池をつぶし、生活空間を造成した。しかし、調査区内に、井戸以外の遺構の検出は乏しい。いふなれば居住空間の「はずれ」であろう。第 2 期の年代は 13 世紀前半である。

第 3 期：第Ⅲ面が相当する。柱の遺存状態のよい掘立柱建物が一棟建つ。柱穴は他にも数多くあり建物の建て替えが窺える。柱穴は北側に多く検出した。建物 4 は調査区全体に広がるが、層位的にみてより古い建物は調査区の北側に展開するようである。調査区北東隅で検出された木樋は第 1 期の溝 1 を踏襲しており、この時期に木樋を伴う構造に改修されたのだろう。建物の東限はこの木樋までとみられる。規模からして、大規模な建物が想定でき、武家屋敷級のものと思われるのではないだろうか。第 3 期の年代は第 2 期と変わらず 13 世紀前半である。

第 4 期：第Ⅱ面が相当する。第 3 期の掘立柱建物とほぼ同位置に重なる礎石建物を 1 軒検出した。この建物は火災とみられる炭化層に覆われていた。年代は 13 世紀後半である。

第 5 期：第Ⅰ b 面が相当する。調査区北西隅で長方形の土坑が並び、他の柱穴・土坑も調査区中央から北に片寄る傾向が見られることから、これも居住区間のやや「はずれ」ではないだろうか。また調査区北西を中心に、焼土・炭化物が堆積していたことから第 5 期にも火災は発生したと見られる。年代は第 4 期と変わらず 13 世紀後半であろう。

第 6 期：第Ⅰ面が相当する。建物は 2 軒建ち、その内 1 棟は塔の可能性がある。比較的しっかりした土坑から構成される建物(建物 1)で、中央に大きな土坑(土坑 5)を持ち、四隅に土坑・柱穴(土坑 1・4・11・柱穴 57)が配置される。この構造は他の建築例(法起寺三重塔・當麻寺東塔など)からみて「塔」の基礎との見方もある。土坑はいずれも根固めの泥岩が密に入る様相を示した。豆腐川は護岸され、調査区の北側には常滑の甕が安置される。据甕の年代は 14 世紀前半であるから鎌倉後期から末期あたり、塔は 13 世紀後半があてられる。第 6 期の中でも年代幅があり、土地利用の変化が窺える。年代は 13 世紀後半から 15 世紀前半である。

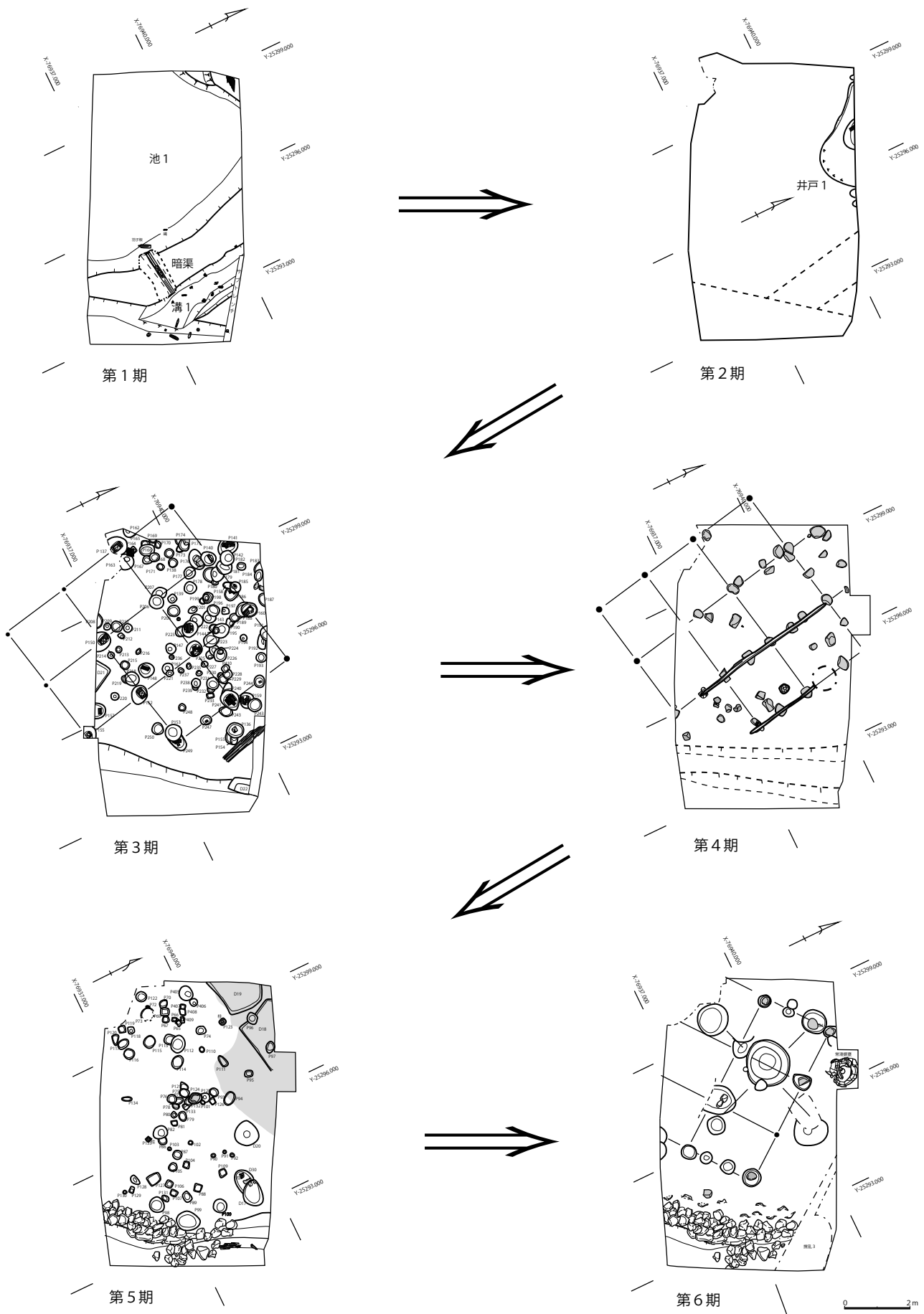


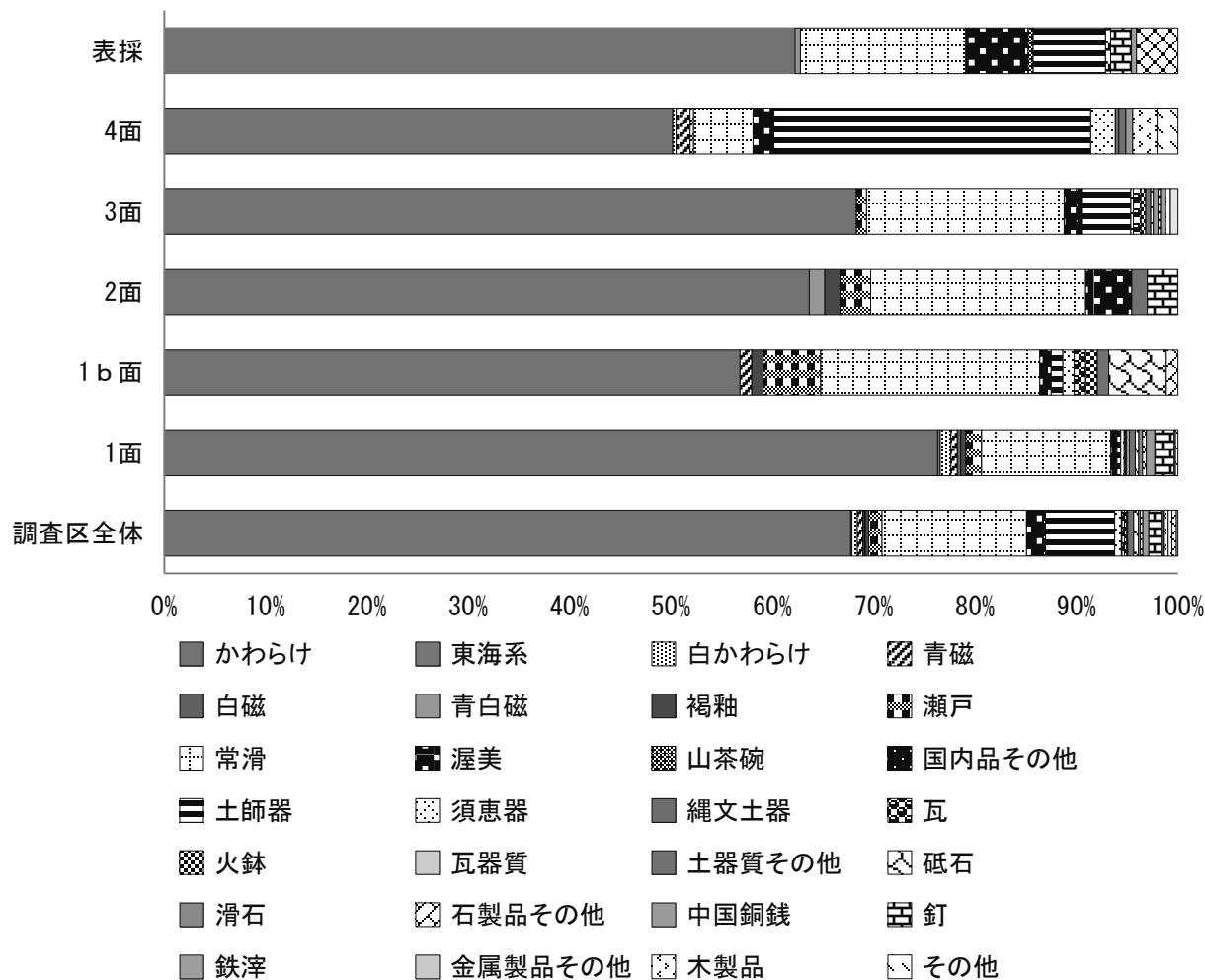
图 42 遺構変遷図



表 11 出土遺物計量表 (1)

			1面	1b面	2面	3面	4面	表採	総計							
土器	かわらけ	手捏ね	21	2.53%	3	3.41%	8	12.12%	113	27.56%	101	34.71%	39	19.90%	285	15.14%
		ロクロ	612	73.65%	47	53.41%	34	51.52%	167	40.73%	45	15.46%	83	42.35%	988	52.50%
	白かわらけ	穿孔	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		大	9	1.08%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	10	0.53%
	東海系	かわらけ	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%
	土師器		3	0.36%	1	1.14%	0	0.00%	20	4.88%	91	31.27%	14	7.14%	129	6.85%
	須恵器		2	0.24%	1	1.14%	0	0.00%	1	0.24%	7	2.41%	0	0.00%	11	0.58%
	須恵器		1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	縄文土器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%
	火鉢	Ⅲ類	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%
土風呂		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
瓦器質	燭台	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
	瓦器	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
土器質	伊勢系鍋	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	2	0.11%	
土製品	土器質	蒸籠	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		土錘	2	0.24%	1	1.14%	1	1.52%	2	0.49%	1	0.34%	0	0.00%	7	0.37%
国産陶器	常滑	甕	91	10.95%	18	20.45%	14	21.21%	75	18.29%	12	4.12%	27	13.78%	237	12.59%
		片口碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%
		片口鉢Ⅰ類	8	0.96%	1	1.14%	0	0.00%	4	0.98%	2	0.69%	5	2.55%	20	1.06%
		片口鉢Ⅱ類	4	0.48%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.27%
		すり常滑	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.69%	0	0.00%	5	0.27%
	瀬戸	折れ縁深皿	1	0.12%	2	2.27%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%
		縁小皿	3	0.36%	0	0.00%	1	1.52%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.27%
		卸皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		平碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		天目碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		灰釉碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		四耳壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		壺類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%
		大平鉢	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%
	近世	1	0.12%	3	3.41%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%	
	渥美	転用円盤	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		甕	4	0.48%	0	0.00%	3	4.55%	5	1.22%	5	1.72%	11	5.61%	28	1.49%
		壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%
		片口鉢	0	0.00%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	山茶碗(皿)	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%	
	備前	播鉢	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%
	肥前系	碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	東幡	壺	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%
	瓦	平	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.21%
		軒丸	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	舶載	青磁	無文碗	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1
蓮弁文碗			3	0.36%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.37%	0	0.00%	8	0.43%
端反り碗			1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
青白磁		梅瓶	0	0.00%	0	0.00%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	2	0.11%
		口兀皿	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%
白磁		托	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		緑褐釉壺	0	0.00%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
褐釉	壺	3	0.36%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%	
	すり褐釉	0	0.00%	0	0.00%	1	1.52%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
甕	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%		
鉄	鉄滓	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	0	0.00%	1	0.51%	3	0.16%	
金属製品	中国銅銭	7	0.84%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	2	0.69%	0	0.00%	11	0.58%	
	鉄釘	16	1.93%	0	0.00%	2	3.03%	1	0.24%	0	0.00%	4	2.04%	23	1.22%	
	銅製品	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%	
石製品	滑石	温石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		鍋	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%
		加工石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	砥石	荒砥	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		中砥 上野産	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.51%	1	0.05%
仕上砥 鳴滝産	2	0.24%	5	5.68%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.37%		
石	チャート	1	0.12%	1	1.14%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%	
	岩石	1	0.12%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.11%	
木製品	製 品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.49%	7	2.41%	0	0.00%	9	0.48%	
	縄	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.34%	0	0.00%	1	0.05%	
自然遺物	動物骨	2	0.24%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.69%	0	0.00%	4	0.21%	
	貝	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	1.03%	0	0.00%	3	0.16%	
	近世遺物	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	8	4.08%	8	4.08%	8	0.43%	
不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.73%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.16%		
合計		831	100%	88	100%	66	100%	410	100%	291	100%	196	100%	1882	100%	

表 12 出土遺物計量表（2）



池について

鎌倉の永福寺、京都の法勝寺、平泉の毛越寺の大泉池の等の取水口の位置から推測される池の水流の方向は本堂を背に左後ろから水を入れて右手前方向に流していたとされる。第1期の池で考えるならば寺院もしくは屋敷か、主体は不明であるが、調査区外南西にあるのではないだろうか。そして第3期の掘立柱建物、次いで第4期の礎石建物はこの時に空間の主体が調査区に及んできたのであろう。掘立柱建物から礎石建物への軸方向を同じくする建物の変遷は屋敷地から寺への変化を指摘したい。

炭化層について

第4期、第5期の炭化層について、『吾妻鏡』等の文献からそれにあたる記事を三例抜き出してみた。出土遺物が少なく、詳細な年代は掴めないが第4期、第5期とも、13世紀後半とみている。第4期の上に堆積していた炭化層は厚いところで10cmにもおよび大火であったことが窺われ、相応の記事になっていることが推測される。いずれかに当てはまるであろう。

建長四年（1252）二月八日条 大火事、西は寿福寺の前、東は山王堂の前、南は和賀江、北は若宮大路の上、その内残るところなしと云々。『吾妻鏡』

建長五年（1253）経師ヶ谷口より出火、浜の高御倉まで延焼し、十数人焼死する。『吾妻鏡』

永仁四年（1296）十二月十一日条 大焼亡、名越大小諸堂屋舎不残一字、焼死者五百余人云々『随聞私記』

出土遺物と計量比について

出土遺物は縄文時代土器が1片出土しているほか、古墳時代後期の土器が出土し、奈良・平安時代、

鎌倉時代に及ぶ。鎌倉時代では、12世紀末の手捏ねかわらけの出土がある。出土した遺物の総破片数は表14にまとめた。やはりかわらけ、常滑の出土は多いが、3b面より下層では土師器の出土も目立つ。

特記すべき遺物として、第IV面の池1の暗渠付近で木製品の羽子板の出土がある。羽子板は「こぎいた」ともいい、「こぎ」は「胡鬼」と書きすなわち西方胡国の鬼の意で、羽は鬼の目玉であり、胡鬼板にはそれを打って鬼を払う呪意が込められている。文献上の羽子板の初見は貞成親王の『看聞日記』永享四(1432)正月5日条の記事であり、同六年にも「こぎ板」の名が見える。考古学資料としては、鎌倉市蔵屋敷東遺跡や佐助ヶ谷遺跡の鎌倉時代後期(13世紀後半頃)の例、広島市草戸千軒町遺跡の鎌倉時代末期から南北朝にかけて(14世紀前半～中葉)の出土例がある。それらを鑑みると今回の羽子板の出土は現時点で、日本最古と言えよう。貴重な発見である。

羽子板の近くでは縄が出土している。太さから、日常使うものよりはやや太めであり、注連縄の可能性も視野に入れたい。注連縄は編む向きにより体現するものが違う。出土した縄は右方向に編んだ右絢えであり、これは太陽の巡行に逆行し、水(女性)を表している。池1からの出土は興味深い。材質は藁とみていいだろう。

1997年に馬淵が試みた総破片数計量による中世都市鎌倉の食器消費の状況から論じた食文化のあり方(1997馬淵)をふまえ、遺跡の傾向を見ていきたい。

馬淵は市内を都市中核部・武家屋敷・町屋地区・海岸部の四つ分け、とりわけ、「土師器皿」(かわらけ)の消費のあり方に注目して比較検討している。今回の遺跡の位置は地理的には海岸部と言えようか。遺跡の傾向としては寺院的でもあり、屋敷的でもある。遺物の量比を見ていきたい。かわらけ、国産陶器、中国陶磁器の順で68.78:17.17:1.06である。遺物の全体の出土傾向は馬淵の分類によれば「町屋的」というに近いが、決め手に欠く。

今回の調査では主軸を同じくする礎石建物と掘立柱建物、浄土庭園を彷彿させる暗渠を伴う池の発見、日本最古の羽子板も出土している。

調査地点は鎌倉の東の端であり、和賀江島に近いことや、谷戸全体が宗教的区間でありながら名越氏の屋敷があったとされること、また「高御蔵」という地名の残る、非常に歴史的な意味合いを含む谷戸である。今後十分な検討が必要とされよう。

## 引用参考文献

- 上本進二 2000 「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子棧敷戸遺跡』東国歴史考古学研究所  
高橋慎一郎 1996 『都市と武士』吉川弘文館  
伊藤一美 1994 「鎌倉の内湊町「飯島」と和賀江津」『歴史の中の都市と村落社会』恩文閣出版  
上横手雅敬 2009 『権力と仏教の中世史』法蔵館  
赤星直忠 1980 『中世考古学の研究』有隣堂  
1990 『としよりのはなし』鎌倉市教育委員会  
1070 『新編鎌倉志』雄山閣  
松吉大樹 『災害考古学』  
馬淵和雄 1997 「食器から見た中世鎌倉の都市空間」『国立民族博物館研究報告』71 国立民族博物館  
馬淵和雄 2008 「羽子板」『歴史考古学大辞典』  
貫志正造・永原慶二 1989 『全譯 吾妻鏡』新人物往来社  
1975 『神奈川県史』3 神奈川県  
貫達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺辞典』有隣堂  
仲隆裕 2010 「浄土庭園の系譜」『浄土庭園の変遷』足利市教育委員会  
八重樫忠郎 2010 「浄土庭園の広がり－平泉－」『浄土庭園の変遷』足利市教育委員会



▲海を望む（弁ヶ谷の北の山上から・矢印は調査地点）



▲和賀江島を望む（弁ヶ谷の北の山上から・矢印は調査地点）



▲新善光寺の谷戸を望む（南から・矢印は調査地点）



▲近景（南から・矢印は調査地点）



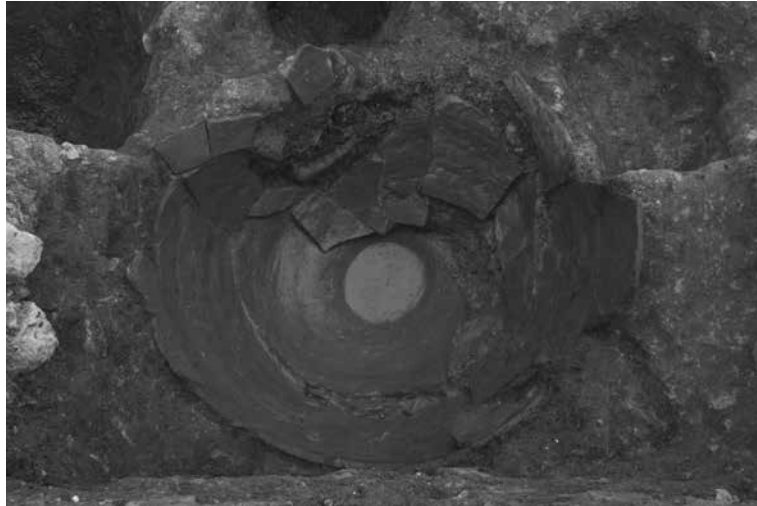
▲ 第Ⅰ面全景（北西から）



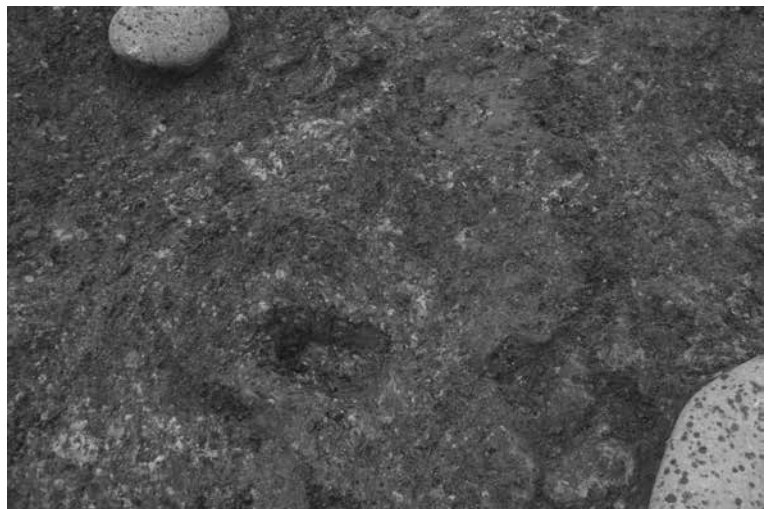
▲ 第Ⅰ面 常滑据甃（北から）



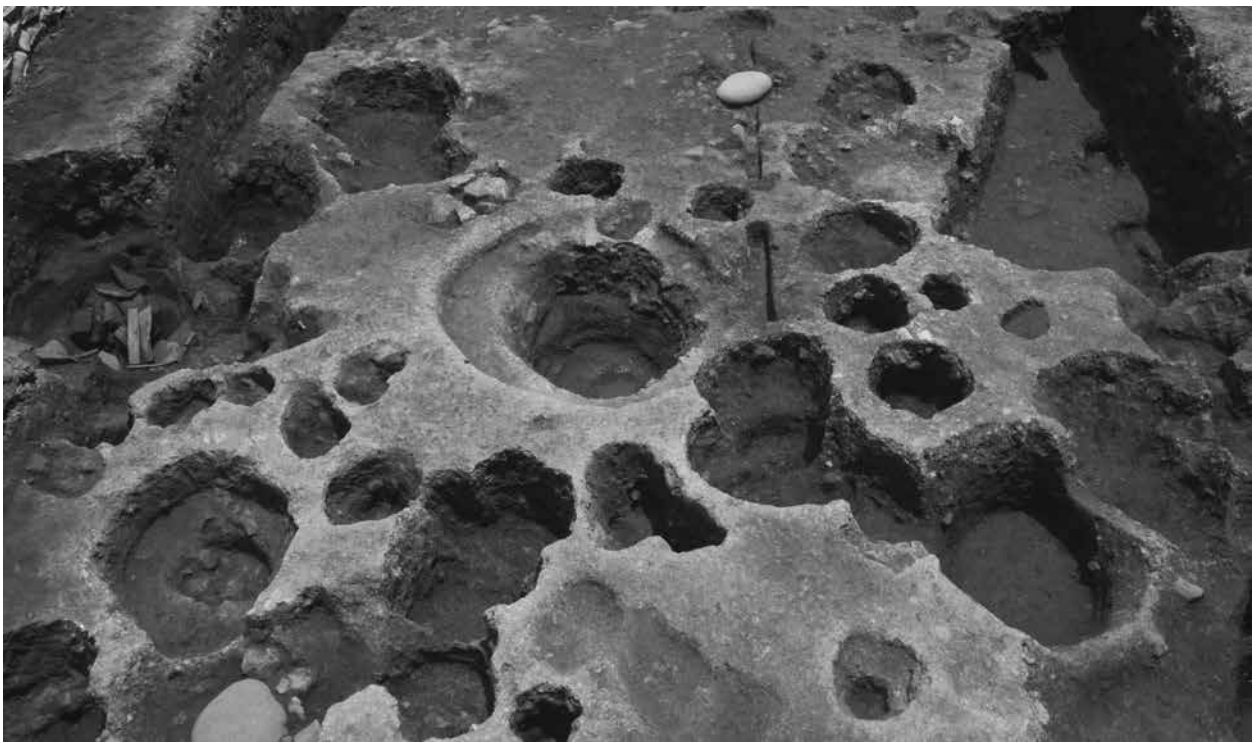
▲ 第1面 常滑据甕 上層 (南西から)



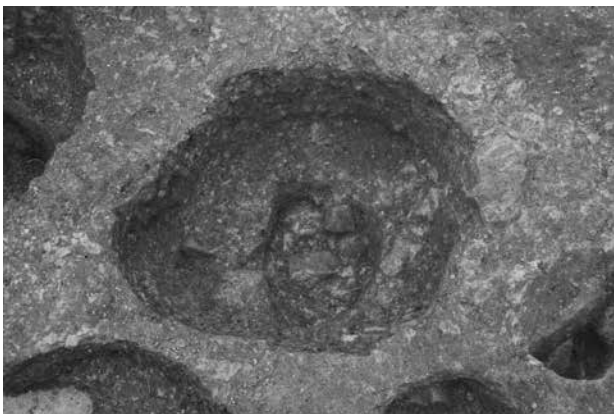
▲ 第1面 常滑据甕 下層 (北東から)



▲ 第1面 常滑据甕 掘り方 (北東から)



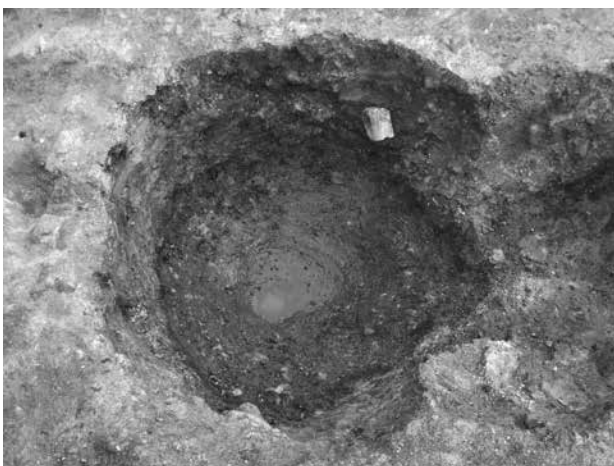
▲ 第1面 建物1 (北西から)



▲ 第1面 土坑1 (南西から)



▲ 第1面 土坑11 (北西から)



▲ 第1面 土坑4 (北から)



▲ 第1面 土坑5 (東から)





▲ 第1面 土坑5 土層堆積状況(南西から)



▲ 第1面 土坑4 土層堆積状況 (南から)



▲ 第1面 土坑2(南東から)



▲ 第1面 土坑7 (東から)



▲ 第1面 柱穴24 (南から)



▲ 第1面 落ち込み1 護岸 (東から)



▲ 第1b面 全景（北西から）



▲ 第1b面 部分（北から）



▲ 第1b面 方形土坑（南東から）



▲ 第II面 全景 (根太木痕・南から)



▲ 第II面 全景 (南から)



▲ 第II面 全景 (南東から)



▲ 遺物出土状況



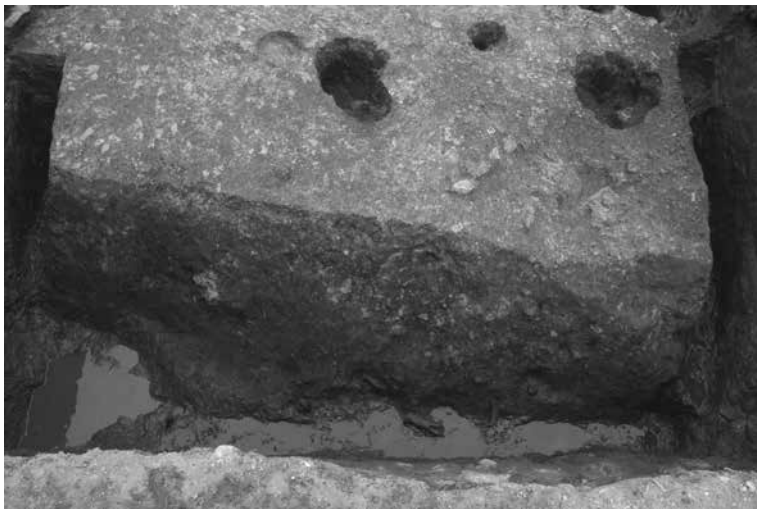
▲ 第II面 礎石列 (南から)



▲ 作業風景



▲ 第Ⅲ面 全景（南から）



▲ 第Ⅲ面 落ち込み3（東から）



▲ 第Ⅲ面 落ち込み3（南西から）



▲ 第II面の礎石建物と第III面の掘立柱建物が踏襲されている様子  
(柱はP137・南東から)



▲ 第III面建物4 柱穴 140 (南から)



▲ 第III面建物4 柱穴 150 (北西から)



▲ 第III面建物4 柱穴 146 (南西から)



▲ 第III面建物4 柱穴 241 (南から)



▲ 第Ⅲ面建物4柱穴152 (南西から)



▲ 第Ⅲ面建物4柱穴160 (南西から)



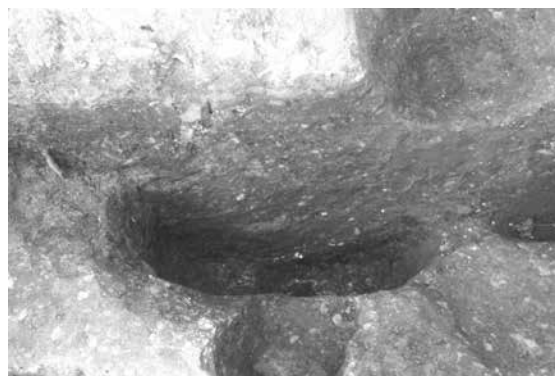
▲ 第Ⅲ面建物4柱穴137 (南から)



▲ 第Ⅲ面 木樋 (南から)



▲ 第Ⅲ面 木樋 (北から)



▲ 第Ⅲb面井戸1 (南西から)



▲ 第IV面 全景 (南西から)



▲ 第IV面 全景 (北西から)





▲ 第IV面 暗渠周辺 (池・暗渠・溝・川・南から)



▲ 第IV面 溝1 (北から)



▲第IV面 池1 土層堆積状況 (南から)



▲ 第IV面 池1 遺物出土状況・櫛（南から）



▲第IV面 池1 遺物出土状況・羽子板（南から）



▲ 第IV面 暗渠（南から）



▲ 第IV面 池1 出土遺物・縄



▲作業風景



▲ 第IV面 暗渠 (南西から)



▲ 第IV面 暗渠 (蓋を取った状況・南西から)



▲ 調査区北壁堆積土層 (西半部・南西から)



▲ 調査区北壁堆積土層 (東半部・南西から)



▲ 調査区南壁堆積土層 (東半部・北東から)



▲ 調査区南壁堆積土層 (西半部・北東から)



調整痕



押印



作業風景

图7 常滑据甕

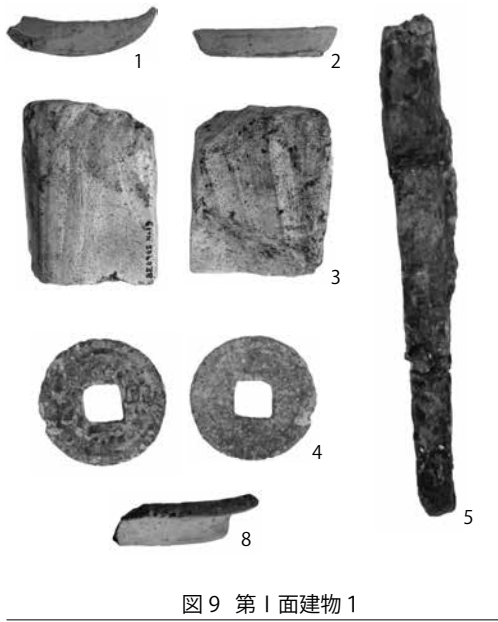


図9 第I面建物1

図10 第I面建物2

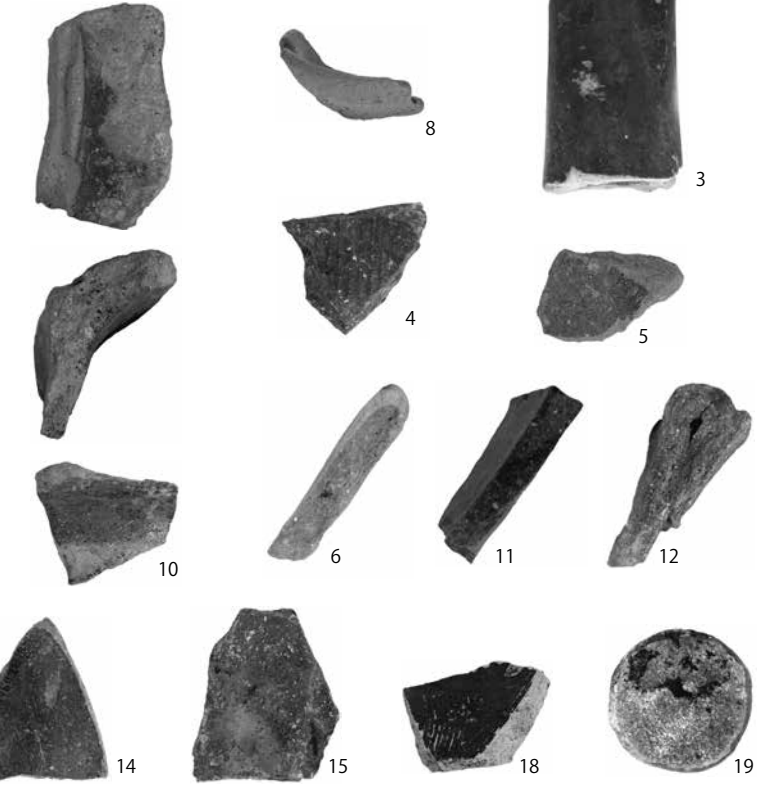


図12 第I面落ち込み

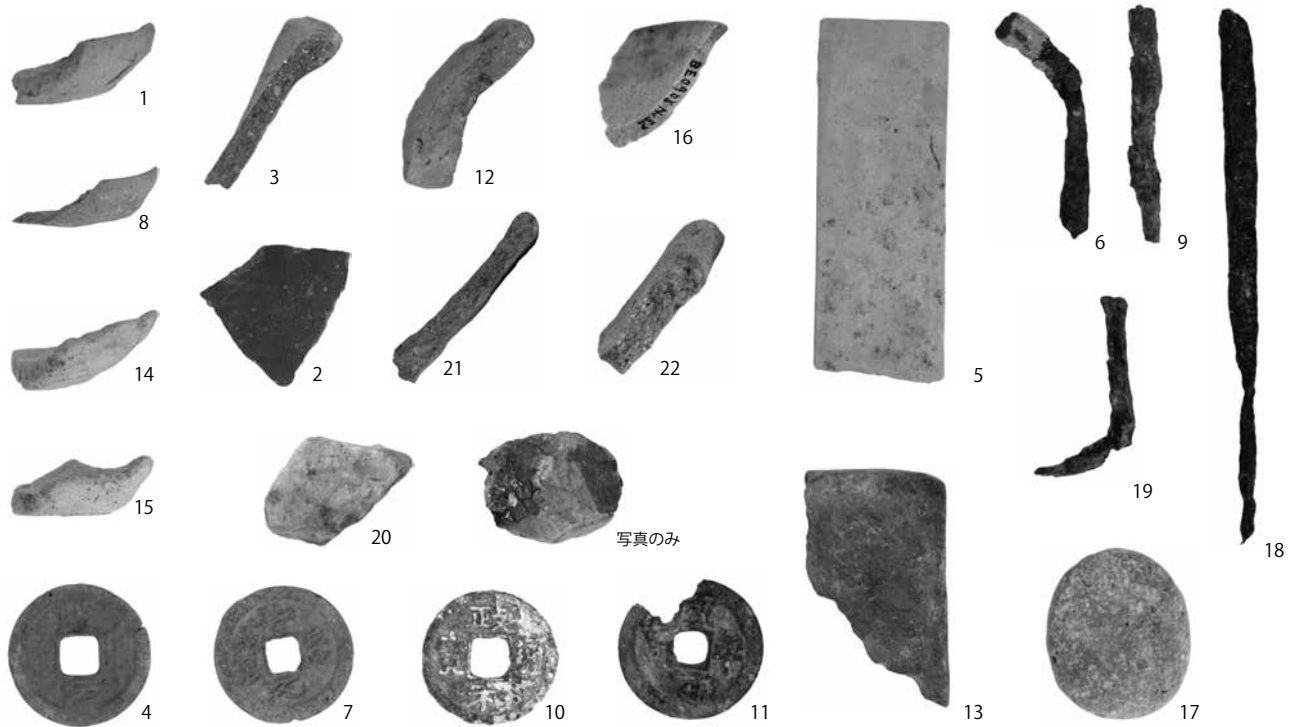


図13 第I面土坑・柱穴

図版 19

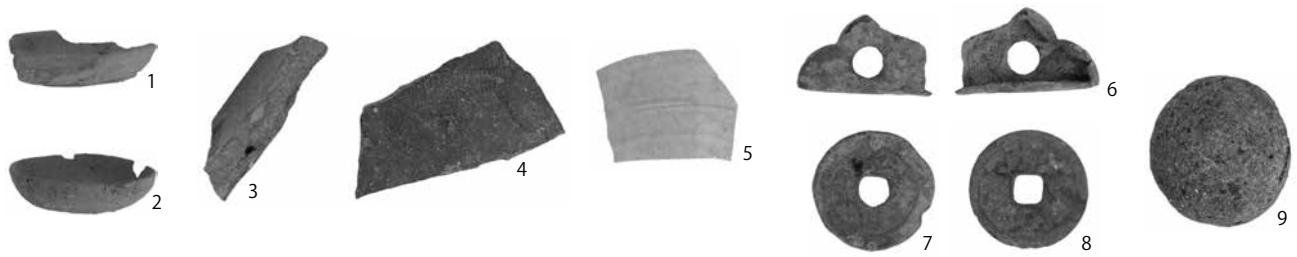


図 14 第 I 面直上

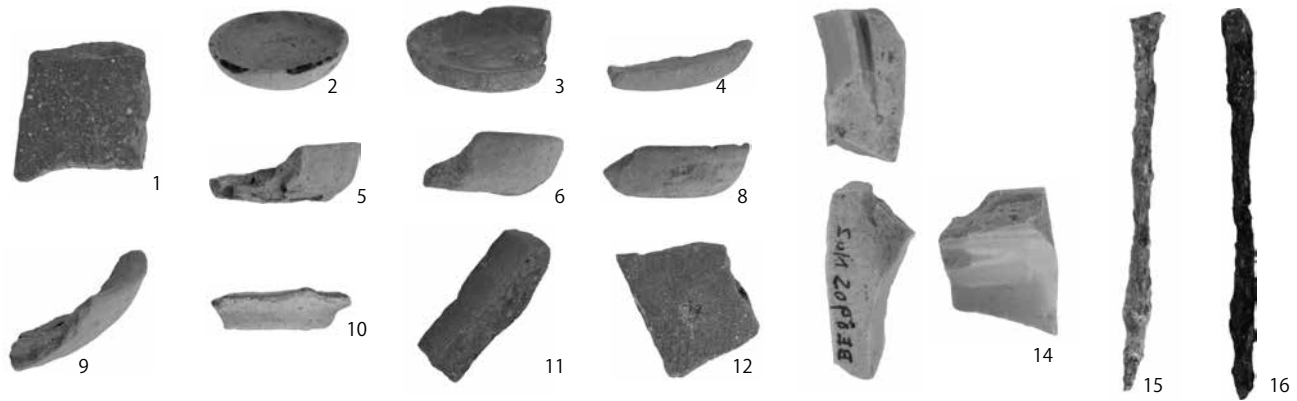


図 15 第 I 面出土遺物

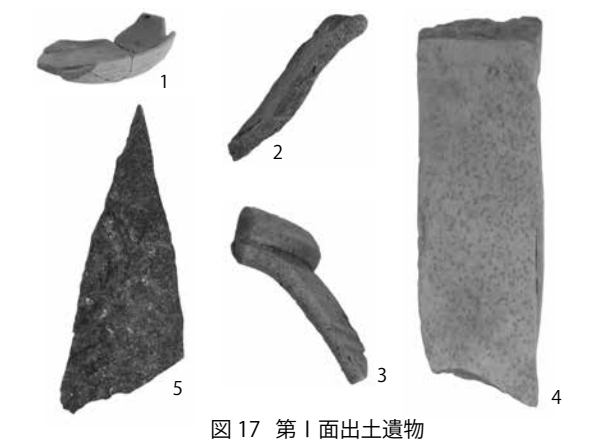


図 17 第 I 面出土遺物



図 18 第 I 面から第 I b 面まで出土遺物

写真のみ



图 19 炭化層出土遺物

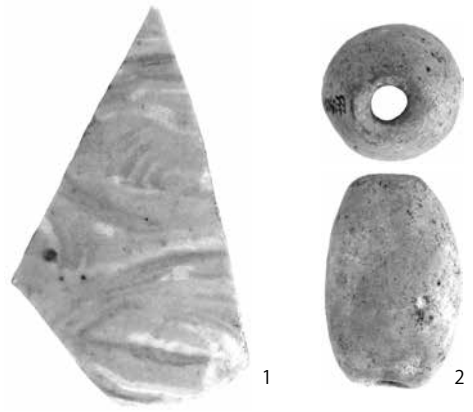


图 20 第Ⅱ面出土遺物



图 21 第Ⅱ面礎石

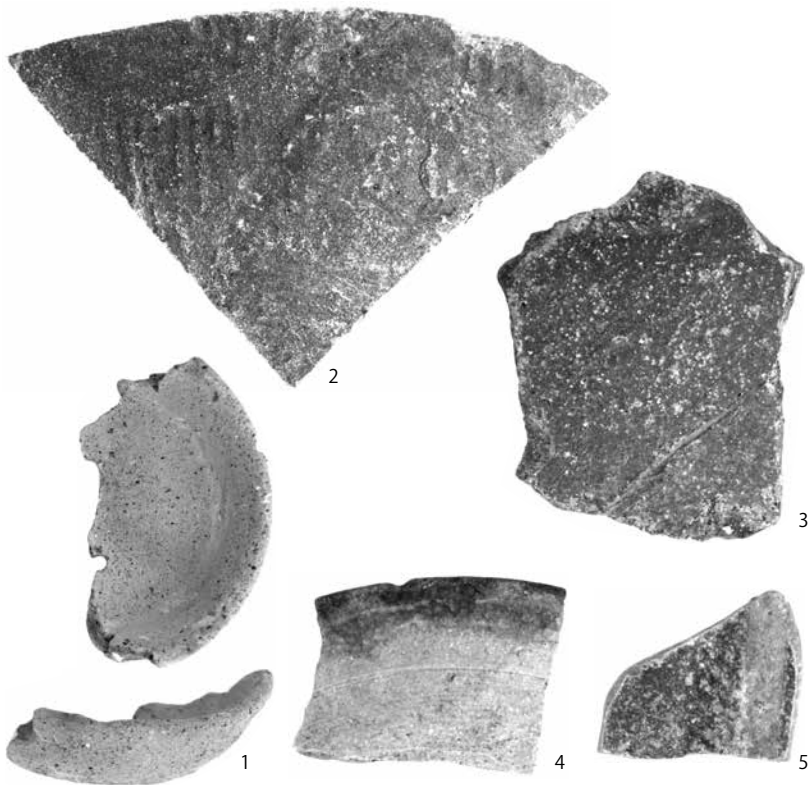


图 22 第Ⅱ面落ち込み出土遺物

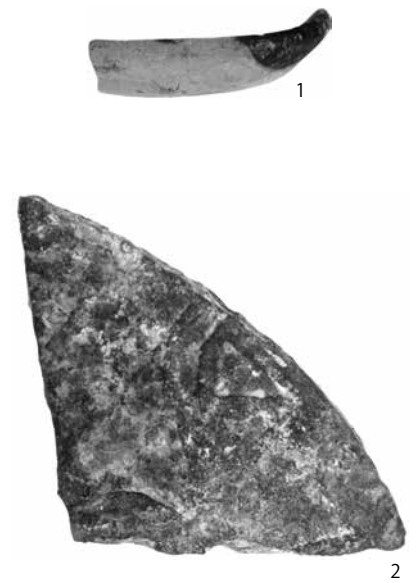
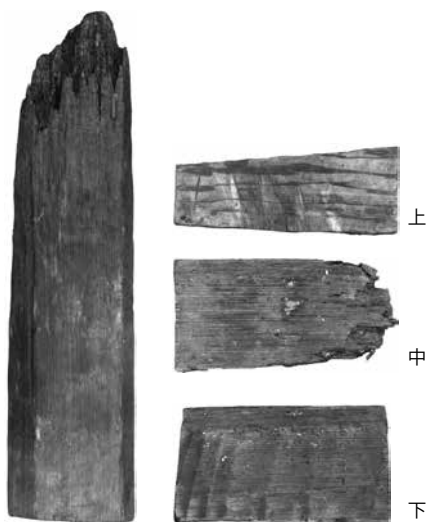


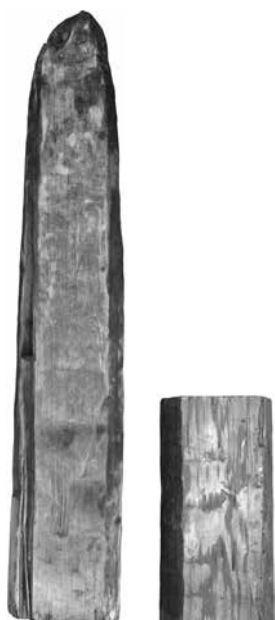
图 24 第Ⅲ面建物 4 出土遺物



柱穴 137



柱穴 146



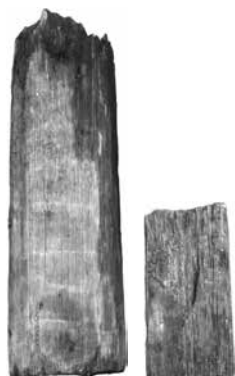
柱穴 150



柱穴 155



柱穴 152



柱穴 160



图 25 柱·礎板





図 28 第Ⅲ面落ち込み出土遺物

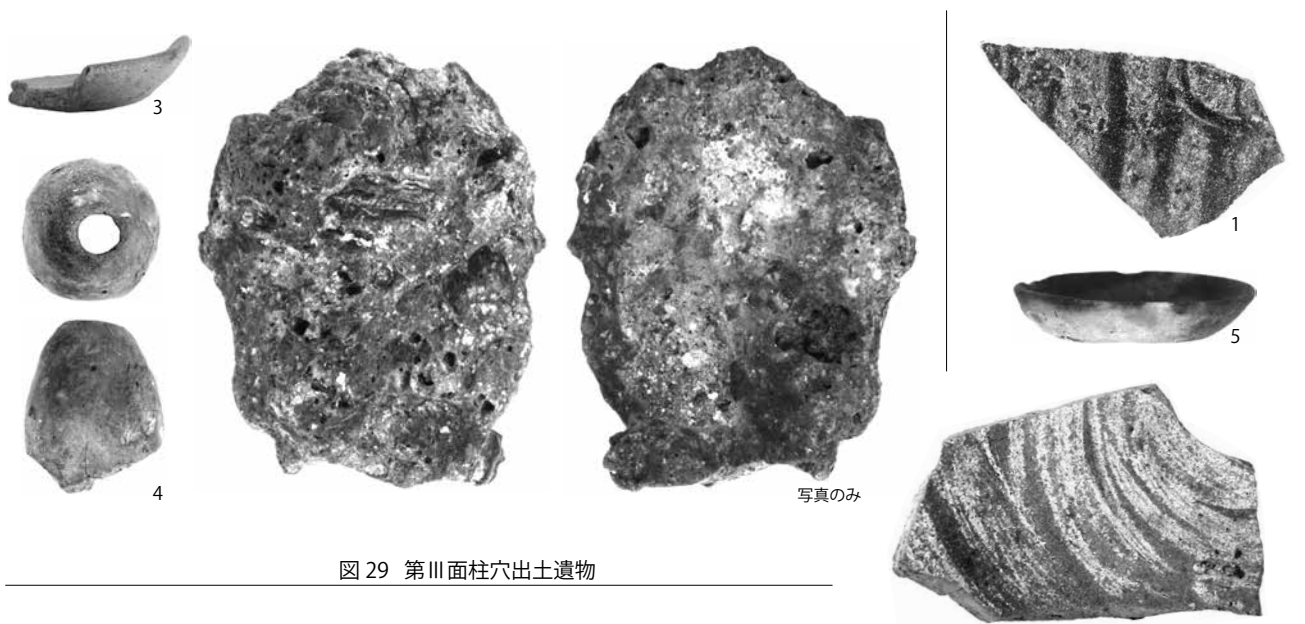


図 29 第Ⅲ面柱穴出土遺物

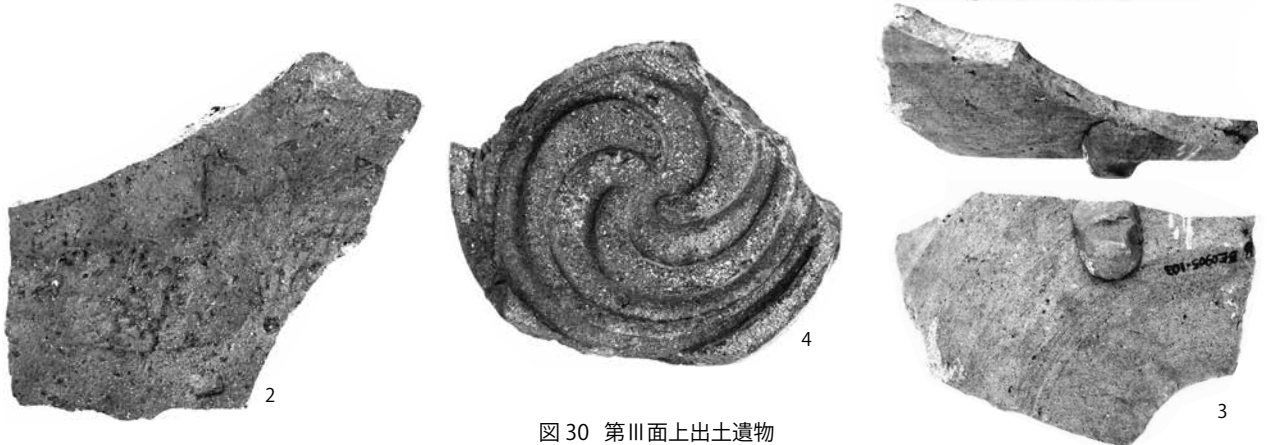


図 30 第Ⅲ面上出土遺物

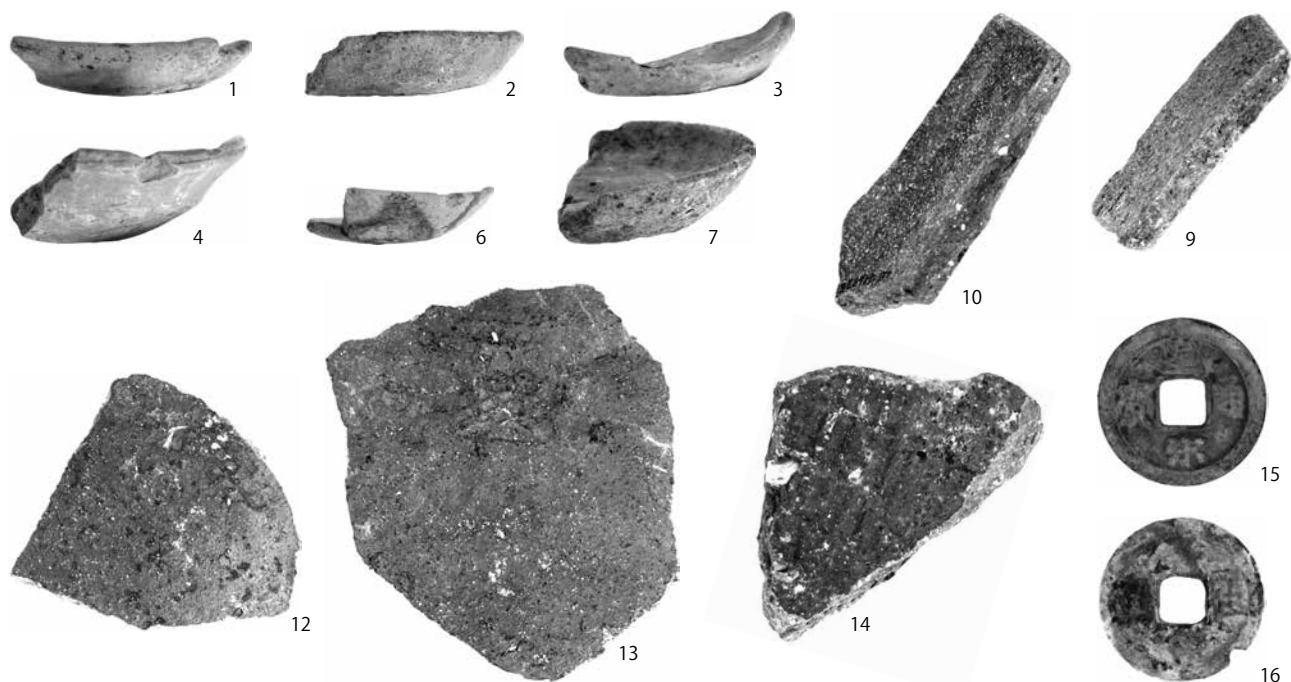


図 31 第III面出土遺物

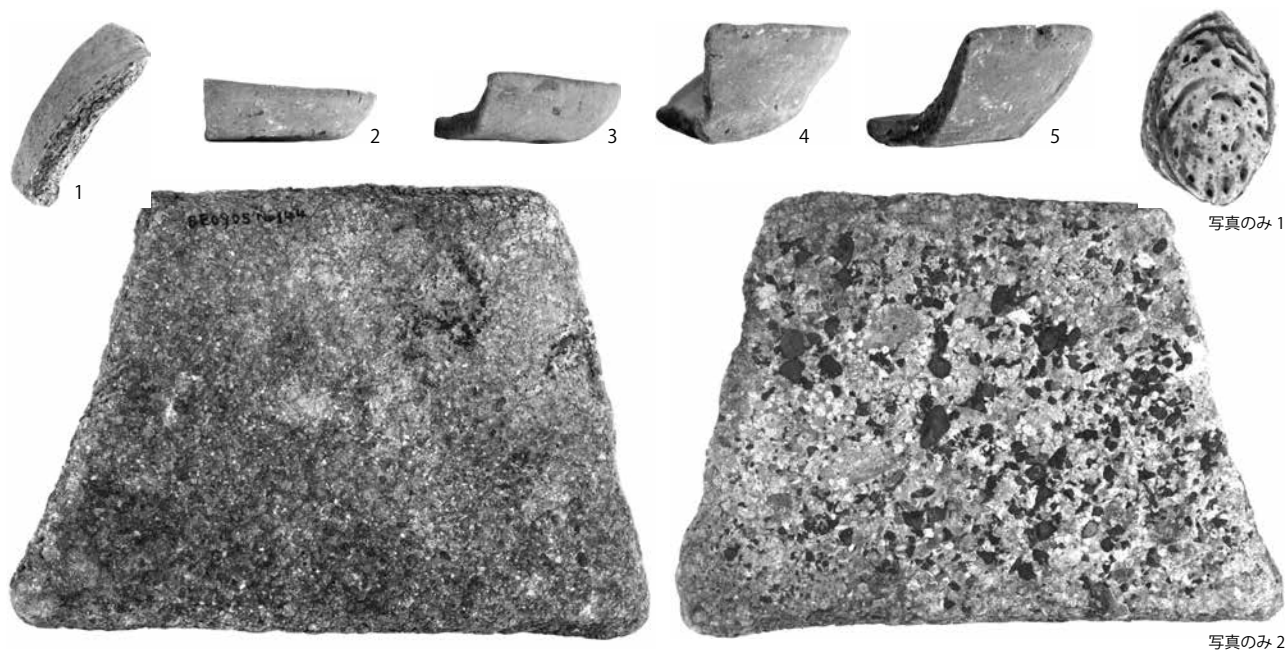


図 33 第IIIb面井戸1出土遺物

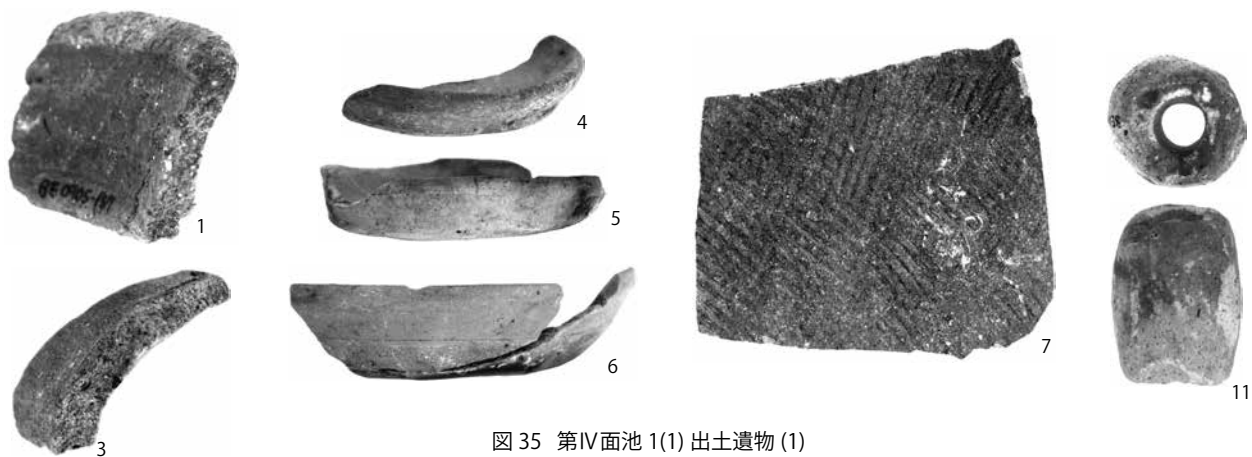


図 35 第IV面池1(1)出土遺物(1)

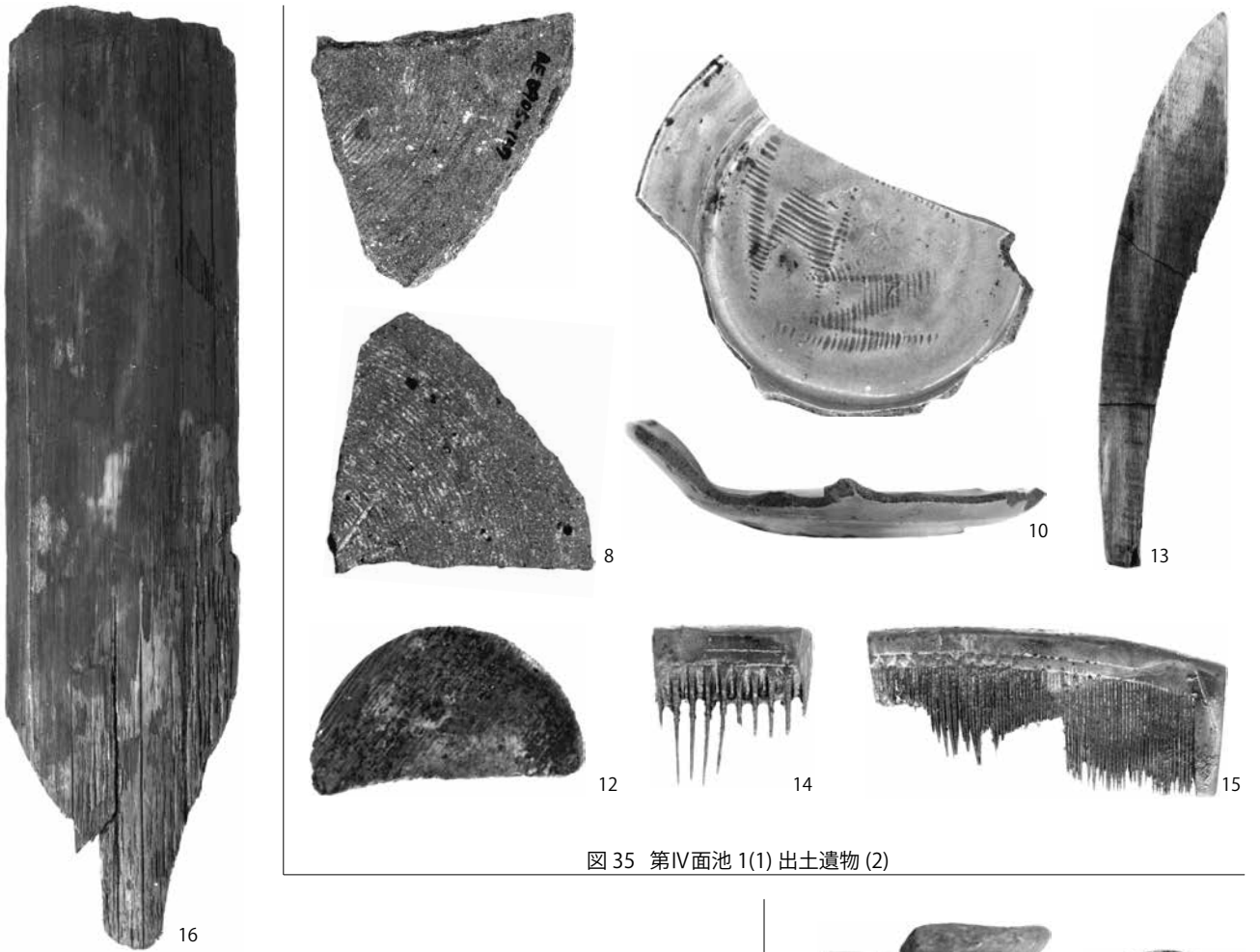


图 35 第IV面池 1(1) 出土遺物 (2)



图 35 第IV面池 1(2) 出土遺物

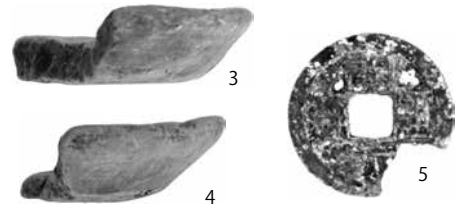


图 39 第IV面溝 1 出土遺物

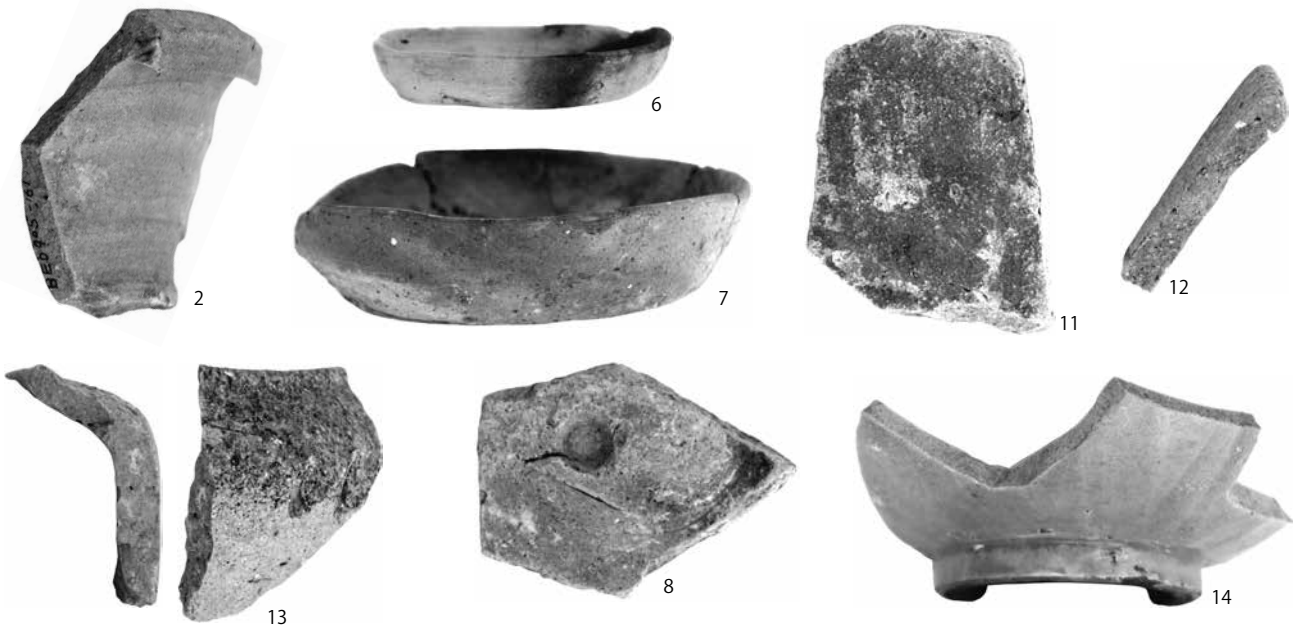


图 40 第IV面上出土遺物

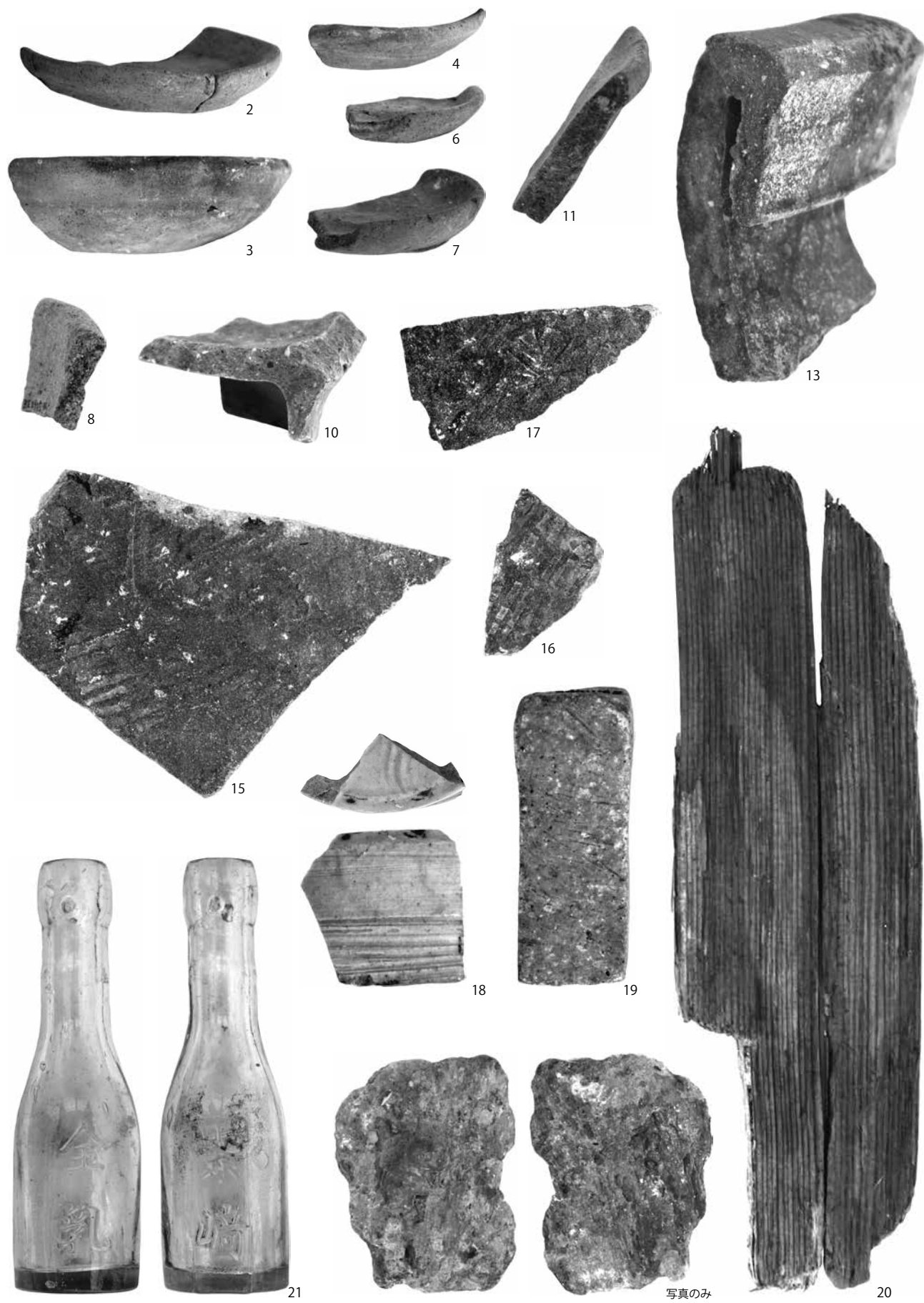


図 41 表採遺物

写真のみ